



Title	韓国語一型アクセントの研究
Author(s)	崔, 鉉鎭
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12511号
Issue Date	2017-03-23
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k12511
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65372
Type	doctoral thesis
File Information	Choi_Hyunjin.pdf



博士学位論文

韓国語一型アクセントの研究

北海道大学文学研究科

崔 鉉 鎭

平成 28 年度
博士学位論文

韓国語一型アクセントの研究

この論文を博士(文学)学位論文として提出する
提出：2016 年 11 月 30 日

北海道大学大学院文学研究科
言語文学専攻

指導教員 李連珠
氏 名 崔鉉鎭

博士学位論文

韓国語一型アクセントの研究

北海道大学文学研究科

崔 鉉 鎭

目 次

第一章 序論	1
1. 1. 研究の背景と目的	1
1. 2. 論文の構成	1
1. 3. 表記及び調査方法	2
1. 3. 1. 表記	2
1. 3. 2. 調査方法	3
1. 4. 調査地域	3
第二章 先行研究	4
2. 1. 一型アクセントの定義及び概念	4
2. 1. 1. 一型アクセントと無アクセントを異なる概念として捉える立場	4
2. 1. 2. 一型アクセントと無アクセントを同じ概念として捉える立場	6
2. 2. 「準声調方言」と「非声調方言」	7
2. 3. 筆者による「韓国語一型アクセント」の定義	8
2. 4. 韓国語一型アクセント方言に関する先行研究	9
2. 4. 1. 先行研究	9
2. 4. 2. 解釈及びまとめ	16
第三章 各方言の記述と分析	17
3. 1. チョンヤン方言	17
3. 1. 1. 調査期間及びインフォーマント情報	17
3. 1. 2. 言い切り形における名詞の音調的特徴	17
3. 1. 3. 言い切り形と接続形の相違	22
3. 1. 4. チョンヤン方言におけるアクセント単位の認定の必要性及び認定基準	25
3. 1. 4. 1. アクセント単位の定義	25
3. 1. 4. 2. アクセント単位認定の必要性の検討	25
3. 1. 4. 3. アクセント単位の認定に関わる要素	27
3. 1. 4. 4. まとめ	29
3. 1. 5. 複合名詞の音調的特徴	30
3. 1. 5. 1. 5 音節以下の複合名詞	30
3. 1. 5. 2. 6 音節以上の複合名詞	32
3. 1. 5. 3. まとめ	34
3. 1. 6. 用言の音調的特徴	34

3.1.7. まとめ	37
3.2. ソウル方言	38
3.2.1. 先行研究	38
3.2.2. 調査期間及びインフォーマント情報	42
3.2.3. 言い切り形における名詞の音調的特徴	42
3.2.4. 言い切り形と接続形の相違	47
3.2.5. 最後の音節のみ高く現れる音調型について	48
3.2.6. 複合名詞の音調的特徴	48
3.2.7. 用言の音調的特徴	50
3.2.8. まとめ	51
3.3. ナジュ方言	53
3.3.1. 先行研究	53
3.3.2. 調査期間及びインフォーマント情報	54
3.3.3. 言い切り形における音調的特徴	54
3.3.3.1. パターン①の特徴	55
3.3.3.2. パターン②の特徴	56
3.3.3.3. パターン③の特徴	57
3.3.3.4. 分節音と音調型の関係	58
3.3.3.5. まとめ	59
3.3.4. 言い切り形と接続形の相違	60
3.3.5. 複合名詞の音調的特徴	61
3.3.6. 用言の音調的特徴	62
3.3.7. まとめ	63
3.4. コソン方言	65
3.4.1. 先行研究	65
3.4.2. 調査期間及びインフォーマント情報	67
3.4.3. 言い切り形における音調的特徴	67
3.4.4. 言い切り形と接続形の相違	72
3.4.5. カンヌン方言との比較考察	73
3.4.5.1. カンヌン方言のアクセント体系	73
3.4.5.2. 比較考察	75
3.4.6. まとめ	77
第四章 韓国語一型アクセントの特性	79
4.1. 言い切り形に見られる特徴	79
4.1.1. 分節音と音調型の関係	81

4.1.1.1.	先行研究	81
4.1.1.2.	チョンヤン、ソウル、ナジュ、コソン方言と分節音	82
4.1.1.3.	アクセントの対立を持つ方言と分節音	86
4.1.1.4.	まとめ	89
4.1.2.	音調型の数	90
4.1.2.1.	チョンヤン方言	90
4.1.2.2.	ソウル方言	91
4.1.2.3.	ナジュ方言	91
4.1.2.4.	コソン方言	92
4.1.2.5.	まとめ	93
4.2.	接続形に見られる特徴	93
4.2.1.	4つの方言における言い切り形と接続形の相違	94
4.2.2.	多型アクセントとN型アクセントにおける言い切り形と接続形の相違	97
4.2.3.	まとめ	99
4.3.	韓国語一型アクセントの諸特性の提示	99
第五章 日韓一型アクセントの対照言語学的考察		102
5.1.	日本語一型アクセントに関する先行研究	102
5.1.1.	九州地方の一型アクセントに関する記述	102
5.1.2.	四国地方の一型アクセントに関する記述	107
5.1.3.	中部地方の一型アクセントに関する記述	108
5.1.4.	関東地方の一型アクセントに関する記述	109
5.1.5.	東北地方の一型アクセントに関する記述	111
5.1.6.	まとめ	113
5.2.	日韓一型アクセントの言語地理学的分布	113
5.2.1.	日本語の場合	114
5.2.2.	韓国語の場合	115
5.3.	日韓一型アクセントの対照言語学的考察	116
5.3.1.	音調型の数	116
5.3.1.1.	日本語の場合	116
5.3.1.2.	韓国語の場合	118
5.3.1.3.	まとめ	120
5.3.2.	音韻構造と音調型の関係	120
5.3.2.1.	分節音と音調型の関係	120
5.3.2.2.	音節構造と音調型の関係	122
5.3.2.3.	まとめ	125

5.3.3. 言い切り形と接続形の相違	125
5.3.3.1. 日本語の場合	125
5.3.3.2. 韓国語の場合	128
5.3.3.3. まとめ	130
5.4. 本章のまとめ	131
 第六章 結論	 132
6.1. 本論文のまとめ	132
6.2. 今後の課題	135
 〈参考文献〉	 136
 〈謝辞〉	 141

表 目次

表1 孫在賢(2005a)によるチェチョン方言の音調型	10
表2 孫在賢(2005a)によるソギボ方言の音調型	11
表3 孫在賢(2007a)によるインジェ方言・コソン方言の音調型	12
表4 孫在賢(2007a)によるヤンヤン方言・ソクチョ方言の音調型	12
表5 孫在賢(2007a)によるヤング方言の音調型	13
表6 孫在賢(2007a)によるイクサン方言・スンチャン方言の音調型	14
表7 孫在賢(2007a)によるソウル方言の音調型	14
表8 李華春(2013a)による撫順方言の音調型	15
表9 チョンヤン方言の言い切り形における音調型	22
表10 チョンヤン方言における一型アクセント(言い切り形)	22
表11 ソウル方言における言い切り形の音調型	46
表12 長母音を持つパターン①における長さごとの現れ方(言い切り形)	55
表13 短母音を持つパターン①における長さごとの現れ方(言い切り形)	56
表14 パターン②における長さごとの現れ方(言い切り形)	57
表15 パターン③における長さごとの現れ方(言い切り形)	57
表16 ナジュ方言における分節音と音調型の関係	59
表17 コソン方言における言い切り形の音調型	72
表18 崔鉉鎭(2013a)によるカンヌン方言のアクセント体系	73

表 19	ソウル、ナムウォン、撫順方言における 2 音節名詞の音調型の対応(李連珠 2015)	81
表 20	ソウル、ナムウォン、撫順方言における 音調型と分節音の関係(李連珠 2015)	81
表 21	孫在賢(2007a)によるカンヌン・トンヘ方言の言い切り形と接続形の相違	97
表 22	孫在賢(2007a)によるヨンウォル方言の言い切り形と接続形の相違	98

図 目次

図 1	調査地域	3
図 2	日本語全国方言のアクセント分布図(平山 1986:42)	114
図 3	韓国語全国方言のアクセント分布図(福井 2013:204)	115

第一章 序論

1.1. 研究の背景と目的

従来、韓国語諸方言のアクセント研究においてアクセントの対立を持たない方言は常にアクセント研究から外されてきた経緯があった。一部の方言を対象とした断片的な記述はみられるものの、本格的なアクセント研究が殆ど進んでいないのが現状である。それゆえ、アクセントの対立を持たない方言にはどのような特徴が見られるのか、また、アクセントの対立を持たない諸方言の間にはどのような共通点と相違点が存在するのかなど、アクセントの対立を持たない方言の特徴について未だに明らかにされていない部分が多い。福井(2001)によると、韓国のソウル、キョンギ(京畿)道¹、チュンチョン(忠清)道、チェジュ(済州)道及び北朝鮮ではハムギョン(咸鏡)道以外の地域で弁別的な高低アクセントが存在するという報告がまったくされていないと述べている。これはこれらの地域にアクセントの対立を持たない方言が数多く分布している可能性が高いことを示唆する。

従って、本論文では、一型アクセントに関する先行研究を踏まえた後、筆者による韓国語一型アクセントの定義を行う。そして、その定義に基づき、チョンヤン(青陽)方言、ソウル方言、ナジュ(羅州)方言、コソン(高城)方言の4つの方言のそれぞれの音調的特徴を詳細に記述し、分析と解釈を行う。その上で、4つの方言を対象に比較考察し、韓国語一型アクセントに現れやすい諸特性について述べる。そして、日本語一型アクセントとの対照を通して両言語に見られる共通点と相違点について述べる。

1.2. 論文の構成

本論文は全六章で構成されている。第一章の序論では研究目的について述べ、音素及び音調の表記を示す。また、調査方法について述べる。第二章は、本論文において最も重要な概念となる「一型アクセント」が研究者の間でどのように捉えられてきたかについて述べた後、筆者による「韓国語一型アクセント」の定義を行う。その上で、韓国語一型アクセントに関する先行研究を概観する。第三章では、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の4つの方言の音調的特徴について記述・分析する。チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言は最初の2音節における音調的様相によって全体の音調型が特徴づけられる方言である。それに対し、コソン方言は次末音節と最後の音節における音調的様相によって全体の音調型が特徴づけられる方言である。第四章では、第三章において取り上げた4つの方言を分節音と音調型の関係、音調型の数、言い切り形と接続形の相違の3つの観点から比較考察を行い、韓国語一型アクセントに見られやすい諸特性について取

¹ 地名表記に関しては基本的にカタカナを用いて原語に近い発音を示すが、最初に言及される場合に限りカタカナと漢字を併記する。行政区域は漢字表記する。尚、図に地名表記を施す場合は常にカナカナと漢字を併記する。

り上げる。第五章では、日韓一型アクセントを対象に音調型の数、音韻構造と音調型の関係、言い切り形と接続形の相違の3つの観点から対照考察を行い、両言語にみられる共通点と相違点について述べる。第六章では、第二章から第五章にかけて述べてきた内容を網羅し本論文をまとめる。そして、今後の課題について述べる。

1.3. 表記及び調査方法

1.3.1. 表記

母音と子音の表記においては以下の表記を用いる。母音8個、子音21個である。年配層では語頭音節が長母音で現れる場合がある。「:」で示す。

母 音 : /i/、/e/、/ɛ/、/a/、/ʌ/、/o/、/u/、/ʊ/

子 音 : /kʰ/、/tʰ/、/pʰ/、/tʰ/、/k'/、/t'/、/p'/、/tʃ/、/s'/、/s/、/h/、/k/、
/t/、/p/、/tʃ/、/n/、/r/、/m/、/ŋ/、/j/、/w/

音調表記において以下の記号を用いる。尚、場合によっては高い音調と低い音調に対し H (High tone) と L (Low tone) を用いる場合もある。下降調は F (Falling tone) で示す。

- ・ 低から高への音調変動: [
- ・ 高から低への音調変動:]
- ・ 音節内下降:]]

その他の表記においては以下の記号を用いる。

- ・ 任意の名詞及び用言の語幹に該当する音節: ○
- ・ 任意の助詞及び活用語尾に該当する音節: ◎
- ・ 言い切り形²: 。
- ・ 接続形: …
- ・ 音節の境界: .
- ・ 形態素の境界: -
- ・ アクセント単位の境界: |
- ・ 句(音調句³)の境界: { }

² 言い切り形と接続形について 3.1.3 節で詳しく取り上げるが、上野(1977)によって提唱された概念として、言い切り形は言い続けるつもりがない場合に現れるものであり、接続形は言い続けるつもりの場合に現れるものである。

³ 音調句(Tonal phrase)とは「固定しているアクセント単位とは異なり、伝えたい意味に応じて話し手が自由にその長さを指定できる伸縮自在の単位」(上野 2011b:322)のことを意味する。句音調ともいう。

1.3.2. 調査方法

調査は記述言語学的手法に基づいて行い、以下の3種類の調査方式から音声データを収集した。

一つ目は、絵と写真を用いて発音してもらう方式である。最も自然な音声データが取れると考えられ、分析・考察する際にはこの方式から収集したデータを優先している。

二つ目は、予め作成した語彙調査表を方言話者に発音してもらう形式である。絵と写真では表せない語彙を補うとともに、分節音あるいは音節構造(軽音節・重音節)と音調型の関係について調査するために行った。語彙調査表は1音節名詞から4音節名詞までを対象に1音節目と2音節目における分節音と音節構造を考慮して組み合わせたものである。

三つ目は、語彙を用い、名詞(+助詞)+用言などのような短文を作って発音してもらう形式である。この調査方式を取った理由は連文節の場合に現れる音調的特徴を明らかにするためである。その他にも、場合に応じて自然談話を収集する方式も取った。

1.4. 調査地域

本論文で取り上げるチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言が使われる地域を以下の図1に示す。



図1 調査地域

第二章 先行研究

本章では、まず、先行研究において「一型アクセント」がどのように捉えられてきたか、その概念と定義を概観する。一型アクセントはアクセントの対立を持たない点からしばしば「無アクセント(あるいは無型アクセント)」と呼ばれる場合がある。両者の相違をめぐって両者を異なる概念と捉える立場と同じ概念と捉える立場に分かれているため、各々の立場における一型アクセントの定義について取り上げる。

次に、韓国語の先行研究としてキム・チャギョン(1999)の「準声調方言」と「非声調方言」について述べる。韓国では従来、声調論⁴に基づいた研究が盛んに行われてきたため、一型アクセントという用語は用いられていない。但し、キム・チャギョン(1999)の「準声調方言」と「非声調方言」は一型アクセントと類似した概念として捉えられるため、これらの概念について取り上げる。最後に、これらの先行研究を踏まえつつ、筆者による韓国語一型アクセントの定義を行った上で、韓国語一型アクセントに関する先行研究について概観する。

2.1. 一型アクセントの定義及び概念

「一型アクセント」という用語は平山輝男氏によって初めて用いられ⁵、その後、多くの研究者らにより広く用いられてきている。一型アクセントの定義及び概念を捉える上で、「無アクセント」という概念が密接に関わってくる。両者はアクセントによる対立を持たない点において共通している。一方、一型アクセントと無アクセントの相違をめぐって、研究者の間で両者を異なる概念と捉える立場と同じ概念と捉える立場で分かれている。そのため、どちらの立場から一型アクセントを捉えるかによってその定義は変わってくる。

一型アクセントと無アクセントを異なる概念と捉える立場としては平山(1974、1975)⁶と上野(1984、2009、2011a)、Uwano(1999)が代表的である。それに対し、両者を同じ概念と捉える立場としては山口(1998)が代表的である。

2.1.1. 一型アクセントと無アクセントを異なる概念と捉える立場

この立場としては、平山(1974、1975)と上野(1984、2009、2011a)、Uwano(1999)があげられる。お互いに異なる分類基準を設定しているものの、明確な分類基準に基づいて一型

⁴ 音節ごとに音韻的な音の高さが決まっていると捉える立場から分析と解釈を行う理論である。

⁵ 平山(1944)に「一型アクセント」という用語を用いるようになった経緯が述べられている。要約すると、1935年の秋、音声学協会での講演の中で、アクセントによる区別がないものを「一ツ型(ひとつかた)アクセント」或いは「一型(いっけい)アクセント」と呼んで説明していたところ、その夜の晩餐会で三宅武郎氏の助言を受け、「一型アクセント」と名付けたとのこと。

⁶ 最初から一型アクセントと無アクセントを明確に分類する立場に立っていたわけではない。平山(1936、1940a、1944、1955、1957)は両者が異なる性格のものであると認めつつも、同じ一型アクセントとして捉えていたが、平山(1974、1975)からは両者を明確な基準を設けて分類する立場に立っている。

アクセントと無アクセントの分類を行っている。

平山(1974、1975)は、「型知覚」を基準として立て、両者を分類している。型知覚とは「方言の話し手が語や文節などを一定の高低関係の相に発音しようとする意識」(佐藤 1980:27)のことを意味するが、平山(1974、1975)は同じく 1 種類の音調型を持っていても「型知覚」を持つ場合の方言のみを一型アクセントとして捉えており、型知覚を持たない場合は無アクセントと捉えている。例えば、都城方言の場合は、文節において文節末のみ高くなる尻上がり一型であるが、アクセント型が明瞭である上に、方言話者も型知覚を持つ。それに対し、無アクセントの場合は、アクセント型が明瞭ではなく、方言話者自身も型知覚を持たないという。通時的観点から一型アクセントと無アクセントを捉えた場合、一型アクセントは鹿児島二型アクセントが統合した結果によるものであると捉え、「統合一型アクセント」と名付けている一方で、無アクセントはアクセントの崩壊によるものと捉え、「崩壊アクセント」と名付けている。両者の分布については、一型アクセントはごく狭い地域に分布しているが、崩壊アクセントはかなり広い地域に観察され、宮崎市・熊本市をはじめ、四国の大洲市、北陸の福井市、関東の水戸市・宇都宮市、奥羽の福島市・仙台市・山形市など全国にわたって分布しているという。

一方、上野(1984、2009、2011a)、Uwano(1999)は、一型アクセントを「N 型アクセント」⁷の一つのタイプと捉える立場から無アクセントとは異なるものと分類している。但し、分類基準の設定においては相違が見られる。

上野(1984)と Uwano(1999)は「文節表示機能」を分類基準として設定している。例えば、上野(1984)では一型アクセントと解釈される都城方言⁸の場合、「文節性」が保たれ、音調型が文節表示機能を果たしているのに対し、無アクセントと解釈される仙台方言⁹は既に文節から離れ、「句表示機能」のみを持つことが窺えると述べている。但し、都城方言もノや連体形による連体修飾語は次に来る名詞と 1 つのアクセント単位を成す傾向が強く、文節から離れ始めていることが窺える現象が見られるという。

Uwano(1999)は上野(1984)と同様、都城方言と仙台方言を例として挙げつつ、より具体例を提示し、両者に現れる 1 種類の音調型は異なる性質のものであることを述べている。

⁷ N 型アクセントとは、「アクセント単位の長さが増えても、対立数が一定数(N)以上に増えていかない体系」(上野 2012:45)である。上野(1984)により初めて提唱された概念であり、「アクセント単位の長さに応じて対立数が増えていく体系」(上野 2012:45)である「多型アクセント」と対立される概念である。

⁸ 都城方言は文節の最後の音節が常に高い特徴を持つ(Uwano 1999)。

例)	[テ	ヤ[マ	オト[コ	ヤマミ[チ	ヤマノボ[リ
	(手)	(山)	(男)	(山道)	(山登り)

⁹ 仙台方言は句において語頭のモーラと最後のモーラは低くそれ以外のモーラは若干高い特徴を持つ(Uwano 1999)。

例)	[ハ]ナ	ハ[ナ]ダ	コ[ノハ]ナ	コ[ノハナ]ダ	コ[ノハナガソウ]ダ
	(花、鼻)				

Compare the example of sentence in both dialect

Miyakonojo	Sendai
{kag[ga nat[ta}	{ka[gi]nga}{[nat]ta} (Persimmons have grown.)
*{kagga nat[ta}	{ka[ginga nat]ta}

As can be seen from these examples, the pitch pattern in the Miyakonojo dialect marks the end of the syntagma. This shows that in a one-pattern accent system, accent has a demarcative function. The Sendai dialect on the other hand, does not have this function.

(都城方言の音調型は文節末であることを示す。これは一型アクセントにおける音調型が文節表示機能(demarcative function)を持つことを意味する。一方で、仙台方言の音調型はそのような機能を持たない) (Uwano 1999:186)

都城方言と仙台方言は両者とも1種類の音調型しか持たないものの、都城方言の音調型は句を超えず文節ごとに被さるため、音調型が文節表示機能を果たしていると捉えている。それに対し、仙台方言の音調型は文節を超えて句を単位に音調型が被さるため、音調型が文節表示機能を果たしていないと捉えている。これを根拠に都城方言は一型アクセントと解釈し、仙台方言は無アクセントと解釈している。

上野(2009、2011a)はアクセント単位における固有のパターンの有無から一型アクセントと無アクセントを分類している。アクセント単位が単語であるか文節であるかは言語と方言によって多少の出入りはあるものの、アクセント単位で固有のパターンを持つ場合のみを一型アクセントと捉えており、それより大きな単位、例えば、音調句で初めてパターンが決まる場合は無アクセントと捉えている。

2.1.2. 一型アクセントと無アクセントを同じ概念と捉える立場

この立場としては、山口(1998)が代表的である。山口(1998)は音韻論的な面において一型アクセントと無アクセントの両者とも現れる音調型は非弁別的であるため、両者を同じものと捉えている。例えば、一型アクセントの典型的な方言としてよく取り上げられる都城方言の尾高一型アクセントについて『尾高一型』を『一型アクセント』として、『平板一型』を『無アクセント』とするのは、いわゆる音韻的に言うならば、『非弁別的無核型』以外の何者でもないはずである。『型の区別がない、下降があるとしてもその下降に音韻的意味がない、上昇があったとしてもその上昇に音韻的意味はない』ことにポイントがあり、その相違はイントネーションレベルのものであるに他ならず、『一型』と『無型』を峻別する意味自体音韻的に無意味である」(山口 1998:58)と指摘している。

2.2. 「準声調方言」と「非声調方言」

韓国では、声調論による研究が盛んに行われてきているため、一型アクセントという用語及び概念は存在しない。但し、キム・チャギョン(1999)の準声調方言と非声調方言は一型アクセントと似た概念であると言える。キム・チャギョン(1999)は韓国語諸方言について超分節音素から分類を行ったキム・ヨンマン(1986)¹⁰に基づきつつ、声調論による分類を試み、韓国語諸方言を声調方言、準声調方言、非声調方言の3つに分類している。

まず、声調方言は語や文節の高低が相対的に固定された上で、音声学的要素からは高低が予測不可能であるものとして、キョンサン(慶尚)道、カンウォン(江原)道の東部、ハムギョン道、中国延辺が属すると述べている。次に、準声調方言は音の高低と母音の長短のうち、どちらが弁別的であるか判断し難い状態のものである。そのため、母音の長短の観点から見れば高低と強勢が予測可能であり、高低の観点から見れば母音の長短と強勢が予測可能である。クァンジュ(光州)とチョルラ(全羅)南道の一部が属している。最後に、非声調方言は、語や文節の高低が他の音声学的要素によって予測可能であるものとして、ピョンアン(平安)道、ファンヘ(黄海)道、キョンギ道、ソウル、カンウォン道の西部、チュンチョン道、チョルラ北道、チョルラ南道の一部が属すると述べている。

アクセント論から捉えた場合、声調方言は多型アクセントとN型アクセントに似た概念として解釈できる。一方、非声調方言と準声調方言は一型アクセントに似た概念として解釈できる。非声調方言の場合は音的に複数の音調型が現れても音声的要素によって予測可能であるため、当然、一型アクセントと似た概念として捉えられる。準声調方言の場合は母音の長短と音の高低のどちらが弁別的要素であるか決めがたいものであるが、本論文では母音の長短を音素として捉えているため、非声調方言と同じく音声的要素によって音調型の出現条件が予測可能であるものと見る。よって、非声調方言と共に一型アクセントと似た概念として捉えられる。

¹⁰ キム・ヨンマン(1986)は長短と高低を超分節音素として設け、韓国語諸方言の分類を以下のように行っている。

- a. 西部諸方言 (ピョンアン、ファンヘ、キョンギ、ソウル、カンウォンの西部、チュンチョン、チョルラ)
- b. キョンナム(慶南)方言 (ウルサン(蔚山)、ウルチュ(蔚州)、コチャン(居昌)などの北部地方は除く)
- c. キョンブク(慶北)方言 (キョンナムのウルサン・ウルチュ・コチャン、カンウォン道のサムチョク(三陟)を含む)
- d. ハムギョン方言 (カンウォン道の北東部を含む)

上記の分類は中期朝鮮語の平声(コッ類)、去声(プル類)、上声(ピョル類)が現代諸方言においてどのような形で実現されるかに基づいたものである。

aの西部諸方言は長短のみが弁別的な方言としてコッ類とプル類は短音に、ピョル類は長音に現れる。それに対し、bのキョンナム方言とdのハムギョン方言は高低のみが弁別的な方言である。しかし、中期朝鮮語の三類との対応関係及び音調の現れ方において両方言に相違が見られる。キョンナム方言の場合、コッ類は高調、プル類は低調、ピョル類は最低調で現れるが、ハムギョン方言の場合、コッ類とプル類は低調、ピョル類は高調で現れる。一方、cのキョンブク方言は長短と高低両者とも弁別的な方言としてコッ類は短音かつ高調、プル類は短音かつ低調、ピョル類は長音かつ低調で現れる。

2.3. 筆者による「韓国語一型アクセント」の定義

日本語の先行研究においては一型アクセントを無アクセントと同じ概念として認めるか否かによって一型アクセントの定義が変わるといえる。また、一型アクセントと無アクセントを異なる概念として見る立場でも分類基準の設定に相違が見られることが分かった。しかし、先行研究で提示された分類基準は韓国語諸方言における一型アクセントと無アクセントの分類には有効ではないため、取り入れないことにする。

平山(1974、1975)の「型知覚」に関しては、方言話者の意識が絶対的条件となっているため、方言話者の高低感覚に対する敏感さの度合いによって観察の結果が左右されるおそれがある。さらに同じ方言でも型知覚を持つと認められる場合と認められない場合に分かれる可能性が十分あり得る。型知覚の概念を拡大し、話者のアクセントに対する意識までを含めてみる場合、李文淑(2007)は方言話者の主観による判断の危険性についてアクセントの対立を持っているとされるキョンサン道方言の調査が参考になるとして「自分の発音に高低差があることを知っている話者も少なく、まったく高低の区別が付かない話者も少なくない。説明を聞いている間に分かってくる話者もいれば最後まで全く分からない話者もいる。だから、話者の意識を基準にアクセントの有無を論ずるのは非常に危険なことである」(李文淑 2007:31)と指摘している。筆者のこれまでの調査からも上記のような現象がよく見受けられた。

上野(1984)と Uwano(1999)の「文節表示機能」の場合、アクセントの機能に基づいた分類であるため、非常に客観的かつ言語学的であると言える。しかし、韓国語の場合、多型アクセントと N 型アクセント¹¹として解釈されている諸方言においてアクセントが文節表示機能のみならず、句表示機能を果たす場合が数多く見られることが久保(1993)¹²、福井(1998)¹³、李連珠(2005)¹⁴によって報告されている。文節表示機能による分類は同じ一型ア

¹¹ アクセントが弁別機能を有する二型アクセント以上の N 型アクセントを意味する。

¹² 多型アクセントと解釈できるプサン(釜山)方言や4種類のトーンが対立を成すと捉えられるチンジュ(晋州)方言では疑問詞から始まる場合、その疑問詞のスコープの2音節目から高く始まり、スコープの終りの先の次末音節まで高く続く音調型によってまとめられると記述している。

a. プサン方言の場合： mu[sun kimʔhi mur]re (何の キムチ 食べる?)
何の キムチ 食べる

b. チンジュ方言の場合 nu-[ka kimʔhi maŋnun-ŋi morakət]t'a
誰が キムチ 食べる-か わからない

¹³ クエンヤン(光陽)方言を四型アクセントとして捉えた上で、用言連体形+体言、体言単独形+用言、引用形、疑問文などの場合においてアクセントが句や文全体をまとめる場合が見られると述べている。

a. sonakiran marun an s'ʌ.jo.
LLLLHL | LHL
sonaki(夕立)-という言葉は 使いません。

b. onur ʌtero kapnik'a?
HL | LLLLLHL
今日 どこへ行きますか?

クセントの枠内で各方言に見られる音調型がどれほど文節表示機能を果たすのか、その程度の差を明らかにするための基準としては有効であると考えられる。しかし、韓国語諸方言において一型アクセントと無アクセントを分類する上ではそれほど有効な基準ではないと考えられる。上野(2009、2011a)のアクセント単位における固有のパターンの有無の場合もどの観点から捉えるかによって用語こそ異なるものの、実質的に文節表示機能と類似した概念として考えられ、これらの基準も韓国語の一型アクセントと無アクセントの分類基準として設定することはそれほど有効ではないといえる。

筆者は韓国語諸方言で「文節や句において音声的に複数の音調型が現れても音韻的な対立を成していないもの」を全て「韓国語一型アクセント」と捉える立場から分析を行っていく。

2.4. 韓国語一型アクセント方言に関する先行研究

韓国語一型アクセント方言に関する先行研究を取り上げた上で、筆者による分析及び解釈を行う。先行研究では分節音と音調型が密接に関わる方言を記述する際に激音、濃音、平音という用語が用いられている。激音は氣息の強い無声有気音(/k^h/、/t^h/、/p^h/、/t^h/)であり、濃音は無声無気音(/k'/、/t'/、/p'/、/t'/、/s'/)である。平音は氣息の弱い無声有気音(/k/、/t/、/p/、/t/、/s/)、鼻音(/n/、/m/)、流音(/r/)である。その他、s と h も用いられているが、無声歯茎摩擦音(/s/)と無声声門摩擦音(/h/)である。

2.4.1. 先行研究

韓国語一型アクセント方言に関する先行研究には福井(2001)¹⁵、Fukui(2003)、孫在賢(2005a)、孫在賢(2007a)、李文淑(2007)、李華春(2013a、2013b)がある。

福井(2001)と Fukui(2003)は一型アクセントと無アクセントを分類する立場から同じ方言の例を取り上げている。但し、福井(2001)では一型アクセントと無アクセントを分ける基準について明確に述べていないのに対し、Fukui(2003)では明確に述べているため、Fukui(2003)を中心に取り上げる。

Fukui(2003)は一定した音調型によって各々の音韻句(phonological phrase)¹⁶の境界が明瞭に表示されるものを一型アクセントと捉え、そうではないものを無アクセントと捉えている。

¹⁴ 多型アクセントと解釈できるテグ(大邱)方言の場合、疑問詞 *an.tŋe* (いつ)、*wa* (なぜ)、*Λ.ti* (どこ)、*mΛ* (何)から始まる疑問文は疑問詞のアクセントが文全体をまとめると記述している。

- a. *an.tŋe mantu.no* ([○○]○○○「いつ作るの」)
- b. *wa norra.no* ([○○]○○「なぜ驚くの」)
- c. *Λti ka.no* (○○-[○]○「どこ行くの」)
- d. *mΛ ha.no* (○[○]○「何しているの」)

¹⁶ 福井(2001)では一型アクセントと無アクセントを記述する際にアクセント句という用語が用いられている。福井(2001)と Fukui(2003)とで用いられる用語は異なるが、両者ともアクセント単位と類似した概念として用いられると考えられる。

ピョンアン道方言と多くのチョルラ南道方言は一型アクセントであると解釈している。ピョンアン道方言は別の音韻句が後にすぐ続く場合には句の末尾の音節が高く現れるが、文末や休止直前に置かれた場合は次末音節が高く現れるという。一方、チョルラ南道方言の多くは基本的に2音節目のみが高く現れることによって各々の音韻句が表示されるが、語頭音節の子音が激音、濃音、s、hである場合と語頭音節が長母音である場合には1音節目から高く発音されると述べている。尚、これ以外の記述と具体例はない。一方、ソウル方言と中央地域の諸方言は無アクセントと解釈している。ソウル方言の場合、世代差が大きく見られるため音調型を捉えがたいが、他の方言に比べて複数の音韻句が一つにまとまって平板に発音される場合がよく見られるため、必ずしも音韻句の境界が表示されるわけでないという。但し、ソウル方言に対してもこれ以外の記述と具体例はない。

孫在賢(2005a)¹⁷はチュンチョン道のチェチョン(堤川)方言とチェジュ道のソギポ(西帰浦)方言を一型アクセントと捉え、両方言の音調型を示している。記述は体系、音調型と分節音¹⁸の関係、言い切り形と接続形の相違を中心とした断片的なものしかなく、具体例も示されていない。

チェチョン方言は言い切り形と接続形の相違が見られ、単語単独の言い切り形、助詞が付いた場合の言い切り形、単語単独の接続形、助詞が付いた場合の接続形の4つの環境に現れる音調型を以下のように示している。

表1 孫在賢(2005a)によるチェチョン方言の音調型

単独言い切り	単独接続	助詞付き言い切り	助詞付き接続
—	L…	H(L)。	L(H)…
—	LH…	LH(L)。	LH(H)…
LHL。	LHH…	LHH(L)。	LHH(H)…
LHHL。	LHHH…	LHHH(L)。	LHHH(H)…
LHHHL。	LHHHH…	LHHHH(L)。	LHHHH(H)…

言い切り形の場合、2音節は1音節目のみ高い音調型で現れ、3音節以上は1音節目と最後の音節は低く、それ以外の音節は高い音調型で現れる。尚、孫在賢(2005a)は表1に反映していないが、語頭が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音で始まる場合は語頭音節が高く現れる傾向が強いという。しかし、これは音声的なものであるため、体系の違いには関わらないと述べている。一方、接続形の場合は2音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れると記述している。

ソギポ方言の音調型については以下のように示している。

¹⁷ 原文では高い音調と低い音調をそれぞれ「●」と「○」で表記しているが、白丸の場合、本論文で異なる意味で用いているため、HとLで書き換えた。

¹⁸ 原文では、氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音で始まる語を「強子音語」と呼び、それ以外の子音で始まる語を「非強子音語」と呼んでいる。

表 2 孫在賢(2005a)によるソギボ方言の音調型

H(H)~H(L)	HH(L)	HHL(L)	HHLL(L)	HHLLL(L)
-----------	-------	--------	---------	----------

2 音節は 1 音節目と 2 音節目が高い音調型と 1 音節目のみ高い音調型の 2 種類の音調型が現れ、3 音節以上は 1 音節目と 2 音節目が高い音調型の 1 種類の音調型しか現れない。

一方、クンサン(群山)方言とソウル方言については一型アクセントとして認めがたく一型アクセントからの変化と見られる方言と捉え、以下の 3 つの特徴が見られるという。

- (1) 言い切り形は「HH (L)」と「LH(L)」系列に分かれている。「s、h、濃音、激音」で始まる場合は、「HH(L)」系列で現れる傾向が強いが、それ以外の場合はどちらの系列も現れる。
- (2) 単独接続は、最後の音節まで高く続けて現れるが、「HH(L)」系列は言い切りそのままでも続く。助詞付き接続は、言い切りの音調でも、最後の音節まで高く続けても現れる。このように「s、h、濃音、激音」の語音の条件が一定のパターンを示しているものの、それ以外のものが「HH(L)」と「LH(L)」の系列でも現れている。
- (3) これらの方言では、接続形で、二番目の音節が高くて三番目の音節からは低くなり、最後の音節が高く現れる「HHL(…)H」(語頭音節の高低は非弁別的である)のパターンで現れる。また、五音節語では、「HHHLL」の音調も発音されるが(語頭音節の高低は非弁別的である)、これらは、3 + 2 の語構成で見られるもので、前部要素の音調が被さったものと考えられる。

(孫在賢 2005a:79)

孫在賢(2007a)¹⁹は一型アクセントと無アクセントにおける分類基準について明確に述べてはいないものの、両者の相違を認める立場²⁰からカンウォン道のインジェ(麟蹄)方言、コソン方言、ヤンヤン(襄陽)方言、ソクチョ(束草)方言、ヤング(楊口)方言とチョルラ道の

¹⁹ 原文では高い音調と低い音調をそれぞれ「●」と「○」で示し、下降調は■で示している。しかし、白丸の場合、本論文で異なる意味で用いているため、●と○を H と L で書き換え、■は F で書き換えた。

²⁰ 孫在賢(2007a)の以下の記述から一型アクセントと無アクセントを異なる概念と捉える立場であることが窺える。

ソウル方言のアクセントタイプは、環境を定めれば、一つの音調型で現われる。よって、従来、言われてきた「無アクセント」ではなく「一型アクセント」と捉えられる。(孫在賢 2007a:120)

韓国語諸方言のアクセントは、多型アクセントと N 型アクセントに分類でき、無アクセント方言は存在しないことが明らかになった。(孫在賢 2007a:121)

イクサン(益山)方言、スンチャン(淳昌)方言、そしてソウル方言を一型アクセント方言と捉えている。尚、孫在賢(2005a)と同様、体系、音調型と分節音²¹の関係、言い切り形と接続形の相違を中心とした断片的な記述しかなされていない。具体例も示されていない。

まず、カンウォン道の一型アクセント方言を見ていくと、インジェ方言とコソン方言は言い切り形と接続形の相違が見られ、単語単独の言い切り形、助詞が付いた場合の言い切り形、単語単独の接続形、助詞が付いた場合の接続形の4つの環境に現れる音調型を以下のように示している。

表3 孫在賢(2007a)によるインジェ方言・コソン方言の音調型

単独言い切り	単独接続	助詞付き言い切り	助詞付き接続
F	L	L(H)	L(H)
LF	LH	LH(L)	LH(H)
LHL	LHH	LHH(L)	LHH(H)
LHL	LHHH	LHHH(L)	LHHH(H)
LHHHL	LHHHH	LHHHH(L)	LHHHH(H)

言い切り形の場合、1音節は下降調で現れ、2音節は1音節目は低く2音節目は下降調で現れる。3音節以上は1音節目の高さは決まっておらず、1音節目あるいは2音節目から次末音節まで高く続き、最後の音節は低く現れる。尚、孫在賢(2007a)は語頭音節の高さが不定である点については指摘しているが、表3に反映していない。一方、接続形の場合は言い切り形では低く現れる最後の音節が全て高く現れる。そのため、言い切り形と接続形の相違は下降の有無にあると述べている。

ヤンヤン方言とソクチョ方言²²はインジェ方言とコソン方言とほぼ同じ特徴を持つが、言い切り形の2音節の場合、1音節目のみ高い音調型で現れるという相違が見られるという。

表4 孫在賢(2007a)によるヤンヤン方言・ソクチョ方言の音調型

単独言い切り	単独接続	助詞付き言い切り	助詞付き接続
F	L	H(L)	L(H)
HL	LH	LH(L)	LH(H)
LHL	LHH	LHH(L)	LHH(H)
LHHL	LHHH	LHHH(L)	LHHH(H)
LHHHL	LHHHH	LHHHH(L)	LHHHH(H)

²¹ 原文では、氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音で始まる語を「強子音語」と呼び、それ以外の子音で始まる語を「非強子音語」と呼んでいる。

²² ソクチョ方言の場合、4音節語と5音節語においてLHHLパターン～LHLLパターンと、LHHHLパターン～LHLLLパターンのように複数の音調型が見られる場合があると述べている。

ヤング方言の方言にも言い切り形と接続形の相違が見られ、単語単独の言い切り形、助詞が付いた場合の言い切り形、単語単独の接続形、助詞が付いた場合の接続形の4つの環境に現れる音調型を以下のように示している。

表5 孫在賢(2007a)によるヤング方言の音調型

単独言い切り	単独接続	助詞付き言い切り	助詞付き接続
F	H	H(L)	H(H)
HL	HH	SH(L)	SH(H)
S ²³ HL	SHH	SHL(L)	SHH(H)
SHLL	SHHH	SHLL(L)	SHHH(H)
SHLLL	SHHHH	SHLLL(L)	SHHHH(H)

ヤング方言はインジェ方言・コソン方言とヤンヤン方言・ソクチョ方言と違い、語頭の分節音が音調型の決定に関与する。言い切り形の場合、1音節は下降調、2音節は1音節目のみ高い音調型で現れる。3音節以上の場合、語頭の分節音によって現れる音調型に相違が見られる。語頭が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音で始まる語は1音節目と2音節目が高い音調型で現れ、それ以外の子音で始まる語は1音節目と2音節目が高い音調型と2音節目のみ高い音調型のどちらでも現れる。接続形の場合、2音節以下では全ての音節が高い音調型で現れる。3音節以上では氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音で始まる語であるか否かによって前者は1音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れ、後者は1音節目あるいは2音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。

次に、チョルラ道の一型アクセント方言と捉えているスンチャン方言とイクサン方言²⁴を見ると、スンチャン方言には言い切り形と接続形の相違が見られ、単語単独の言い切り形、助詞が付いた場合の言い切り形、単語単独の接続形、助詞が付いた場合の接続形の4つの環境に現れる音調型を以下のように示している。

²³ 原文では氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音であれば高く現れ、それ以外の場合は低く現れる場合を示すものとして「◎」を用いているが、本論文で異なる意味で用いている。そのため、S(segmental)に書き換えた。

²⁴ 孫在賢(2007a)はチュンチョン道のヨンドン方言も同じタイプとして報告している。

表 6 孫在賢(2007a)によるイクサン方言・スンチャン方言の音調型

音節 分類	1	2	3	4	5
単独言い切り	F	HL	HHL	SHLL	SHLLL
単独接続	S	SH	SHL		
助詞付き言い切り	H(L)	HH(L)	SHL(L)		
助詞付き接続	S(H)	SH(L)	SHL(L)		

言い切り形の場合、1音節は下降調で現れ、2音節は1音節目のみ高い音調型で現れる。3音節は1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。4音節以上は語頭の分節音が音調型の決定に関与し、氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音で始まる語は1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。それ以外の子音で始まる語は1音節目と2音節目が高い音調型と2音節目のみ高い音調型のどちらでも現れる。一方、言い切り形と接続形の違いは2音節まで見られる。語頭が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音であれば、1音節では高く現れ、2音節では1音節目と2音節目が高く現れる。それに対し、それ以外の子音であれば、1音節では高くも低くも現れ、2音節では1音節目と2音節目が高く現れる場合もあれば、2音節目のみ高く現れる場合もある。

ソウル方言については第三章の3.2節で詳しく取り上げるため、ここでは孫在賢(2007a)の記述を簡略に述べる。

表 7 孫在賢(2007a)によるソウル方言の音調型

音節 分類	言い切り形	接続形	末尾卓立型 ²⁵	
1	F	H	F	F
2	HL	HH	LF	LF
3	SHL	SHH	HLF	LLF
4	SHLL	SHHH	SHLF	LLLF
5	SHLLL	SHHHH	SHLLF	LLLLF

孫在賢(2007a)は当該方言には言い切り形と接続形の相違が見られ、前者は必ず低く終わるのに対し、後者は高いまま続くという。両者とも語頭音節の高さに分節音が関与しており、語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である語は高く現れるが、それ以外の子音である語は語頭音節の高さが不定であると述べて

²⁵ 孫在賢(2007a)はイントネーションの一種と解釈している。

いる。

李文淑(2007)は1型アクセントと無アクセントを明確な基準をもって分類していないものの、両者を異なるものと捉える立場から、ソウル方言をアクセントの対立が変化(あるいは消失)していく過程から最も単純化された1型アクセント方言²⁶と捉えている。ソウル方言を対立は持たないが一つの定まったパターンを持つことから一型アクセントと捉えている。第三章の3.2節で詳しく取り上げるが、アクセント特徴については、語頭子音によって音調パターンが決まっており、言い切り形と接続形の相違が見られると述べている。

李華春(2013a、2013b)は中国朝鮮語撫順(ブジュン)方言を対象に詳細な記述と分析を行い、一型アクセントと解釈している。この方言には音声的に1音節目と最後の音節が高く現れる音調型と最後の音節のみ高く現れる音調型の2種類の音調型が現れる。尚、前者は1音節目から最後の音節まで全て高く現れる場合もあるという。以下に音調型をまとめた表を示す²⁷。

表8 李華春(2013a)による撫順方言の音調型

		1	2	3	4
L	単語単独形	L	LF	LLF	LLLF
	単語+助詞	L(F)	LL(F)	LLL(F)	LLLL(F)
H	単語単独形	F	HF	HLF～ HHF	HLLF～ HHHF
	単語+助詞	H(F)	HL(F)～ HH(F)	HLL(F)～ HHH(F)	HLLL(F)～ HHHH(F)

語頭音節の高さは子音の種類と母音の種類によって決まる。子音の場合、語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声声門摩擦音で始まるものは1音節目が高く現れ、それ以外の子音は低く現れる。それに対し、母音の場合、例外は存在するものの、語頭音節の母音が/y/、/e/、/o/、/ʌ/、母音単独の/a、j、w/であれば低く現れ、/i/、/u/、/ε/、CV構造での/a、wi/であれば高く現れる。また、上野(1984)で提示された日本語N型アクセントの一般特性を用い、当該方言のアクセント特徴について考察・分析を行っている。

²⁶ 以下の記述から1型アクセントと無アクセントの相違を認める立場であることが窺える。

ソウル方言のアクセントは一見すると何の決まりもないように見えるが、初めに高くなる部分だけは決まっている。第2音節目以内に最初に高くなる音節があることだけは必ず守られる。対立は持っていないが、一つの定まったパターンがあることから1型アクセントと見る。(李文淑2007:121)

²⁷ 原文では高い音調と低い音調をそれぞれ●と○で示し、下降調を■で示しているが、白丸の場合、本論文では異なる意味で用いるため、高い音調と低い音調をHとLに書き換えた。下降調はFで書き換えた。

2.4.2. 解釈及びまとめ

以上、一型アクセント方言に関する先行研究について概観してきた。筆者は「文節や句において音声的に複数の音調型が現れても音韻的な対立を成していないもの」を全て「韓国語一型アクセント」と捉える立場であるため、先行研究で取り上げられている全ての方言を一型アクセントと捉える。しかし、2.4.1節で取り上げた先行研究は全て一型アクセントと無アクセントを異なる概念と捉える立場から記述を行っている。尚、Fukui(2003)を除き、孫在賢(2005a)、孫在賢(2007a)、李文淑(2007)、李華春(2013a、2013b)は一型アクセントと無アクセントの分類基準について明確に言及していないため、どのような基準を設けて両者を分類しているかは断定できない。しかし、どの基準が設けられたとしても本論文では韓国語一型アクセントと捉えるため、解釈していく上で問題にならないと考えられる。但し、Fukui(2003)は同じく高低が非弁別的であっても一定した音調型によって各々の音韻句の境界が明瞭に表示されれば、一型アクセントとして捉え、不明瞭であれば、無アクセントと捉えている。Fukui(2003)のこのような分類は、捉えられる観点こそ異なるものの、上野(1984)と Uwano(1999)の「文節表示機能」による分類と、上野(2009、2011a)の「アクセント単位」における固有のパターンによる分類と実質的には類似していると言える。しかし、既に述べたように、このような分類の仕方は同じ一型アクセントの枠内において方言間に見られる音調的特徴を比較考察する上では有効ではあるものの、韓国語における一型アクセントと無アクセントの分類には有効ではないと考えられる。

先行研究によって記述されている諸方言の特徴をまとめてみれば、例外は存在するものの、多くの一型アクセント方言において3つの共通点が見られる。

まず、言い切り形と接続形の相違が見られる点である。言い切り形における音調型は方言差が見られるが必ず下降が現れ、接続形においては下降が現れない場合が多い。そのため、下降の有無によって言い切り形と接続形の相違が生じるといえる。

次に、言い切り形において音調型の決定に分節音に関わる場合、現れる音調型は方言差が見られるが、分節音ごとの音調型への関わり方が同様である点である。

分節音が音調型の決定に関わる一型アクセントの多くは語頭子音が氣息の強い無声有気音(激音)、無声無気音(濃音)、無声歯茎摩擦音(/s/)、無声声門摩擦音(/h/)といった子音の場合とそれ以外の場合とで音調型の決定への関わり方に相違がみられる。

最後に、音声的に複数の音調型が現れる場合が多い点である。一型アクセントには音声的に1種類の音調型のみを有する場合も存在すれば、複数の音調型が有する場合も存在するが、韓国語一型アクセント方言の多くは複数の音調型を有する。

本論文で取り上げる4つの方言にも上記の3つの特徴が全て見られる。

第三章 各方言の記述と分析

本章では、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の4つの方言に現れるそれぞれの音調的特徴について記述と分析を行う。

3.1. チョンヤン方言

チョンヤン方言は韓国の中西部に位置しているチュンチョン道方言の下位方言の一つである。この節ではチョンヤン方言を対象に言い切り形における名詞の音調的特徴、言い切り形と接続形の音調的相違、アクセント単位の認定の必要性和認定基準、複合名詞の音調的特徴、用言の音調的特徴について詳しく記述と分析を行う。

3.1.1. 調査期間及びインフォーマント情報

当該方言の音声データは主に筆者の内省に基づいている。インフォーマント②に対しては2012年9月と2013年9月に調査を行っている。インフォーマント情報は以下の通りである²⁸。

インフォーマント①：筆者、1987年生まれ、男性。

インフォーマント②：チェ・ヨンヒ氏、1930年生まれ、男性。

3.1.2. 言い切り形における名詞の音調的特徴

当該方言には言い切り形と接続形の相違が見られる。

言い切り形の場合、分節音によって現れる音調的特徴に相違が見られるため、分節音ごとに記述する。

語頭音節が短母音かつ氣息の弱い無声有気音(/k/、/t/、/p/、/t͡ɕ/)、鼻音(/n/、/m/)、流音(/r/)、接近音(/j/、/w/)である場合や母音始まりの場合における音調的特徴を見ていくと、1音節名詞の場合、単語単独形は下降調で現れる。1音節の助詞が付いて単位²⁹の長さが2音節になると、1音節目のみ高い音調型で現れる。2音節以上の助詞が付いて単位の長さが3音節以上になれば、1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。以下の例を示す。

²⁸ その他、1961年生まれの男性と1962年生まれの女性に簡単な調査を行った。

²⁹ アクセントを担う単位のことを指す。3.1.4.1節で詳しく取り上げるため、ここではその詳細は省略することにする。

(1) a.	ʃwi	ʃwi-ka ³⁰	ʃwi-ta ³¹	ʃwi-po.ta
	(鼠)	(鼠-が)	(鼠-だ)	(鼠-より)
	[○]].	[○]◎	[○]◎。	[○○]◎。
b.	kuk	kuk-i	kuk-i.ta	kuk-po.ta
	(スープ)	(スープ-が)	(スープ-だ)	(スープ-より)
	[○]].	[○]◎。	[○○]◎。	[○○]◎。

2音節名詞の場合、単語単独形は1音節の助詞が付いた1音節名詞の場合と同様、1音節目のみ高い音調型で現れる。1音節以上の助詞が付いて単位の長さが3音節以上になると、1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。

(2) a.	a.i	a.i-ka	a.i-ta	a.i-po.ta
	(子供)	(子供-が)	(子供-だ)	(子供-より)
	[○]○。	[○○]◎。	[○○]◎。	[○○]◎◎。
b.	mu.rup	mu.rup-i	mu.rup-i.ta	mu.rup-po.ta
	(膝)	(膝-が)	(膝-だ)	(膝-より)
	[○]○。	[○○]◎。	[○○]◎◎。	[○○]◎◎。

3音節名詞の場合は、単語単独形から1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。1音節と2音節の助詞が付いても同様である。

(3) a.	mi.na.ri	mi.na.ri-ka	mi.na.ri-ta	mi.na.ri-po.ta
	(芹)	(芹-が)	(芹-だ)	(芹-より)
	[○○]○。	[○○]○◎。	[○○]○◎。	[○○]○◎◎。
b.	ko.tu.rum	ko.tu.rum-ka	ko.tu.rum-i.ta	ko.tu.rum-po.ta
	(氷柱)	(氷柱-が)	(氷柱-だ)	(氷柱-より)
	[○○]○。	[○○]○◎。	[○○]○◎◎。	[○○]○◎◎。

4音節名詞の場合、3音節名詞に1音節の助詞が付いた場合と同じ音調型で現れる。つまり、1音節目と2音節目が高い音調型が現れるのである。1音節の助詞が付いた場合も

³⁰ -i/ka(-が)は名詞の最後の音節構造によって決まり、開音節であれば、-ka が後接し、閉音節であれば、-i が後接する。

³¹ -(i).ta(-だ)は直前の音節構造によって決まり、開音節であれば、-ta が後接し、閉音節であれば、-i.ta が後接する。

同じである。

(4) a.	ʃi.p ^h u.ra.ki	ʃi.p ^h u.ra.ki-ka	ʃi.p ^h u.ra.ki-ta
	(藁)	(藁-が)	(藁-だ)
	[○○]○○。	[○○]○○◎。	[○○]○○◎。

b.	mi.k'u.ra.ʃi	mi.k'u.ra.ʃi-ka	mi.k'u.ra.ʃi-ta
	(ドジョウ)	(ドジョウ-が)	(ドジョウ-だ)
	[○○]○○。	[○○]○○◎。	[○○]○○◎。

但し、2音節の助詞が付いて単位の長さが6音節以上になると、アクセント単位の切れ目が生じ、複数のアクセント単位に分かれる。この現象については、3.1.4節で詳しく取り上げるため、ここでは省略する。

一方、語頭音節が短母音かつ氣息の強い無声有気音 (/k^h/、/t^h/、/p^h/、/ʃ^h/)、無声無気音 (/k'/、/t'/、/p'/、/ʃ'/、/s'/)、無声歯茎摩擦音 (/s/)、無声声門摩擦音 (/h/) である場合を見ると、基本的に語頭子音が氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音始まりの場合と同じ特徴を持つ。相違が見られるのは3音節である。この場合、1音節目と2音節目が高い音調型のみならず、1音節のみ高い音調型でも現れる。尚、4音節名詞に2音節助詞が付いて単位の長さが6音節以上になると、アクセント単位の切れ目が生じ、複数のアクセント単位に分かれる。

(5) a.	k'ot	k'ot-i	k'ot-i.ta	k'ot-po.ta
	(花)	(花-が)	(花-だ)	(花-より)
	[○]]。	[○]◎。	[○○]◎～	[○○]◎～
			[○]◎◎。	[○]◎◎。
b.	t'ar.ki	t'ar.ki-ka	t'ar.ki-ta	t'ar.ki-po.ta
	(苺)	(苺-が)	(苺-だ)	(苺-より)
	[○]○。	[○○]◎～	[○○]◎～	[○○]◎◎。
		[○]○○。	[○]○○。	
c.	koŋ.na.mur	koŋ.na.mur-i	koŋ.na.mur-i.ta	koŋ.na.mur-po.ta
	(豆もやし)	(豆もやし-が)	(豆もやし-だ)	(豆もやし-より)
	[○○]○～	[○○]○○◎。	[○○]○○◎◎。	[○○]○○◎◎。
	[○]○○。			

d. hΛ.su.a.pi	hΛ.su.a.pi-ka	hΛ.su.a.pi-ta
(案山子)	(案山子-が)	(案山子-だ)
[○○]○○。	[○○]○○◎。	[○○]○○◎。

年配層において語頭音節が長母音で現れる場合がある。長母音は高くかつ長く発音される。それ以外は語頭音節が短母音かつ氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合や母音始まりの場合と同じ特徴が見られる。以下に語例を示す。但し、語例に関しては、インフォーマント②には絵と写真を見せて発音してもらう方式を取ったため、助詞を付けた形を誘導すると、接続形やイントネーションが被さった形で現れるなど、言い切り形が得られなかった。そのため、単語単独形と-(i).ta(-だ)を付けた場合の音調型を示す。

(6) a. i: (二)	i:-ta (二-だ)
[○:]]。	[○:] ◎。
b. k'a:ŋhi (カササギ)	k'a:ŋhi-ta (カササギ-だ)
[○:] ○。	[○:] ◎。
c. so:ŋ.sa.ri (メダカ)	so:ŋ.sa.ri-ta (メダカ-だ)
[○:] ○。	[○:] ◎。
d. ku:ŋ.ko.ku.ma (焼き芋)	ku:ŋ.ko.ku.ma-ta (焼き芋-だ)
[○:] ○○。	[○:] ○○○。

以上、言い切り形における名詞の音調的特徴について記述を行った。チョンヤン方言の言い切り形の音調的特徴は音節間あるいは音節内において必ず高から低への音調変動が見られる点である。言い換えれば、必ず下降が生じる点である。単位の長さごとに現れる音調型を見ていくと、1音節名詞では下降調、2音節名詞では1音節目のみ高い音調型、3音節名詞では1音節目と2音節目が高い音調型と1音節目のみ高い音調型の2種類の音調型が現れる。4音節名詞では1音節目と2音節目が高い音調型の1種類の音調型しか現れない。

当該方言は単語単独形であろうと、助詞の付いた場合であろうと、単位の長ささえ同じであれば同じ音調型で現れる。語頭音節が短母音かつ氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音始まりの場合に現れる音調型を以下に示す。

(7) a. 単位の長さが 2 音節である場合

1 音節名詞 + 1 音節助詞	=	2 音節名詞
ɸwi-ka (鼠-が)		a.i (子供)
[○]◎。		[○]○。

b. 単位の長さが 3 音節である場合

1 音節名詞 + 2 音節助詞	=	2 音節名詞 + 1 音節助詞	=	3 音節名詞
ɸwi-po.ta (鼠-より)		a.i-ka (子供-が)		mi.na.ri (芹)
[○◎]◎。		[○○]◎。		[○○]○。

c. 単位の長さが 4 音節である場合

2 音節名詞 + 2 音節名詞	=	3 音節名詞 + 1 音節助詞	=	4 音節名詞
a.i-po.ta (子供-より)		mi.na.ri-ka (芹-が)		ɸi.p ^h u.ra.ki (藁)
[○○]◎◎。		[○○]○◎。		[○○]○○。

d. 単位の長さが 5 音節である場合

3 音節名詞 + 2 音節助詞	=	4 音節名詞 + 1 音節助詞
mi.na.ri-po.ta (芹-より)		ɸi.p ^h u.ra.ki-ka (藁-が)
[○○]○○◎。		[○○]○○◎。

語頭音節が短母音かつ氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である 3 音節の場合に限って現れる 1 音節目のみ高い音調型も内部構造と関係なく、単位の長ささえ 3 音節であれば、現れる。

(8) 単位の長さが 3 音節である場合

1 音節名詞 + 2 音節助詞	=	2 音節名詞 + 1 音節助詞	=	3 音節名詞
k'ot-po.ta (花-より)		t'ar.ki-ka (苺-が)		kon.na.mur (豆もやし)
[○◎]◎～[○]◎◎。		[○○]◎～[○]○○。		[○○]○～[○]○○。

一方、3 音節で現れる 1 音節目のみ高い音調型は語頭の分節音によってその出現が予測可能である。語頭音節が短母音かつ氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合に限って 1 音節目と 2 音節目が高い音調型と共に現れる。そのため、3 音節において現れる 2 種類の音調型は対立を成していないと解釈できる。以下には当該方言の言い切り形における音調型を示す。

表9 チョンヤン方言の言い切り形における音調型

		単位の長さ				
		1	2	3	4	5
母音の 長短	子音の種類					
長母音	—	[○:]	[○:]○	[○:○]○	[○:○]○○	[○:○]○○○
短母音	氣息の弱い無声 有気音、鼻音、 流音、接近音、 母音始まり	[○]	[○]○	[○○]○	[○○]○○	[○○]○○○
	氣息の強い無声 有気音、無声無 気音、無声齒茎 摩擦音、無声声 門摩擦音	[○]	[○]○	[○○]○～ [○]○○	[○○]○○	[○○]○○○

3音節にみられる1音節目のみ高い音調型を除けば、当該方言は語頭の分節音を問わず、単位の長さごとに以下の1種類の音調型が現れると解釈できる。

表10 チョンヤン方言における一型アクセント(言い切り形)

1	2	3	4	5
[○]	[○]○	[○○]○	[○○]○○	[○○]○○○

当該方言の音調的特徴は最初の2音節が高く現れる点である。この点はアクセント単位を認定する上でも重要な要素である。尚、1音節と2音節は単位の長さの短さと言い切り形の特徴により、それぞれ下降調と1音節目のみ高い音調型で現れる。

3.1.3. 言い切り形と接続形の相違

既に述べた通り、当該方言は言い切り形と接続形の相違が見られる。言い切り形と接続形という概念は上野(1977)により初めて提唱されたものである。言い切り形と接続形について詳しく述べている上野(1993)を見ると、言い切り形は「その後に続けるつもりのない形」(上野 1977:51)として、その後に続くことを想定せずに、それだけを考えて発音する場合に現れるという。一方、接続形は「その後にまだ続けるつもりで発音したときの形」(上野 1977:51)として、普通は実際に後に語句が続くわけであるため、後に続けるつもり(態勢)で発音するが、実際には後を続けないでやめることも可能であり、その場合にも接続形で現れると述べている。言い切り形と接続形の出現条件については以下のように記述してい

る。

言い切り/接続の説明で「つもり」ということばを使ったことからわかるように、この区別は、実際に後に続くか否かではなく、話し手の意図次第です。そのため、発話された現象だけをみると、二つの形が“揺れる”様相を呈しますが、これは同一レベルで発話が揺れているのではなく、発話者の意図が違っているための結果にほかなりません。その「つもり」が定まれば、それに対応する音調のほうは一貫してできます。

(上野 1993:52)

言い切り形と接続形の相違が見られる方言の一例として上野(1989)の岩手県雫石(しずくいし)方言を見れば、この方言は昇る位置が弁別的な核(昇り核)を持っており、言い切り形の場合、無核型は全て低く、有核型は核のあるところのみ高く現れる。一方、接続形になると、有核型の場合、核のある位置から文節³²の最後のモーラまで高く続く。具体例を上野(1989)から引用すると、例(9)と(10)はそれぞれ複数の名詞が並列されている場合の音調と名詞+動詞からなる場合の音調型である。表記は本論文で用いている記号に書き換えている。音調は文字に直接表記を施す。昇り核は「」で示す。

(9) 複数の名詞が並んでいる場合の音調型 (上野 1989 を改変)

(/「クジラ/、/ネ「ズミ/、/ナマ「ズ/、/イワシ/)

a. i. 言い切り形 : [ク]ジラト|ネ[ズ]ミト|ナマ[ズ]ト|イワシ。

ii. 接 続 形 : [クジラト]|ネ[ズミト]|ナマ[ズト]|イワシ。

(/「クジラカラモ/、/サカナカラモ/)

b. [クジラカラモ] | サカナカラモ。(鯨からも魚からも)

([クジラカラモ | サカナカラモ]。は不可)

³²上野(1989)の以下の記述から言い切り形と接続形が文節を単位とする概念であることが読み取れる。

言い切りでは核のある所だけが「高」、接続ではその核からそれを含む文節末尾までが「高」、という関係にある。(省略) この非句末における「高」の延長は、文節を越えては行われない。

(上野 1989:192)

(10) 名詞+動詞からなる場合の音調型 (上野 1989 を改変)

(/「クジラ/、/トッ「タ/)

- a. [クジラ]|トッ[タ]。(鯨、捕った) ([クジラトッタ]。は不可)

(/「クジラ/、/タ「ベタ/)

- b. [クジラ]|タ[ベ]タ。(鯨、食べた) ([クジラタベ]タ。は不可)

チョンヤン方言の場合、言い切り形は表 9 に示した通り現れる。接続形は言い切り形に見られる下降が現れなくなるため、1 音節目と 2 音節目が高い音調型と 1 音節目のみ高い音調型の 2 種類の音調型は現れず、1 音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。当該方言の言い切り形と接続形の相違は下降の有無によって生じるといえる。接続形が現れる代表的な例は複数の名詞が並んでいる場合である。以下に例を示す。

(11) 複数の名詞が並んでいる際の音調型

so (牛)、 tho.k'i (兎)、 twe.ŋi (豚)、 ko.jaŋ.i (猫)

- a. 言い切り形： {[○]。} | {[○]○。} | {[○]○。} | {[○○]○。}

- b. 接 続 形： i. {[○]…} | {[○○]…} | {[○○]…} | {[○○○]…}
ii. {[○] | [○○] | [○○] | [○○]○}。

例(11)a と(11)b の i は文節の切れ目と句の切れ目が一致しており、それぞれ言い切り形と接続形とで現れている場合である。一方、例(11)b の ii は 4 つの文節からなっているものの、1 句を成している場合である。第 4 文節の ko.jaŋ.i (猫) は句末に置かれているため、言い切り形で現れるのに対し、それ以外の文節は非句末に置かれているため、全て接続形として現れる。このような特徴は上記の場合以外にも、6 音節以上の助詞が付いた名詞の場合、6 音節以上の複合名詞、体言+(助詞)+用言、連体修飾形+体言、副詞+用言などの場合にも見られる。6 音節以上の複合名詞については 3.1.5 節で取り上げるため除き、以下には体言+(助詞)+用言、連体修飾形+体言、副詞+用言からなる場合の音調をそれぞれ示す。

(12) 体言+用言からなる場合

pap | mək-nun.ta

(ご飯 | 食べーている。)

言い切り形： {[○]。} | {[○○]○。}

接 続 形： {[○] | [○○]○。}

(13) 体言+助詞+用言からなる場合

ʃip-ε | kat-nun.te

(家-に | 帰っ-たけど。)

言い切り形 : {[○]◎。} | {[○◎]◎。}

接 続 形 : {[○◎] | [○◎]◎。}

(14) 用言連体形+体言からなる場合

ʃak-un | hak.kjo

(小-い | 学校)

言い切り形 : {[○]◎。} | {[○]○。}

接 続 形 : {[○◎] | [○]○。}

(15) 副詞+用言からなる場合

p'ar.ri | mak-Λ.ra

(早く | 食べ-ろ。)

言い切り形 : {[○]○。} | {[○◎]◎。}

接 続 形 : {[○○] | [○◎]◎。}

3.1.4. チョンヤン方言におけるアクセント単位の認定の必要性及び認定基準

チョンヤン方言は6音節以上になると、アクセント単位に切れ目が生じる。よって、本節では、一型アクセントにおいてアクセント単位認定の必要性について検討した上で、アクセント単位の定義について述べる。そして、当該方言のアクセント単位の認定基準と認定に関わる要素について考察を行う。尚、当該方言のような、韓国語一型アクセントを対象に、アクセント単位の認定について考察した先行研究は管見の限り見当たらないが、韓国語の方言を対象にアクセント単位の認定について考察した先行研究には李連珠(2005)がある³³。

3.1.4.1. アクセント単位の定義

上野(2011b)はアクセント単位について、「アクセント(ないしアクセント素)を担う単位で、これによってアクセントの型が決まる。この単位未満のものは、それ自身のアクセントを担うことができない。アクセント体系は、この長さが同じものの間での対立数と、長さが増えるに従って対立数がどのようになるかによって決まる」(上野 2011b:320)と定義している。そして、アクセント単位の長さについては日本語東京方言の場合、「『蚊、手』のような短いものから、『東京オリンピック、オックスフォード大学、働かされ始める』などのように長いものまであり、1単位の長さの上限は決まっていない」(上野 2011b:320)と述べている。

3.1.4.2. アクセント単位認定の必要性の検討

李連珠(2005)はアクセント単位の認定についてアクセント体系を構築する上で欠かすこ

³³ 李連珠(2005)はテグ方言を対象に「疑問詞+用言疑問形」、「副詞+用言疑問形」、「名詞+動詞」、「名詞+名詞」といった文と句に見られるアクセントを分析し、これらをアクセントの面から結合型、並列型、接合型の3つに分類した上で、アクセント体系を立てる際には1つのアクセント単位からなる結合型のみに基づくべきであると主張している。

とのできないものとし、アクセント型の対立を持つ韓国語テグ方言を対象に考察を行っている。アクセント体系を正確に捉えるためにはアクセント単位の認定は必須不可欠なものであることが窺える。一型アクセントにおいても例外ではない。一型アクセントがアクセント型の対立を持たないからといって現れる音調型の全てを1つのアクセント単位と認定すれば、同じ音節数において複数の音調型やこれまでとは異なる音調型が現れた場合、全て表9に加えなければならない。そうすると、全体的に非常に複雑な音調的特徴になってしまい、一型アクセントが体系的に捉えられなくなる。

例えば、**ke.na.ri** (レンギョウ)と **ho.ru.ra.ki**(ホイッスル)を例で挙げれば、これらに音節数の異なる助詞がそれぞれ後接すると、以下のような音調型が現れる。

- | | | |
|---|--|---|
| (16) a. ke.na.ri
(レンギョウ)
[○○]○。 | ke.na.ri-ka
(レンギョウ-が)
[○○]○○。 | ke.na.ri-po.ta
(レンギョウ-より)
[○○]○○。 |
| b. ke.na.ri-po.ta-nun
(レンギョウ-より-は)
[○○○] ○○。 | | |
| (17) a. sa.kwa-na.mu
(リンゴの木)
[○○]○○。 | sa.kwa-na.mu-ka
(リンゴの木-が)
[○○]○○。 | |
| b. sa.kwa-na.mu-po.ta
(リンゴの木-より)
[○○] ○○。 | | sa.kwa-na.mu-po.ta-nun
(リンゴの木-より-は)
[○○] ○○。 |

上記の例を見ると、5音節以下の場合と6音節以上の場合とで異なる音調型が現れるが、単語単独形の場合を除くと、全て名詞に助詞が付いた言い切り形の場合であることが分かる。そのため、5音節以下に現れる音調型と6音節以上の音調型を1つのアクセント単位と解釈しがちである。しかし、仮に6音節以上の音調型を1つのアクセント単位と捉えてしまうと、二つの問題点が生じる。一つは5音節以下の音調型と一貫した特徴が捉えられない点である。もう一つは例(16)の **ke.na.ri-po.ta-nun**(レンギョウ-より-は)と例(17) **sa.kwa-na.mu-po.ta**(リンゴの木-より)のように同じ音節数であるにも関わらず、異なる音調型が現れる場合、それぞれの音調型が現れる環境と条件について説明しなければならない点である。

しかし、6音節以上に現れる音調型を単位の長さの上限によってアクセント単位の切れ

目が生じ、複数のアクセント単位に分かれたものと認定し、最後のアクセント単位は言い切り形で現れ、それ以外のアクセント単位は接続形で現れると解釈すると、当該方言の一回型アクセントを体系的に捉えられる。

3.1.4.3. アクセント単位の認定に関わる要素

当該方言はアクセント単位の認定において単位の長さや形態素の切れ目が関わる。しかし、2つの要素がそれぞれ関与する条件とその順序に相違が見られる。

優先的に関わる要素は単位の長さである。この要素は当該方言のアクセント単位の認定において一次的に関わる。当該方言は6音節以上になると、アクセント単位に切れ目が生じるため、1つのアクセント単位にまとまる長さは5音節までである。単位の長さの上限は品詞や文節内部の構成などとは関係なく、6音節以上であれば必ず関わる。

- (18) a. t'ur-ε.sΛ-po.ta [○○]○○○。
(庭-で-より)

- b. t'ur-ε.sΛ-po.ta-num [○○○]|○○○。
(庭-で-より-は)

- (19) a. sΛ.ur-ε.sΛ-num [○○]○○○。
(ソウル-で-は)

- b. sΛ.ur-ε.sΛ-po.ta [○○]|○○○○。
(ソウル-で-より)

- (20) a. tʃʰuŋ.tʃʰʌŋ.to-ε.sΛ [○○]○○○。
(チュンチョン道-で)

- b. tʃʰuŋ.tʃʰʌŋ.to-ε.sΛ-num [○○○]|○○○。
(チュンチョン道-で-は)

- (21) a. kε.ran-k'ʌp.t'ε.ki [○○]○○○。
(卵-殻)

- b. kε.ran-ar.rε.ru.ki [○○]|○○○○。
(卵-アレルギー)

(22) a. tʰuŋ.tʰaŋ.to.paŋ.ʌn [○○]○○○。
(チュンチョン道-方言)

b. tʰuŋ.tʰaŋ.to.sa.tʰu.ri [○○○]|○○]○。
(チュンチョン道-方言)

(23) a. tor.a·ka.sjʌ-tta [○○]○○○。
(亡くなった)

b. tor.a·ka.sjʌt-sup.ni.ta [○○]|○○]○○○。
(亡くなりました)

例(18)～(20)は名詞に助詞が付いた場合である。同じ名詞であるにも関わらず、助詞の長さによってアクセント単位の数に相違が見られ、例(18)～例(20)の a は1つのアクセント単位であるのに対し、例(18)～例(20)の b は複数のアクセント単位に分かれていることが分かる。例(21)と例(22)は複合名詞の場合である。この場合も前部要素が同じであるものの、後部要素の長さの相違によって例(21)aと例(22)aは1つのアクセント単位であるが、例(21)bと例(22)bは複数のアクセント単位に分かれていることが分かる。例(23)は動詞語幹に活用語尾が付いている場合である。同じ語幹であるが、活用語尾の長さの相違によって a は1つのアクセント単位であるのに対し、b が複数のアクセント単位に分かれている。一方、例(18)～例(23)の b はお互いに異なる内部構造を成しているが、単位の長さが6音節以上であるため、共通してアクセント単位の切れ目が生じている。

アクセント単位の切れ目が生じた場合の各アクセント単位の音調型を見ると、最後のアクセント単位は言い切り形で現れ、それ以外のアクセント単位は接続形で現れる。

単位の長さによってアクセント単位の切れ目が生じると、形態素の切れ目がアクセント単位の切れ目の位置に関与する。まず、例(18)～(20)の b の場合、1音節名詞は助詞と助詞の間にアクセント単位の切れ目が生じており、2音節名詞と3音節名詞は名詞と助詞の境界にアクセント単位の切れ目が生じている。次に、例(21)bと例(22)bの場合は前部要素と後部要素の間にアクセント単位の切れ目が生じている。例(23)bは tor.a と ka.sjʌt-sup.ni.ta の間にアクセント単位の切れ目が生じている。これらの例から内部構造は異なるものの、形態素の切れ目にアクセント単位の切れ目が生じることが分かる。

一方、以下の例のように複数の形態素からなる複合名詞に助詞が付いた場合の音調型を見れば、当該方言においてアクセント単位の切れ目の位置と形態素間の結合に一定の規則が見られる。当該方言は6音節以上かつ複数の形態素からなる場合、最後の形態素とその前の形態素が優先的に1つのアクセント単位を成す傾向が見られる。

(24) a. taŋ.njo -pjʌŋ -jak -po.ta (糖尿病の薬より)

糖尿-病-薬-より

[○○○]|○○]◎。

b. seŋ.sʌn-nun-ar-po.ta (魚の目玉より)

魚-目玉-より

[○○]|○○]◎◎。

(25) a. ko.mu-ʃʉr-nor.i-ka (ゴムバンドを用いた遊び-が)

ゴム-紐-遊び-が

[○○○]|○○]◎。

b. nɛm.pi-son-ʃʉp.i-ka (鍋の取っ手-が)

鍋-手-取っ手-が

[○○]|○○]○○◎。

但し、以下の4音節の単純名詞に助詞が付いて6音節以上になる場合はアクセント単位の切れ目の位置を設定しがたい。今後、さらなる検討が必要とされるが、現段階において形態素の切れ目とは関係なく、最後の形態素と4音節単純名詞の3音節目と4音節目がpo.ta(より)と1つのアクセント単位を成すと捉え、名詞の2音節目と3音節目の間にアクセント単位の切れ目が生じていると解釈している。

(26) a. ʃi.pʰu.ra.ki-po.ta (藁-より)

[○○]|○○]◎◎。

b. hʌ.su.a.pi-po.ta (案山子-より)

[○○]|○○]◎◎。

3.1.4.4. まとめ

当該方言のアクセント単位の認定において、1音節目のみ高い音調型と1音節目と2音節目が高い音調型を1つのアクセント単位とし、高い音調が3音節目以降に現れる音調型はアクセント単位の切れ目が生じ、複数のアクセント単位からなるものと認定することにより、当該方言の一型アクセントの特徴が体系的に捉えられる。アクセント単位の認定に関わる要素としては単位の長さや形態素の切れ目がある。この2つの要素は適用範囲と順序に相違が見られる。単位の長さは一次的に関わる要素として品詞や文節内部の構成と関わりなく、単位の長さが6音節以上になれば必ず関与する。形態素の切れ目は単位の長さにより、アク

セント単位が複数に分かれてはじめて関わるため、二次的要素と言え、アクセント単位の切れ目の位置に関与する。3つ以上の形態素からなる場合は基本的に最後の形態素とその直前の形態素が1つのアクセント単位を成す傾向が見られる。

アクセント単位の切れ目が生じた際の各アクセント単位の音調型を見ると、最後のアクセント単位は言い切り形で現れ、それ以外のものは最後のアクセント単位に接続しているため、接続形で現れる。

3.1.5. 複合名詞の音調的特徴

単純名詞の場合と同様、5音節以下の場合と6音節以上の場合とで異なる音調的特徴が見られるため、5音節以下の複合名詞と6音節以上の複合名詞に分けて記述を行う。

3.1.5.1. 5音節以下の複合名詞

複合名詞の長さが5音節以下であれば、基本的に表9に示した音調型で現れる。以下に語例を示す。

(27) 2つの形態素からなる複合名詞

a. 1音節名詞 + 1音節名詞

kuk (汁) + mur (水) → kuk·mur (汁)
[○]]. + [○]]. → [○○]○。

b. 1音節名詞 + 2音節名詞

pε (梨) + na.mu (木) → pε·na.mu (梨の木)
[○]]. + [○○]○。 → [○○]○。

c. 2音節名詞 + 2音節名詞

kar.ɸhi (太刀魚) + ɸo.rim (煮物) → gar.ɸhi·ɸo.rim (太刀魚の切り身の煮つけ)
[○○]○。 + [○○]○。 → [○○]○○。

d. 2音節名詞 + 3音節名詞

kwa.ir (果物) + k'ʌp.tɛ.ki (皮) → kwa.ir·k'ʌp.tɛ.ki (果物の皮)
[○○]○。 + [○○]○○。 → [○○]○○○。

上記の例は2つの形態素からなる複合名詞であるが、3つの形態素からなる複合名詞であっても全体の長ささえ5音節以下であれば、同じ特徴が見られる。

(28) 3つの形態素からなるの複合名詞

- a. sam(三)+p^har(八)+sɛn(線) → sam·p^har·sɛn (38 度線)
[○]]. + [○]]. + [○]]. → [○○]○～[○]○○。
- b. k^ho(鼻)+kam.ki(風邪)+jak(薬) → k^ho·kam.ki·jak (鼻かぜの薬)
[○]]. + [○]○。 + [○]] → [○○]○○。
- c. toŋ (東)+nam (南)+a.si.a (アジア) → toŋ·nam·a.si.a (東南アジア)
[○]]. + [○]]. + [○○]○。 → [○○]○○○。

年配層の場合には語頭音節が長母音で現れる語が見られるが、5音節以下であれば、基本的に表9に示した音調型で現れる。

(29) a. 1音節名詞+2音節名詞

pa·m (栗) + na.mu (木) → pa·m·na.mu (栗の木)
[○:]]. + [○]○。 → [○:○]○。

b. 1音節名詞+3音節名詞

so: (牛) + tar.ku.ŋi (車) → so:·tar.ku.ŋi (牛車)
[○:]]. + [○○]○。 → [○:○]○○。

c. 2音節名詞+3音節名詞

ta·m.pɛ (タバコ) + ʃɛ.tʰɹi (灰皿) → ta·m.pɛ.ʃɛ.tʰɹi (灰皿)
[○:~]○。 + [○○]○。 → [○:○]○○○。

但し、複合名詞の場合は長さが5音節以下であっても場合によっては2つのアクセント単位に分かれて現れる場合も見られる。これはインフォーマントが複合名詞をどのように意識するかによって1つのアクセント単位にまとまる場合もあれば、複数のアクセント単位に分かれる場合もあるからであると考えられる。

(30) a. 1音節名詞+3音節名詞

mjɛ·n (面) + sa:mu·so (事務所) → mjɛ·n·sa.mu·so /
mjɛ·n·sa:mu·so (面事務所)
[○:]]. + [○:○]○。 → [○:○]○○ / [○:]|[○:○]○。

b. 2 音節名詞 + 3 音節名詞

ko.tʰu (唐辛子) + tʃa:m.tʃa.ri (トンボ) → ko.tʰu-tʃam.tʃa.ri /
 ko.tʰu-tʃa:m.tʃa.ri (赤とんぼ)
 [○]○。 + [○:○]○。 → [○○]○○○/[○○]| [○:○]○。

複合名詞の長さが 5 音節以下でありながらも、アクセント単位が複数に分かれた場合は、後述する 6 音節以上の場合と同様、最後のアクセント単位は言い切り形として現れ、それ以外のアクセント単位は接続形で現れる。

3.1.5.2. 6 音節以上の複合名詞

既に述べたように、単位の長さが 6 音節以上であるため、必ずアクセント単位の切れ目が生じ、アクセント単位が複数に分かれる。尚、3 つ以上の語からなる複合名詞の場合はそれぞれの語を第 1 要素、第 2 要素…と呼ぶ。

2 つの語からなる複合名詞は基本的に前部要素と後部要素の間にアクセント単位の切れ目が生じる。前部要素に該当する語は接続形で現れるため、全て高く続く音調型で現れ、後部要素に該当する要素は表 9 に示した言い切り形の音調型で現れる。

(31) a. 2 音節名詞 + 4 音節名詞

ka.sum (胸) + tʃi.nu.rʌ.mi (ヒレ) → ka.sum-tʃi.nu.rʌ.mi (胸びれ)
 [○]○。 + [○○]○○。 → [○○]| [○○]○○。

b. 3 音節名詞 + 3 音節名詞

pi.ti.o (ビデオ) + tʰɛ.i.phu (テープ) → pi.ti.o-tʰɛ.i.phu (ビデオテープ)
 [○○]○。 + [○○]○。 → [○○○]| [○○]○。

尚、4 音節名詞 + 2 音節名詞からなる複合名詞の場合は 4 音節名詞に助詞が付いた場合と同様、前部要素と後部要素の切れ目とは関係なく、後部要素が前部要素の 3 音節目と 4 音節目と 1 つのアクセント単位を成し、前部要素の内部で切れ目が生じると解釈する。

(32) a. ar.rɛ.ru.ki + pan.un → ar.rɛ.ru.ki-pan.un

(アレルギー) (反応) (アレルギー反応)
 [○○]○○。 + [○]○。 → [○○]| [○○]○○。

b. ho.ru.ra.ki + so.ri → ho.ru.ra.ki-so.ri

(ホイッスル) (音) (ホイッスルの音)
 [○○]○○。 + [○]○。 → [○○]| [○○]○○。

一方、3つ以上の語からなる複合名詞の場合、2音節名詞の組み合わせからなる場合を中心に述べれば、第2要素と第3要素が1つのアクセント単位を成し、第1要素とアクセント単位の切れ目が生じる。最後のアクセント単位は言い切り形で現れ、それ以外のアクセント単位は接続形で現れる。

- (33) a. in.ʧʰʌn + kuk.ʧʰe + koŋ.haŋ → in.ʧʰʌn-kuk.ʧʰe-koŋ.haŋ
 (インチョン) + (国際) + (空港) → (インチョン国際空港)
 [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○]||[○○]○○。

- b. se.kje + juk.saŋ + te.(h)we → se.kje-juk.saŋ-te.(h)we
 (世界) (陸上) (大会) (世界陸上大会)
 [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○]||[○○]○○。

- c. u.ri + na.ra + sa.ram → u.ri-na.ra-sa.ram
 (私達) (国) (人) (我が国の人)
 [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○]||[○○]○○。

4つの語からなる複合名詞の場合も同じことが言える。第3要素と第4要素が1つのアクセント単位を成し、第2要素の間にアクセント単位の切れ目が生じる。第3要素と第4要素は言い切り形の4音節名詞の音調型で現れ、それ以外の要素は接続形で現れる。

- (34) a. ja.seŋ + toŋ.mur + po.(h)o + ku.jʌk → ja.seŋ-toŋ.mur-po.(h)o-ku.jʌk
 (野生) (動物) (保護) (区域) (野生動物保護区域)
 [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○○○]||[○○]○○。

- b. ʧʰʌn.ʧʰa + ʧʰe.pʰum + har.in + me.ʧʰaŋ → ʧʰʌn.ʧʰa-ʧʰe.pʰum-har.in-me.ʧʰaŋ
 (電子) (製品) (割引) (売り場) (電子製品割引売り場)
 [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○○○]||[○○]○○。

- (35) a. haŋ.mun + ʧʰik.ʧʰaŋ + ki.nuŋ + kaŋ.sa → haŋ.mun-ʧʰik.ʧʰaŋ-ki.nuŋ-kaŋ.sa
 (肛門) (直腸) (機能) (検査) → (肛門直腸機能検査)
 [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○]||[○○]||[○○]○○。

- b. sa.ur + je.sur + ko.tuŋ + hak.kjo → sa.ur-je.sur-ko.tuŋ-(h)ak.kjo
 (ソウル) (芸術) (高等) (学校) → (ソウル芸術高等学校)
 [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○]||[○○]||[○○]○○。

尚、例(34)のように、第1要素と第2要素が意味的に結合度が強い場合は1つのアクセント単位にまとまり、例(35)のように第1要素と第2要素の意味的結合度が緩い場合はそれぞれ1つのアクセント単位を成す。

3.1.5.3. まとめ

複合名詞の場合も単純名詞の場合と同様、5音節以下の場合と6音節以上の場合とで異なる音調的特徴が見られる。

5音節以下の場合には基本的に形態素の数とは関係なく、複合名詞全体の長ささえ5音節であれば表9に示した音調型で現れるが、場合によっては5音節以下の複合名詞でも2つのアクセント単位に分かれて現れる場合もみられる。

6音節以上の複合名詞の場合は必ず2つ以上のアクセント単位に分かれて現れる。2つの語からなる場合は前部要素と後部要素の間にアクセント単位の切れ目が生じる。尚、4音節名詞+2音節助詞からなる場合は例外的に前部要素の内部で切れ目が生じ、前部要素の3音節目と4音節目が後部要素と1つのアクセント単位を成す。

3つの語からなる複合名詞の場合は第3要素と第4要素が1つのアクセント単位を成すため、第1要素の間にアクセント単位の切れ目が生じる。4つの語からなる複合名詞の場合にも同じことがいえる。第3要素と第4要素が1つのアクセント単位を成すため、優先的に第2要素の間にアクセント単位の切れ目が生じる。尚、第1要素と第2要素が意味的結合度の強い場合は1つのアクセント単位にまとまり、緩い場合はそれぞれ1つのアクセント単位を成す。

アクセント単位が複数に分かれた場合、それぞれのアクセント単位の音調型を見れば、最後のアクセント単位は言い切り形で現れ、それ以外のアクセント単位は接続している関係にあるため、接続形で現れる。

3.1.6. 用言の音調的特徴

名詞の場合と同じ音調的特徴が見られる。1音節幹用言の場合、1音節の活用語尾と結合して単位の長さが2音節になると、1音節目のみ高い音調型で現れる。2音節の活用語尾が付いて長さが3音節以上になると、1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。但し、3音節かつ語幹の子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合は、1音節目のみ高い音調型でも現れる。以下に例を示す。例は-ta(辞書形)、-ko(中止法の-て)、-at.ta/At.ta³⁴(過去形)、-a.sΛ/-Λ.sΛ³⁵(原因と理由の-て)が付いた活用形の音調型をそれぞれ示す。尚、用言は活用の仕方によっては語幹と活用語尾が融合する場合があります、音節の境界と一致しない場合がある。ここでは音節の境界と、語幹と活

³⁴ 語幹における最後の音節の母音が/a、o/であれば、-at.ta が後接し、それ以外の母音であれば、-At.ta が後接する。

³⁵ 語幹における最後の音節の母音が/a、o/であれば、-a.sΛ が後接し、それ以外の母音であれば、-Λ.sΛ が後接する。

用語尾の境界を優先するため、形態素の境界は語幹と活用語尾の境界のみを示すことにする。

(36) a.	ka-ta (行-く) [○]◎。	ka-ko (行っ-て) [○]◎。	ka-tta (行っ-た) [○]◎。	ka-sΛ (行っ-て) [○]◎。
b.	ʃak-ta (小さ-い) [○]◎。	ʃak-ko (小さ-くて) [○]◎。	ʃak-at.ta (小さ-かった) [○○]◎。	ʃak-a.sΛ (小さ-くて) [○○]◎。
c.	kʰɛ-ta (掘-る) [○]◎。	kʰɛ-ko (掘っ-て) [○]◎。	kʰɛ-tta (掘っ-た) [○]◎。	kʰɛ-sΛ (掘っ-て) [○]◎。
d.	s'a-ta (安-い) [○]◎。	s'a-ko (安-くて) [○]◎。	s'a-tta (安-かった) [○]◎。	s'a-sΛ (安-くて) [○]◎。

2音節語幹用言の場合、活用語尾が付いて長さが3音節以上になると、1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。尚、1音節幹用言の場合と同様、語幹の子音が強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦である3音節の場合は1音節目のみ高い音調型も現れる。

(37) a.	ka.ʃi-ta (持-つ) [○○]◎。	ka.ʃi-ko (持っ-て) [○○]◎。	ka.ʃjΛ-tta (持っ-た) [○○]◎。	ka.ʃjΛ-sΛ (持っ-て) [○○]◎。
b.	a.pʰu-ta (痛-い) [○○]◎。	a.pʰu-ko (痛-くて) [○○]◎。	a.pʰa-tta (痛-かった) [○○]◎。	a.pʰa-sΛ (痛-くて) [○○]◎。
c.	hΛ.mur-ta (壊-す) [○○]◎～ [○]○○。	hΛ.mur-ko (壊し-て) [○○]◎～ [○]○○。	hΛ.mur-Λt.ta (壊し-た) [○○]◎◎。	hΛ.mur-Λ.sΛ (壊し-て) [○○]◎◎。

d. t'ok.kat-ta	t'ok.kat-ko	t'ok.kat-at.ta	t'ok.kat-a.sΛ
(同じ-だ)	(同じ-で)	(同じ-だった)	(同じ-で)
[○○]◎～	[○○]◎～	[○○]◎◎。	[○○]◎◎。
[○]○○。	[○]○○。		

3 音節語幹用言の場合は長さが必ず 4 音節以上になるため、分節音を問わず、1 音節目と 2 音節目が高い音調型の 1 種類の音調型のみが現れる。

(38) a. pu.sΛ.fj̃-ta	pu.sΛ.fj̃-ko	pu.sΛ.fj̃Λ-tta
(壊れ-る)	(壊れ-て)	(壊れ-た)
[○○]○○。	[○○]○○。	[○○]○○。

pu.sΛ.fj̃Λ-sΛ
(壊れ-て)
[○○]○○。

b. sΛ.kur.pʰu-ta	sΛ.kur.pʰu-ko	sΛ.kur.pʰΛ-tta
(物悲し-い)	(物悲し-くて)	(物悲し-かった)
[○○]○○。	[○○]○○。	[○○]○○◎。

sΛ.kur.pʰΛ-sΛ
(物悲し-くて)
[○○]○○◎。

用言の場合も名詞の場合と同様、単位の長さが 6 音節以上になると、アクセント単位が複数に分かれる。アクセント単位が分かれた場合、最後のアクセント単位は言い切り形で現れ、最後のアクセント単位以外のものは接続形で現れる。

(39) a. nΛm.Λ.fj̃-ta	nΛm.Λ.fj̃-sip.ni.ta	nΛm.Λ.fj̃-sjΛt.sup.ni.ta
(転-ぶ)	(転ばれ-ます)	(転ばれ-ました)
[○○]○○。	[○○] [○○]◎◎。	[○○◎◎] ◎◎]◎。
b. fjo.jon.(h)a-ta	fjo.jon.(h)a-sip.ni.ta	fjo.jon.(h)a-sjΛt.sup.ni.ta
(静か-だ)	(静か-でいらっしやい-ます)	(静か-でいらっしやい-ました)
[○○]◎◎。	[○○] [○○]◎◎。	[○○◎◎] ◎◎]◎。

3.1.7. まとめ

チョンヤン方言は言い切り形と接続形の相違が見られる。言い切り形は必ず下降が生じる。5音節以下の場合における音調的特徴を見ると、1音節は下降調、2音節は1音節目のみ高い音調型、3音節は1音節目と2音節目が高い音調型と1音節目のみ高い音調型の2種類の音調型が現れる。4音節以上は1音節目と2音節目が高い音調型の1種類の音調型しか現れない。但し、3音節に現れる1音節目のみ高い音調型は語頭音節が短母音かつ氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合に限り、1音節目と2音節目が高い音調型と共に現れる。3音節に現れる1音節目のみ高い音調型は分節音によって現れる環境が予測可能であるため、1音節目と2音節目が高い音調型と対立を成していないと解釈できる。

言い切り形は必ず下降が生じるのに対し、接続形は言い切り形に見られる下降が現れず、全て高く続く音調型で現れるため、言い切り形と接続形の相違は下降の有無にある。

6音節以上になると、アクセント単位の切れ目が生じる。アクセント単位が複数に分かれると、形態素の切れ目がアクセント単位の切れ目の位置に関与する。音調的には最後のアクセント単位は言い切り形で現れ、それ以外のものは最後のアクセント単位に接続しているため、接続形で現れる。

複合名詞の音調的特徴も単純名詞の場合とほぼ同様である。5音節以下の場合には基本的に1つのアクセント単位にまとまり、6音節以上の場合には複数のアクセント単位に分かれる。6音節以上の複合名詞の場合、2つの語からなる場合は基本的に前部要素と後部要素の間にアクセントと切れ目が生じる。3つの語からなる場合は、第2要素と第3要素が1つのアクセント単位を成す。そのため、第1要素と第2要素の間にアクセント単位の切れ目が生じる。4つの語からなる複合名詞の場合も同じ特徴が見られる。第3要素と第4要素が優先的に1つのアクセント単位を成す。そのため、第2要素の間にアクセント単位の切れ目が生じる。尚、第1要素と第2要素が意味的に結合度が強ければ、1つのアクセント単位を成し、緩ければ、それぞれ1つのアクセント単位を成す。各アクセント単位の音調型を見ると、最後のアクセント単位は言い切り形で現れ、それ以外のアクセント単位は接続形で現れる。

用言の場合も名詞と同じ特徴が見られる。

3.2. ソウル方言

韓国語の標準語の基盤になっている方言として、従来から多くの研究者により、当該方言の音律的特徴に関する研究が盛んに行われてきた。

本節では、ソウル方言の韻律的特徴に関する先行研究を概観した上で、ソウル方言における言い切り形における名詞と複合名詞の音調的特徴、言い切り形と接続形の相違、用言の音調的特徴について記述と分析を行う。

3.2.1. 先行研究

ソウル方言の音律的特徴に関する先行研究として、イ・スンニョン(1960)、チョン・インソプ(1965)、イ・ヒョンボク(1973)をはじめ、イ・ホヨン(1987)、イ・サンジク(1987)、キム・チャギョン(1980)、長渡(2003)、Fukui(2003)、孫在賢(2007a)³⁶、李文淑(2007)などがあげられる。

イ・スンニョン(1960)、チョン・インソプ(1965)、イ・ヒョンボク(1973)はソウル方言に見られるアクセントの性質とそのアクセントの規則について論じている。

イ・スンニョン(1960)はソウル方言を強弱(stress)アクセントと捉え、語頭音節の子音によってアクセントの位置が決まると述べている。そして、以下のように規則を立てている。

- ・長母音は1音節目にしか置かれず、このような場合には1音節目にアクセントが置かれる。
- ・語頭子音が濃音/**k'**, **t'**, **p'**, **ɸ'**, **s'**/であれば、その音節にアクセントがある。
- ・語頭子音が激音/**k^h**, **t^h**, **p^h**, **ɸ^h**/あるいは/**s**, **h**/であれば、その音節は弱音節になるため、アクセントが置かれない。
- ・音節末子音が鼻音/**n**, **m**, **ŋ**/あるいは流音/**l**/であれば、その音節にアクセントが来る。
- ・音節末子音が破裂音かつ、語頭子音が激音あるいは/**s**, **h**/でなければ、その音節にアクセントが来る。
- ・音節構成において語頭子音が上記のような制約がなければ、2音節目にアクセントが来る。

チョン・インソプ(1965)は、Sona-Graphによる実験音声学的な方法を用い、アナウンサーにより朗読されたニュースなどの音声データを分析している。特に、数回現れた同じ文章を対象にその文章を構成しているそれぞれの単語の音調型を強弱と高低の観点から分析しているが、強弱(stress)は変動が激しいのに対し、高低は常に固定されている点からソウル方言のアクセントを高低アクセントと捉えている。ソウル方言の高低アクセントは単語において1音節あるいは2音節以上のものは全て対比的(contrastive)アクセントがあり、

³⁶ 孫在賢(2005a)ではソウル方言を無アクセントと捉えているが、孫在賢(2007a)は無アクセントから一型アクセントと捉え直しているため、ここでは孫在賢(2007a)のみ取り上げる。

一単語にはある特定の音節にアクセントが固定されており、これは性別や年齢と関係なく共通している。そのため、文にイントネーションが被さっても単語のアクセントは保たれると主張する。

それに対し、イ・ヒョンボク(1973)は高低によるミニマルペアが存在しない上で、単語のアクセントの位置は条件により変わる場合が多いと指摘している。そして、引用形の **utterance**(=文節)に現れるリズムパターンを分析し、ソウル方言のアクセントを強弱(**stress**)と音長(**length**)の結合した複合体であると主張する。アクセントの位置は母音の長短と音節構造により決まり、アクセントが置かれている音節は長くかつ強く発音されるのに対し、アクセントが置かれていない音節は短く発音されるという。

イ・ホヨン(1987)は、イ・ヒョンボク(1973)に賛成しつつ、重音節(**heavy syllable**)と軽音節(**light syllable**)の概念を用いて以下のように規則を立てている。

- ・最初の音節が重音節であれば、その音節にアクセントが置かれる。
- ・最初の音節が軽音節であれば、次の音節にアクセントが置かれる。しかし、強調する場合には最初の音節にアクセントが置かれる。

イ・サンジク(1987)はイ・ヒョンボク(1973)とイ・ホヨン(1987)を基に、韻律音韻論(**metrical phonology**)の方法論を用い、韓国語アクセント規則の形式化を試みたものとして、重音節と軽音節の対立は **rhyme** が枝を作るか否かによって決まるという。そして以下のような規則を立てている。

- ・各音節構造において **rhyme** が枝を作る最初の音節にアクセントが置かれる。
- ・枝を作る **rhyme** を持つ音節がない場合は、2音節目にアクセントが置かれる。

キム・チャギョン(1980)は声調方言から非声調方言への変化を捉えるため、ソウル方言を分析しており、当該方言を語頭子音の種類と音節構造により高低と強弱が予測可能な非声調方言と解釈している。

長渡(2003)は1～3音節名詞を対象に各音節の高低について観察しつつ、名詞の音調形と各音節の頭子音との相関関係についても観察を行っている。

第1音節の子音が平音・鼻音・母音始まりのときは、第1音節が低く、第2音節が高くなるのに対し、第1音節が濃音・激音である時は、第1音節と第2音節とも高く、第3音節は大体低くなるという。

一方、Fukui(2003)、孫在賢(2007a)、李文淑(2007)はアクセント体系からソウル方言のアクセント特徴について記述を行っている。

Fukui(2003)は一定した音調型によって各々の音韻句の境界が明瞭に表示されるか否かによって一型アクセントと無アクセントを分類している。ソウル方言は複数の音韻句が一

つにまとまって平板に発音される場合がよく見られ、音調型によって必ずしも音韻句の境界が表示されていないため、無アクセントと解釈している。

孫在賢(2007a)はソウル方言を狭義の一型アクセントであると解釈している。当該方言には言い切り形と接続形の相違が見られる。言い切り形の場合、1音節は下降調、2音節は1音節目のみ高い音調型で現れる。3音節以上は語頭の分節音が音調型の決定に密接に関わる。語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合は必ず1音節目と2音節目が高い音調型で現れ、それ以外の子音である場合は1音節目と2音節目が高い音調型と2音節目のみ高い音調型のどちらでも現れる。一方、接続形の場合、2音節以下は全ての音節が高い音調型で現れる。3音節以上は氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音は1音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れ、それ以外の場合は1音節目から最後の音節まで高く続く音調型と2音節目から最後の音節まで高く続く音調型のどちらでも現れる。

李文淑(2007)はソウル方言について「一見すると何の決まりもないように見えるが、初めに高くなる部分だけは決まっている。第2音節目以内に最初に高くなる音節があることだけは必ず守られる。対立は持っていないが、一つの定まったパターンがあることから1型アクセントと見る」(李文淑 2007:121)と分析している。分節音と音調型の関係については「語頭子音によって現れる音調パターンが決まることがある。語頭に特殊子音³⁷があると最初の音節から高くなるパターン、平音がある場合は第2音節から高くなるのが基本パターンになる。ただし、2音節語だけは第1音節から高くなるのが基本形である。語頭に長母音がある語は語頭に特殊子音がある語と同じ現れ方を見せるが、音節数が5音節を超えると長母音がなくなり、語頭に平音がある語と同じ現れ方をする」(李文淑 2007:121)という。言い切り形と接続形の相違に関しては「言い切り形と接続形の区別があり、言い切り形は文節末が低く現れるが、接続形は文節末が高くなる」(李文淑 2007:121)と述べている。そして、最終的には「語全体の音調は語アクセントにイントネーション、ポーズ、リズムなどが一体となって決まる」(李文淑 2007:121)と述べている。

以上、ソウル方言の音調的特徴について概観してきた。筆者はソウル方言の韻律的特徴を高低アクセントと捉える立場である。そして、この立場からソウル方言の音調的特徴を分析し、アクセント体系を明らかにしようとしている。筆者と同じ立場からソウル方言の音調的特徴を詳しく記述している先行研究には孫在賢(2007a)と李文淑(2007)がある。これらの先行研究と本稿は以下の四つの点から比較できる。

一つ目は、言い切り形と接続形の相違に対する解釈である。孫在賢(2007a)、李文淑(2007)、筆者が全て言い切り形と接続形の相違を認める。その特徴について孫在賢(2007a)は言い切り形で3音節目以降の低く現れる部分が接続形になると全て高く現れるため、両者の相違は下降の有無にあると述べている。李文淑(2007)は言い切り形では文節末が低く現れるのに対し、接続形では文節末が高く現れると述べている。筆者は孫在賢(2007a)と同様、言い

³⁷ 李文淑(2007)は 激音、濃音、s、h を特殊子音と呼んでいる。

切り形の音調型で必ず見られる下降が接続形になると現れなくなるため、両者の相違は下降の有無によって生じると解釈している。

二つ目は、言い切り形の2音節に現れる音調型の数に対する見解である。孫在賢(2007a)は1音節目のみ高い音調型の1種類の音調型しかないと解釈している。一方、李文淑(2007)は1音節目のみ高い音調型と1音節目と2音節目が高い音調型の2種類の音調型が現れると述べている。それに対し、筆者は1音節目のみ高い音調型、1音節目と2音節目が高くかつ2音節目に音節内下降が生じる音調型、1音節目は低くて2音節目は下降調で現れる音調型の3種類の音調型が現れると捉えている。3音節以上においては孫在賢(2007a)と李文淑(2007)と同様、1音節目と2音節目が高い音調型と2音節目のみ高い音調型の2種類の音調型が現れると捉えている。

三つ目は、接続形の音調型に対する解釈である。当該方言には1音節目あるいは2音節目から最後の音節まで高く続く音調型と最後の音節のみ高く現れる音調型が現れる。前者に対しては孫在賢(2007a)と李文淑(2007)とも接続形と解釈している。しかし、後者に対しては見解が異なる。孫在賢(2007a)は末尾卓立形と名付け、「聞き手に対する訴えかけが働いている。話し手が何らかの形で自分の意見をまとめたいという意志の表現および問題提起として切り出されるものと考えられる。イントネーションの一種として解釈される」(孫在賢 2007a:118)と述べている。李文淑(2007)は孫在賢(2007a)の解釈に対し、特別な感情表現及び訴えかけなどではなく、接続形の一種であると解釈をしている。筆者は基本的に孫在賢(2007a)と同様、1音節目あるいは2音節目から最後の音節まで高く現れる音調型のみを接続形と解釈する。一方、最後の音節のみ高く現れる音調型はポーズが置かれた際によく現れるが、ポーズによって言い切り形と混同されるのを避け、次に何かが続くということを積極的に示す役割を果たしていると考えられるため、接続形として捉えず、イントネーションの一種として解釈する。

四つ目は、分節音と音調型の関係に対する解釈である。分節音が音調型の決定に関与する点については孫在賢(2007a)、李文淑(2007)、筆者、ともに同じ見解である。孫在賢(2007a)は3音節以上において語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音で始まる語は1音節目と2音節目が高い音調型で現れ、それ以外のもので始まる語は1音節目と2音節目が高い音調型と2音節目のみ高い音調型の2種類の音調型が現れると述べている。一方、李文淑(2007)は3音節以上において語頭に語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合は語頭音節が高くなる音調型を、それ以外の場合は2音節目から高くなる音調型を基本として述べている。長母音の場合は語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合と同じ振る舞いを呈する。但し、孫在賢(2007a)と李文淑(2007)は分節音ごとに現れる音調型を記述しているにとどまっているため、音調型の決定に関与する分節音と関与しない分節音が明らかにされていない。筆者は音調型の決定に関与する分節音を分析している。当該方言の言い切り形に見られる全ての音調型は分節音に

よってその出現の有無が決定されない。2音節目のみ高い音調型の場合のみが語頭音節が短母音かつ氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音で始まる場合に限って現れる。そのため、語頭音節が短母音かつ氣息の強い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音で始まる場合のみが特定の音調型の出現に関与すると解釈できる。

3.2.2. 調査期間及びインフォーマント情報

調査期間に関しては、インフォーマント①は2013年11月に行い、インフォーマント②は2015年8月に行っている。インフォーマント③は2016年5月に行った。インフォーマント情報に関しては以下の通りである³⁸。

インフォーマント①：キム・ファギョン氏、1979年生まれの女性。

インフォーマント②：ハン・ヨンソン氏、1976年生まれの女性。

インフォーマント③：キム・ギョンソン氏、1962年生まれの女性。

データは詳しい調査ができたインフォーマント①を主に用いる。尚、2音節名詞においてインフォーマント③に異なる特徴が見られる。

3.2.3. 言い切り形における名詞の音調的特徴

当該方言は言い切り形と接続形の相違が見られる方言である。そのため、両者を分けて述べる必要がある。言い切り形に見られる全ての音調型は必ず下降が見られる特徴を有する。一方、当該方言は語頭の分節音によって現れる音調型に相違が見られる。

まず、語頭音節が短母音かつ氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合を見ていくと、1音節名詞の場合、単独形は下降調で現れる。*-(i).ja* (-だ)が付いて単位の長さが2音節あるいは3音節になった場合³⁹、2音節であれば、1音節目のみ高い音調型で現れ、3音節であれば1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。例の示し方に関しては、通常、同じ音節の名詞に音節数が異なる助詞を付けた場合の音調型を示す場合が多いが、筆者が調査したソウル方言話者の場合、助詞が付くと接続形で現れたり、イントネーションが被さって現れたりしたため、言い切り形として現れると予想される*-(i).ja* (-だ)を付けて調査を行った。

³⁸ その他に、ソウル出身の1982年生まれの女性にも簡単な調査を行った。

³⁹ *-(i).ja* (-だ)は単語の最後の音節が開音節なのか閉音節なのかによって決まる。開音節であれば、*-ja* が付き、閉音節であれば*-i.ja* が付く。そのため、開音節の1音節名詞の場合は単位の長さが2音節になり、閉音節の1音節名詞の場合は単位の長さが3音節になる。

- (40) a. $h\Lambda$ (舌) $h\Lambda\text{-}ja$ (舌-だ)
 [○]]. [○]◎。
- b. $k'ur$ (蜂蜜) $k'ur\text{-}i\text{-}ja$ (蜂蜜-だ)
 [○]]. [○○]◎。

2音節名詞の場合、基本的に単語単独形は1音節名詞に1音節助詞が付いた場合と同様、1音節目のみ高い音調型で現れる。-(i)ja(-だ)が付いて単位の長さが3音節以上になると、常に1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。

- (41) a. $h\Lambda\text{-}ri$ (腰) $h\Lambda\text{-}ri\text{-}ja$ (腰-だ)
 [○]○。 [○○]◎。
- b. $tho\text{-}k'i$ (兎) $tho\text{-}k'i\text{-}ja$ (兎-だ)
 [○]○。 [○○]◎。
- c. $so\text{-}kum$ (塩) $so\text{-}kum\text{-}i\text{-}ja$ (塩-だ)
 [○]○。 [○○]◎◎。
- d. $t'u\text{-}k'\Lambda\eta$ (蓋) $t'u\text{-}k'\Lambda\eta\text{-}i\text{-}ja$ (蓋-だ)
 [○]○。 [○○]◎◎。

尚、インフォーマント③において2音節名詞の単独形の場合、1音節目のみ高い音調型以外にも、1音節目と2音節目が高くかつ2音節目は音節内下降が生じる音調型も見られる。インフォーマント①とインフォーマント②では1音節目のみ高い音調型しか現れない。この差異が世代差によるものであるのか、個人差によるものであるのかは現段階で調査できた3名のインフォーマントからは明らかにし難い。今後、インフォーマントを増やして調査を行い、その原因を明らかにする必要があると考えられる。

- (42) a. $t'u\text{-}k'\Lambda\eta$ (蓋) [○○]].
- b. $se\text{-}u$ (海老) [○○]]~[○]○。
- c. $th\epsilon\text{-}p^h\Lambda\eta$ (台風) [○○]].
- d. $p^ha\text{-}to$ (波) [○○]].

3 音節以上の名詞の場合は、単独形から 1 音節目と 2 音節目が高い音調型で現れる。
 -(i).ja(-だ)が付いても同じ音調型で現れる。

- | | |
|---|--------------------------------------|
| (43) a. k'a.ma.kwi (カラス)
[○○]○。 | k'a.ma.kwi-ja (カラス-だ)
[○○]○○。 |
| b. si.kum.ŋhi (ほうれん草)
[○○]○。 | si.kum.ŋhi-ja (ほうれん草-だ)
[○○]○○。 |
| (44) a. t'ak.ta.ku.ri (キツツキ)
[○○]○○。 | t'ak.ta.ku.ri-ja (キツツキ-だ)
[○○]○○。 |
| b. hΛ.su.a.pi (案山子)
[○○]○○。 | hΛ.su.a.pi-ja (案山子-だ)
[○○]○○。 |

次に、語頭音節が短母音かつ氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音始まりの場合の音調的特徴を見ていくと、1 音節名詞では単独形は下降調で現れ、-(i).ja(-だ)が付いて単位の長さが 2 音節あるいは 3 音節になった場合、2 音節であれば、1 音節目のみ高い音調型で現れる。それに対し、3 音節であれば、1 音節目と 2 音節目が高い音調型と 2 音節目のみ高い音調型が現れる。

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| (45) a. pɛ (梨、お腹、船)
[○]]。 | pɛ-ja (梨、お腹、船-だ)
[○]○。 |
| b. kam (柿)
[○]]。 | kam-i.ja (柿-だ)
[○○]○～○[○]○。 |

2 音節名詞の場合は、単独形では基本的に 1 音節目のみ高い音調型が現れ、-(i).ja(-だ)が付いて単位の長さが 3 音節以上になれば、1 音節目と 2 音節目が高い音調型と 2 音節目のみ高い音調型の 2 種類の音調型が現れる。

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| (46) a. mo.ŋa (帽子)
[○]○。 | mo.ŋa-ja (帽子-だ)
[○○]○。 |
| b. na.mu (木)
[○]○。 | na.mu-ja (木-だ)
[○○]○～○[○]○。 |

- | | |
|----------------|--------------------|
| c. to.tuk (泥棒) | to.tuk-i.ja (泥棒-だ) |
| [○]○。 | [○○]◎◎～○[○]◎◎。 |
| d. ʃi.puŋ (屋根) | ʃi.puŋ-i.ja (屋根-だ) |
| [○]○。 | [○○]◎◎。 |

尚、2音節名詞の単独形の場合、インフォーマント③では1音節目のみ高い音調型以外にも、1音節目と2音節目が高くかつ2音節目は音節内下降が生じる音調型、1音節目は低くかつ2音節目は音節内下降が生じる音調型の2種類の音調型が現れる。この差異は既に述べた通り、世代差や個人差の可能性が考えられる。今後、インフォーマントを増やして調査を行う必要がある。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| (47) a. ka.paŋ (カバン) | [○]○～[○○]]～○[○]]。 |
| b. kʌ.wi (ガチョウ) | [○]○～[○○]]～○[○]]。 |
| c. tuŋ.ʃi (巢) | [○○]]～○[○]]。 |
| d. a.kwi (アンコウ) | [○]○～[○○]]。 |

3音節以上の名詞は単独形から1音節目と2音節目が高い音調型と2音節目のみ高い音調型の2種類の音調型が現れる。-(i).ja(-だ)が付いても同様である。

- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| (48) a. kɛ.ku.ri (蛙) | kɛ.ku.ri-ja (蛙-だ) |
| [○○]○～○[○]○。 | [○○]○◎～○[○]○◎。 |
| b. pi.tur.ki (鳩) | pi.tur.ki-ja (鳩-だ) |
| [○○]○～○[○]○。 | [○○]○◎。 |
| (49) a. ko.sum.to.ʃhi (ハリネズミ) | ko.sum.to.ʃhi-ja (ハリネズミ-だ) |
| [○○]○○。 | [○○]○○◎～○[○]○○◎。 |
| b. toŋ.ku.ra.mi (丸) | toŋ.ku.ra.mi-ja (丸-だ) |
| [○○]○○～○[○]○○。 | [○○]○○◎～○[○]○○◎。 |

最後に、インフォーマント①に限って2音節名詞と3音節名詞に語頭音節が長母音で現

れる場合が観察される。長母音を持つ音節は高くかつ長く発音される。2 音節名詞の場合、単独形では1 音節目のみ高い音調型で現れる。-(i).ja(-だ)が付いた3 音節になると、1 音節目と2 音節目が高い音調型で現れる。3 音節名詞は単独形から1 音節目と2 音節目が高い音調型で現れる。尚、場合によって長母音が脱落する場合もある。

- (50) a. ki:m.ɸi (キムチ) ki:m. ɸi-ja (キムチ-だ)
 [○:]○。 [○:○]◎。
- b. ka:n.ɸaŋ (醤油) ka:n.ɸaŋ-i.ja (醤油-だ)
 [○:]○。 [○:○]◎◎。
- c. ko:r.pɛŋ.i (カタツムリ) ko:r.pɛŋ.i-ja (カタツムリ-だ)
 [○:○]○。 [○:○]○◎~○[○]○◎。
- d. toŋ.ɸi.mi (大根の水キムチ) toŋ.ɸi.mi-ja (大根の水キムチ-だ)
 [○:○]○。 [○:○]○◎~[○○]○◎。

以上、名詞を中心に言い切り形の音調的特徴について記述を行った。言い切り形の音調型は全て下降が見られる点に関して共通している。一方、分節音ごとに現れる音調型には相違が見られる。分節音ごとに現れる音調型をまとめて示せば、以下のようになる。

表 11 ソウル方言における言い切り形の音調型

母音の長短 \ 子音の種類		単位の長さ			
		1	2	3	4
長母音	—	—	[○:]○	[○:○]○	[○:○]○○
短母音	氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音	[○]	[○]○~ [○○]	[○○]○	[○○]○○
	氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音、母音始まり	[○]	[○]○~ [○○]~ ○[○]	[○○]○~ ○[○]○	[○○]○○~ ○[○]○○

一見、全ての分節音が特定の音調型の出現に関与すると思われがちである。しかし、分節音によって全ての音調型の出現が決まるわけではない。2 音節において現れる1 音節のみ高い音調型と、1 音節目と2 音節目が高い音調型は分節音の影響によるものではない。

2音節において現れる1音節のみ高い音調型は分節音を問わず現れるが、この音調型は言い切り形の影響によるものである。当該方言は言い切り形と接続形の相違が見られ、言い切り形は必ず下降が現れる。2音節において下降が生じ得る位置は1音節目と2音節目の間と2音節目の音節内である。前者が最も言い切り形の特徴が反映された位置であるといえる。そのため、2音節で現れる1音節目のみ高い音調型は決まりきった特徴であるといえる。1音節目と2音節目が高い音調型の場合、長母音の2音節を除けば、分節音を問わず、全ての場合に現れるため、分節音の影響を受けていないといえる。2つの音調型を除外すれば、2音節目のみ高い音調型のみ残される。この音調型は語頭音節が短母音かつ氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音で始まる場合に限って現れる。従って、当該方言において特定の音調型を実現させる分節音は語頭音節が短母音かつ氣息の弱い無声有気音鼻音、流音、接近音である場合と母音で始まる場合である。

当該方言に現れる3種類の音調型はお互いに対立を成していない。1音節目のみ高い音調型の場合、2音節で分節音を問わず現れるものであり、1音節目と2音節目が高い音調型の場合も長母音の2音節を除いた全ての場合に全て現れる。2音節目のみ高い音調型の場合は分節音によって現れる環境が予測可能である。よって、当該方言を一型アクセントとして解釈できる。

3.2.4. 言い切り形と接続形の相違

言い切り形の場合は全ての音調型において必ず下降が現れる。下降の位置から捉えた場合、1音節目と2音節目の間に下降が生じる音調型と2音節目と3音節目の間に下降が生じる音調型に分類できる。しかし、接続形になると、下降が現れなくなるため、全ての音調型が1音節目あるいは2音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。語頭音節の高さは分節音の影響を受けるため、語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音の場合は語頭音節が高く現れる。一方、語頭子音が氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音始まりの場合は高くも低くも現れる。以下に体言＋用言からなる構造の場合の例を示す。複数の文節からなるため、アクセント単位は2つに分かれている、名詞を含む第1文節は後ろの用言に接続している環境に置かれているため、接続形で現れる。

(51) a. *nun-i | nok-at.ta* (雪-が | 解け-た)

○[◎] | [○○]◎。

b. *na.mu-ka | tu.k'ap-ta* (木-が | 厚-い)

○[○○]~[○○◎] | ○[○]◎。

c. kaŋ.a.ŋi-ka | kwi.jap-ta (子犬-が | かわいい-い)
○[○○◎] | [○○]◎。

d. hΛ.ri-ka | ku.pu.ŋ(h)a-ta (腰-が | 曲がつ-ている)
[○○◎] | ○[○]○○◎～[○○]○○◎。

3.2.5. 最後の音節のみ高く現れる音調型について

当該方言においては、文節末尾の音節が高く現れる場合がある。言い切り形に被さって現れる場合もあれば、最後の音節のみ高く現れる場合もある。前者は4音節以上でよく現れ、後者は3音節以下で現れる。しかし、既述した通り、最後の音節のみ高く現れる音調型はポーズが置かれた際によく現れるが、ポーズによって言い切り形と混同されるのを避け、次に何かが続くということを積極的に示す役割を果たしていると考えられるため、接続形として捉えず、イントネーションの一種として解釈できる。

- | | |
|---|---|
| (52) a. pɛ-ka (梨、お腹、船-が)
○[◎]… | pɛ-po.ta (梨、お腹、船-より)
○○[◎] … |
| b. hΛ.ri-ka (腰-が)
○○[◎]… | hΛ.ri-po.ta (腰-より)
[○○]◎[◎]… |
| c. mɛ.t'u.ki-ka (バター-が)
○[○]○[◎]… | mɛ.t'u.ki-ka (バター-より)
○[○]○[◎]… |
| d. t'a.ta.ku.ri-ka (キツツキ-が)
[○○]○○[◎]… | t'a.ta.ku.ri-po.ta (キツツキ-より)
[○○]○○◎[◎]… |

3.2.6. 複合名詞の音調的特徴

基本的に表 11 に示した通りに現れる。便宜上、それぞれの要素を前部要素と後部要素と呼ぶ。

- (53) a. 1音節名詞 + 1音節名詞
k'ot(花) + pat(畑) → k'ot-pat(花畑)
[○]]. + [○]]. → [○]○。

- b. 1 音節名詞 + 2 音節名詞
 ir (仕事) + ʃa.ri (席) → ir-ʃa.ri (働く機会)
 [○]]. + [○]○。 → [○○]○～○[○]○。
- c. 1 音節名詞 + 3 音節名詞
 kɛ.na.ri (レンギョウ) + k'ot (花) → kɛ.na.ri-k'ot (レンギョウの花)
 [○○]○。 + [○]]. → [○○]○○～○[○]○○。
- d. 2 音節名詞 + 2 音節名詞
 na.mu (木) + ki.tuŋ (柱) → na.mu-ki.tuŋ (木柱)
 [○]○。 + [○]○。 → [○○]○○～○[○]○○。
- e. 2 音節名詞 + 3 音節名詞
 ʃoŋ.i (紙) + pi.(h)ɛŋ.ki (飛行機) → ʃoŋ.i-pi.(h)ɛŋ.ki (紙飛行機)
 [○]○。 + [○○]○。 → [○○]○○○～○[○]○○○。
- f. 3 音節名詞 + 2 音節名詞
 saŋ.su.ri (団栗) + na.mu (木) → saŋ.su.ri-na.mu (クヌギ)
 [○○]○。 + [○]○。 → [○○]○○○。
- g. 4 音節名詞 + 1 音節名詞
 kja.tu.raŋ.i (脇) + thɿr (毛) → kja.tu.raŋ.i-thɿr (脇毛)
 ○[○]○○～[○○]○○。 + [○]]. → [○○]○○○～○[○]○○○。

尚、複合名詞の場合、2つのアクセント単位に分かれて現れる場合も見られる。アクセント単位が2つに分かれている場合、後部要素に対し前部要素は接続している環境に置かれているため、言い切り形ではなく接続形で現れる。

- (54) a. wɛ.kuk + u.pʰjaŋ.mur → wɛ.kuk -u.pʰjaŋ.mur
 (外国) (郵便物) (外国郵便物)
 [○]○。 + ○[○]○。 → ○[○]|[○○]○～○[○]|[○]○。
- b. ɿr.kur + sɛŋ.kim.sɛ → ɿr.kur-sɛŋ.kim.sɛ
 (顔) + (恰好) → (顔立ち)
 [○]○。 + [○○]○。 → [○○]|[○○]○～○[○]|[○○]○。

3.2.7. 用言の音調的特徴

用言の場合も名詞と同じ特徴を有すると言える。2音節は分節音を問わず、1音節目のみ高い音調型が現れる。3音節以上は語幹の1音節目の分節音によって全体の音調型が決定される。語頭音節が短母音かつ氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合は1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。それに対し、語頭音節が短母音かつ氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音始まりの場合は1音節目と2音節目が高い音調型と2音節目のみ高い音調型が両方現れる。以下に例を示す。例は $-ta$ (辞書形)、 $-ko$ (中止法の $-て$)、 $-at.ta/\Delta t.ta$ (過去形)、 $-a.s\Delta/\Delta.s\Delta$ (原因と理由の $-て$) が付いた活用形の音調型をそれぞれ示す。尚、用言は活用の仕方によっては語幹と活用語尾が融合する場合があります、音節の境界と一致しない場合がある。ここでは音節の境界と、語幹と活用語尾の境界を優先するため、形態素の境界は語幹と活用語尾の境界のみを示すことにする。

(55) a. $ka\cdot ta$ (行-く) [○]◎。	$ka\cdot ko$ (行っ-て) [○]◎。	$ka\cdot tta$ (行っ-た) [○]◎。	$ka\cdot s\Delta$ (行っ-て) [○]◎。
b. $k^h u\cdot ta$ (大き-い) [○]◎。	$k^h u\cdot ko$ (大き-くて) [○]◎。	$k^h \Delta\cdot tta$ (大き-かった) [○]◎。	$k^h \Delta\cdot s\Delta$ (大き-くて) [○]◎。
c. $ip\cdot ta$ (着-る) [○]◎。	$ip\cdot ko$ (着-て) [○]◎。	$ip\cdot \Delta t.ta$ (着-た) [○○]◎～ ○[◎]◎。	$ip\cdot \Delta.s\Delta$ (着-て) [○○]◎。
d. $phar\cdot ta$ (売-る) [○]◎	$phar\cdot ko$ (売っ-て) [○]◎。	$phar\cdot at.ta$ (売っ-た) [○○]◎。	$phar\cdot a.s\Delta$ (売っ-て) [○○]◎。
(56) a. $ma.si\cdot ta$ (飲-む) [○○]◎～ ○[○]◎。	$ma.si\cdot ko$ (飲ん-で) [○○]◎～ ○[○]◎。	$ma.sj\Delta\cdot tta$ (飲ん-だ) [○○]◎。	$ma.sj\Delta\cdot s\Delta$ (飲ん-で) [○○]◎。

b. s'a.u-ta (争-う) [○○]◎。	s'a.u-ko (争っ-て) [○○]◎。	s'a.wo-tta (争っ-た) [○○]◎。	s'a.wo-sΛ (争っ-て) [○○]◎。
c. kwen.ɸan-ta (大丈夫-だ) [○○]◎～ ○[○]◎。	kwen.ɸan-ko (大丈夫-で) [○○]◎～ ○[○]◎。	kwen.ɸan-at.ta (大丈夫-だった) [○○]◎◎～ ○[○]◎◎。	kwen.ɸan-a.sΛ (大丈夫-で) [○○]◎◎～ ○[○]◎◎。
d. sur.p ^h u-ta (悲し-い) [○○]◎。	sur.p ^h u-ko (悲し-くて) [○○]◎。	sur.p ^h at-ta (悲し-かった) [○○]◎◎。	sur.p ^h Λ-sΛ (悲し-くて) [○○]◎◎。

(57) a. mo.ɸa.ra-ta (足りな-い) [○○]○○～ ○[○]○○。	mo.ɸa.ra-ko (足りな-くて) [○○]○○～ ○[○]○○。	mo.ɸa.ra-tta (足りな-かった) [○○]○○。
--	---	--------------------------------------

mo.ɸa.ra-sΛ
(足りな-くて)
[○○]○○。

b. p'a.t'w.ri-ta (忘れ-る) [○○]○○。	p'a.t'w.ri-ko (忘れ-る) [○○]○○。	p'a.t'w.rjΛ-tta (忘れ-た) [○○]○○。
---------------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------

p'a.t'w.rjΛ-sΛ
(忘れ-て)
[○○]○○。

3.2.8. まとめ

当該方言は言い切り形と接続形の相違が見られる。言い切り形の音調型は全て下降が見られる。一方、当該方言は分節音によって現れる音調型に相違が見られる。

語頭が短母音かつ氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合は、1音節は下降調、2音節は1音節目のみ高い音調型と1音節目と2音節目が高い音調型が現れる。3音節以上は1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。一方、

語頭が短母音かつ氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音で始まる場合、1音節は下降調で現れ、2音節は1音節目のみ高い音調型、1音節目と2音節目が高い音調型、2音節目のみ高い音調型が現れる。3音節以上は1音節目と2音節目が高い音調型と2音節目のみ高い音調型が現れる。長母音の場合、2音節は1音節目のみ高い音調型で現れ、3音節以上は1音節目と2音節目が高い音調型で現れる。尚、分節音ごとに現れる音調型に相違は見られるものの、全ての音調型が分節音によって決まるわけでない。2音節で現れる1音節目のみ高い音調型と1音節目と2音節目が高い音調型は分節音の影響を受けないものである。前者は分節音を問わず現れる上、言い切り形の特徴によるものであり、後者は長母音の2音節を除いた全ての場合に現れるものである。そのため、除外する必要がある。これらの音調型を除外すれば、2音節目のみ高い音調型が残される。この音調型の現れる環境を見れば、語頭音節が短母音かつ氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音で始まる場合に限って現れる。そのため、分節音の影響を受けているといえる。

当該方言に現れる3種類の音調型はお互いに対立を成していない。1音節目のみ高い音調型は2音節で分節音を問わず現れるものであり、1音節目と2音節目が高い音調型の場合は長母音の2音節を除いた全ての場合に現れる。2音節目のみ高い音調型の場合は分節音によって現れる環境が予測可能である。よって、音声的に3種類の音調型が現れるものの、当該方言を一型アクセントと解釈する。

言い切り形と接続形の相違については、言い切り形は下降が現れるのに対し、接続形は下降が現れない。そのため、当該方言の言い切り形と接続形の相違は下降の有無によって生じるといえる。

複合名詞と用言も上記で述べた特徴と同じ特徴を有する。尚、複合名詞の場合は2つのアクセント単位に分かれて現れる場合もある。その場合、前部要素は接続形で現れ、後部要素は言い切り形で現れる。

3.3. ナジュ方言

ナジュ方言は韓国の西南部に位置しているチョルラ道方言の下位方言の一つである。チョルラ道方言は語頭の分節音が音調型と密接に関わる点から高低アクセントの認定に対する解釈をめぐって見解が分かれる方言である。このような背景を踏まえつつ、ナジュ方言を対象にその音調的特徴を記述・分析する。

3.3.1. 先行研究

ナジュ方言の音調的特徴を詳細に記述した研究は管見の限り見当たらない。但し、チョルラ道方言に属しつつ、ナジュ方言と隣接したクァンジュ方言とムアン(務安)方言のアクセントに関する研究にはキム・チャギョン(1969)、早田(1999)、李文淑(2005、2007、2010)、孫在賢(2007a、2007b)がある。

キム・チャギョン(1969)はムアン方言とクァンジュ方言を含め、ヘナム(海南)方言、モクポ(木浦)方言の音調的特徴を記述・分析しており、チョルラ南道方言を H と L の 2 つの声調⁴⁰を持つ声調方言と解釈している⁴¹。音節ごとに以下の声調型⁴²を持つという。

(58) チョルラ南道方言における音節ごとの声調型(キム・チャギョン:1969)

- 1 音節語 : /H/、/L/
- 2 音節語 : /L-L/、/H-L/、/L-H/、/H-H/
- 3 音節語 : /L-H-L/、/H-H-L/、/H-L-L/

しかし、各声調型の実現において母音の長短と語頭子音の種類が密接に関わると指摘している。その割合はヘナム方言・ムアン方言、モクポ方言、クァンジュ方言がそれぞれ異なる。このような事実から上記の方言どうしの比較考察を行うとともに、キョンサン南道チャンウォン(昌原)方言とも比較考察を行い、チョルラ道方言における声調体系の変遷過程を提示している。

早田(1999)はキム・チャギョン(1969)の資料に基づき、ヘナム方言・ムアン方言は上昇、下降、平の 3 つの弁別的な声調素を持つ語声調言語と捉えている一方、クァンジュ方言は下降と非下降の 2 つの声調が弁別的な語声調言語と捉えている。

李文淑(2005、2007、2010)はクァンジュ方言のアクセントについて母音の長短と語頭子音の種類がアクセント型の実現に強く影響するものの、音声的要素から予想できない語例が存在するため、1 音節目のみ高いグループ、1 音節目と 2 音節目が高いグループ、2 音節目のみ高いグループが対立を成していると解釈している。そして以下のような体系を立てている。

⁴⁰ 音節ごとに決まっている音韻的な高さである。

⁴¹ 音節ごとの声調型を以下のように示している。但し、原文では /3/ (高い音調) と /2/ (低い音調) で表記されているが、表記の一貫性のため、/3/ と /2/ をそれぞれ H と L に書き直している。

⁴² 複数の声調が組み合わった音韻的な概念である。

(59) 李文淑(2010)によるクァンジュ方言のアクセント体系

A グループ	[○]◎	[○]○	[○]○□ ⁴³	[○]○□□	[○]○□□□
B グループ	[○◎]	[○○]	[○○]□	[○○]□□	[○○]□□□
C グループ	○[◎]	○[○]	○[○]□	○[○]□□	○[○]□□□

孫在賢(2007a、2007b)は李文淑(2005、2007、2010)と同様、クァンジュ方言を対象に同じ解釈を行った上で、(59)と類似した体系を立てている。

上記の先行研究をまとめてみると、解釈において異なる見解を示す場合もあるが、二つの点に関しては共通している。一つ目は音声的に1音節目のみ高い音調型、1音節目と2音節目が高い音調型、2音節目のみ高い音調型の三種類の音調型が現れる点である⁴⁴。二つ目としては、各音調型の出現において母音の長短と語頭子音の種類が密接に関わる点である。この2つの点はナジュ方言にも全て見られる。

3.3.2. 調査期間及びインフォーマント情報

調査は2016年3月に行った。インフォーマント情報は以下の通りである。

インフォーマント①：ソ・グァンス氏、1945年生まれ、男性。

インフォーマント②：ナ・ジョンズ氏、1948年生まれ、男性。

3.3.3. 言い切り形における音調的特徴

当該方言は言い切り形と接続形の相違が見られるため、両者を分けて記述を行う必要がある。

当該方言の言い切り形に見られる音調型には、全て下降が見られる点において共通している。音調型は下降の位置と語頭音節の高さによって以下の3種類が現れる。便宜上、パターン①、パターン②、パターン③と呼ぶ。音調型の出現において母音の長短と語頭子音の種類が密接に関わる。

パターン①：1音節目は高く現れ、2音節目からは低く現れる。([○]○○…)

パターン②：1音節目と2音節目は高く現れ、3音節目からは低く現れる。2音節の場合、2音節目内で下降が生じる。([○○]○…)

⁴³ □は高くても低くても語のアクセントに影響を与えない任意の音を意味する。

⁴⁴ 但し、キム・チャギョン(1969)の解釈では音節ごとに異なる数の声調型を示しているため、一見上記の3種類の音調型以外のものが存在すると思われがちであるが、音節間の相対的な高さから資料を捉え直すと、音声的には上記の3種類の音調型しか現れない。

パターン③： 2音節目のみ高く現れ、1音節目と3音節目以降は低く現れる。2音節の場合は2音節目内で下降が生じる。(○[○]○…)

3.3.3.1. パターン①の特徴

語頭音節の母音が長母音である場合は語頭子音の種類を問わず、必ずパターン①で現れる。音節別の具体的な音調的特徴を見ると、1音節名詞単独形は下降調で現れる。但し、語頭音節が短母音である1音節名詞に見られる下降調より長く発音される。単位の長さが2音節以上になると、1音節目は長い高平調あるいは上昇調で現れ、2音節目からは低く現れる。

表 12 長母音を持つパターン①における長さごとの現れ方（言い切り形）

1	2	3	4
[○:]]	[○:] ○	[○:] ○○	[○:] ○○○

- (60) a. t'on (お金) b. ʃe:pi (燕) c. ʃa:ŋ.to.ri (金槌) d. mu:tan.par.ɾɛ (テントウムシ)

以下の例は長母音を語頭音節の母音で持つ語に助詞が付いた場合の音調型である。

- (61) a. to:n (お金) to:n-u:n (お金-は) to:n-i.ʃɛ (お金-だ)
[○:]]。 [○:] ◎。 [○:] ◎◎。
- b. ʃe:pi (燕) ʃe:pi-nu:n (燕-は) ʃe:pi-(h)a.ko (燕-と)
[○:] ○。 [○:] ○◎。 [○:] ○◎◎。
- c. ʃa:ŋ.to.ri (金槌) ʃa:ŋ.to.ri-nu:n (金槌-は) ʃa:ŋ.to.ri-ra (金槌-と)
[○:] ○○。 [○:] ○○○◎。 [○:] ○○○◎

長母音は場合によって脱落する時がある。すると、同じ語であっても語頭音節が短母音である場合と同じ振る舞いを呈する。例えば、以下の例は本来長母音を持つ語であるため、必ずパターン①で現れるはずであるが、長母音の脱落によってパターン②に変わって現れている。

- (62) kʌ:n.ʃʌn.ʃi (乾電池) kʌn.ʃʌn.ʃi-ko (乾電池-であり)
[○:] ○○。 [○○] ○◎。

一方、語頭音節の母音が短母音である場合にもパターン①が現れる。

表 13 短母音を持つパターン①における長さごとの現れ方（言い切り形）

1	2	3	4
[○]]	[○]○	[○]○○	[○]○○○

しかし、語頭子音の種類と単位の長さが出現条件に関わる。単位の長さが2音節である場合は語頭子音の種類と問わず、パターン①が現れる。しかし、3音節以上では、語頭に氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音が立つ時に限ってパターン①が現れる。しかし、出現頻度が非常に少ない上に、仮に現れたとしてもパターン②でもよく現れるなど、非常に不安定な様相を見せる。パターン①とパターン②の現れにおいてはインフォーマントの間で異なる音調型が現れる場合もあれば、同じ話者の中でパターン①とパターン②の両方が現れる場合もある。

インフォーマントの間でお互いに異なる音調型が現れる場合の具体例をみると、1音節名詞 tʰʌk(お餅)を含む文節の音調型ではインフォーマント①はパターン②で発音していたのに対し、インフォーマント②はパターン①では発音していた。

(63) 同じ語においてインフォーマントの間で異なる音調型が現れる場合

a. インフォーマント①の場合： tʰʌk-i.jʌ (お餅-だよ)

[○○]◎。

b. インフォーマント②の場合： tʰʌk-i.ra.ko (h)a.ɸi (お餅-というよ)

[○]◎◎◎◎◎。

一方、インフォーマント②の場合、tʰʌk(お餅)を含む文節の音調型においてパターン①とパターン②の両方が現れることが以下の例(61)を見ると分かる。

(64) 同一話者(インフォーマント②)の中でパターン①とパターン②の両方が現れる場合

tʰʌk-i.ra.ko (お餅-と)

[○]◎◎◎~[○○]◎◎。

3.3.3.2. パターン②の特徴

語頭音節の母音が短母音であれば、語頭子音の種類を問わず現れる。そのため、語頭音節で短母音を持つ語にとっては無標の音調型であるといえる。以下に音節別の現れ方を示

す。

表 14 パターン②における長さごとの現れ方（言い切り形）

1	2	3	4
[O]	[OO]	[OO]O	[OO]OO

- (65) a. mar b. p^ha.ri c. ku.rim.ʃa d. t'ak.t'a.ku.ri
 (馬) (蠅) (影) (キツツキ)

3.3.3.3. パターン③の特徴

パターン③は語頭音節が短母音であり、且つ語頭子音が氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と短母音で始まる場合に限って現れる。母音の長短と語頭子音の種類の両方の条件が満たされて初めて現れるため、非常に制限的な現れ方をするといえる。

表 15 パターン③における長さごとの現れ方（言い切り形）

1	2	3	4
$[\text{O}]_0$	$\text{O}[\text{O}]_0$	$\text{O}[\text{O}]\text{O}_0$	$\text{O}[\text{O}]\text{OO}_0$

- (66) a. pɛ b. na.mɛ c. pe.ŋʰan-wɯr⁴⁵ d. mir.kam-i.na
(梨、お腹、船) (南海) (麻布-を) (ミカン-でも)

しかし、パターン③はパターン②でもよく現れ、非常に不安定な様相を呈する。例えば、mir.kam(ミカン)を含む文節の音調型を見ると、2名のインフォーマントの間で互いに異なる音調型で現れ、インフォーマント①はパターン②で現れるのに対し、インフォーマント②はパターン③で現れるなど、個人差が見られる。

(67) インフォーマントの間で異なる音調型が現れる場合

- a. インフォーマント① : mir.kam-i.ra.ko.to (ミカン-とも(言う))
[○○]◎◎◎◎。
- b. インフォーマント② : mir.kam-i.na (ミカン-でも)
○[○]◎◎。

一方、同じ話者の中でも、同じ語においてパターン①とパターン②の両方が現れる場合もみられる。例えば、*pe.thar*(お腹を壊すこと)の場合、インフォーマント①ではパターン

⁴⁵ 3音節名詞と4音節名詞の単独形では観察されなかったため、助詞が付いた場合のものを提示した。

②とパターン③の両方が現れた。

3.3.3.4. 分節音と音調型の関係

当該方言に見られる音調型が、その出現において分節音がどのようなに関与するかについて考察を行う。

母音の長短から見ると、語頭音節の母音が長母音である場合は必ずパターン①で現れるため、長母音が特定の音調型を実現させるといえる。それに対し、短母音である場合は3種類の音調型が全て現れる。但し、分節音によって現れる音調型に相違が見られる。語頭に氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音が立つ場合はパターン①とパターン②の2種類の音調型が現れる。一方、語頭に氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音が立つ場合と母音で始まる場合は2音節ではパターン①、パターン②、パターン③の3種類の音調型が現れ、3音節以上ではパターン②とパターン③の2種類の音調型が現れる。

(68) 語頭子音の種類によって現れる音調型

	2 音節	3 音節	4 音節
氣息の強い無声有気音、 無声無気音、無声歯茎摩擦音、 無声声門摩擦音	①～②	①～②	①～②
氣息の弱い無声有気音、鼻音、 流音、接近音、母音始まり	①～②～③	②～③	②～③

しかし、全ての音調型の出現に分節音が関わるわけではない。そのため、分節音の関与が認められないと解釈できる音調型を除外する必要がある。分節音の関与が認められない音調型はパターン②と2音節にみられるパターン①である。

パターン②の場合は分節音を問わず、全ての場合において現れるため、分節音によって出現環境の有無が決定されないと捉えられる。

2音節に現れるパターン①の場合は当該方言の言い切り形と接続形の相違に密接に関わるものである。当該方言における音調型の決定に最も優先的に関与するのは言い切り形と接続形である。2音節にみられるパターン①は言い切り形の特徴が優先された結果によるものであるため、分節音と関係なく、全ての場合に現れるのである。

パターン②と2音節のパターン①を除外すると、パターン①とパターン③の2つの音調型が残される。これらの音調型は語頭子音の種類によって現れる環境が決定される。

(69) 語頭子音の種類とパターン①、パターン③の関係

	2 音節	3 音節	4 音節
気息の強い無声有気音、 無声無気音、無声歯茎摩擦音、 無声声門摩擦音	—	①	①
気息の弱い無声有気音、鼻音、 流音、接近音、母音始まり	③	③	③

語頭が気息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合はパターン①の出現の有無に関与する。一方、気息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音といった子音の場合と母音始まりの場合はパターン③の出現の有無に関与する。

以上の内容をまとめると、当該方言は母音の長短、語頭子音の種類が全て特定の音調型の実現に関与すると解釈できる。以下に分節音と音調型の関係をまとめて示す。

表 16 ナジュ方言における分節音と音調型の関係

語頭の子音の種類		音節数	2 音節	3 音節	4 音節
長母音			①	①	①
短母音	気息の強い無声有気音、無声無気音、 無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音	—	①	①	①
	気息の弱い無声有気音、鼻音、 流音、接近音、母音始まり	③	③	③	③

3.3.3.5. まとめ

以上、ナジュ方言の音調的特徴について記述・分析を行った。当該方言には音声的に1音節目は高く現れて2音節目からは低く現れるパターン①、1音節目と2音節目は高く現れて3音節目からは低く現れるパターン②、2音節目のみ高く現れて1音節目と3音節目以降は低く現れるパターン③の3種類の音調型が現れる。

当該方言の音調型の出現は分節音と密接に関わる。語頭音節が長母音であれば、必ずパターン①で現れるため、長母音は特定の音調型を出現させると捉えられる。一方、短母音の場合はパターン①、パターン②、パターン③の3種類の音調型が現れる。短母音に見られる音調型はその出現において語頭子音の種類が関与する。しかし、全ての音調型が分節音に関与されるわけではない。パターン②と2音節目にみられるパターン①は分節音の関与が認められないため、除外する必要がある。パターン②は分節音を問わず、全ての場合に現れるため、分節音の関与が認められない。一方、2音節目にみられるパターン①も分節音

を問わず現れる。これは当該方言における言い切り形と接続形の相違と密接に関わる。当該方言の言い切り形は必ず下降が現れる。2音節のパターン①は言い切り形の特徴が優先された結果によるものであるため、分節音を問わず現れると捉えられる。この2つの音調型を除外すると、パターン①とパターン③が残される。これらの音調型は分節音によってその出現が決定される。氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音が語頭に立つ場合はパターン①の出現に関与する一方、氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音が語頭に立つ場合と母音で始まる場合はパターン③の出現に関与する。

当該方言には音声的に3種類の音調型が現れるが、分節音によって現れる音調型が決定される傾向が強く、そうではない場合は分節音を問わず同じ単語に対し複数の音調型が現れるため、3種類の音調型はお互いに対立を成していない関係であるといえる。よって、一型アクセントと解釈できる。

3.3.4. 言い切り形と接続形の相違

当該方言は言い切り形と接続形の相違が見られる。以下に2つ以上の文節からなる場合に見られる音調型を示す。複数のアクセント単位に分かれているといえるが、最後のアクセント単位を成している文節は3.3.3節で述べた言い切り形の音調型で現れる。それに対し、最後のアクセント単位以外のアクセント単位は1音節目あるいは2音節目から文節の最後の音節まで高く続く音調型で現れる。語頭音節の高さは分節音の影響を受け、語頭音節が長母音である場合と、語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音は高く現れ、それ以外の場合は低くも高くも現れる。この特徴から当該方言における言い切り形と接続形の相違は下降の有無によって生じるといえる。

- (70) a. *pjaːŋ-e | ka.rjaʔt-ne* (病気-に | かかっ-た)

[○:◎] | [○○]◎。

- b. *mok-i | kiːr-ta* (首-が | 長-い)

[○○] | [○:]◎。

- c. *ʌr.kur-i | no.rat-ne* (顔色-が | 黄色-いね)

[○○◎] | [○○]◎。

- d. *ju.ri.ʧʰaŋ-i | k'ɛ.ʧʰaʔt-ta* (窓ガラス-が | 割れ-た)

○[○○◎] | [○]◎。

- e. *sar.rim-i | naʔk.naʔk-ʧʰi | moːt.hʌ-ta* (暮ら-し-が | 豊か-では | な-い)

[○○◎] | ○[○○] | [○:]◎◎。

3.3.5. 複合名詞の音調的特徴

複合名詞の音調的特徴は 3.3.3 節で述べた音調的特徴と基本的に同様であると言える。複合名詞の場合は前部要素の語頭の分節音によって複合名詞全体の音調型が決まる。例えば、例(71)の a と b は前部要素の語頭音節が長母音である so:m (綿)と to:r(石)であるが、後部要素の語頭子音の種類は関係なく全てパターン①で現れることが分かる。

(71) a. 前部要素が so:m (綿)である場合

- | | |
|------------------------|------------------------|
| i. so:m-i.pur (綿入りの布団) | ii. so:m-sa.thaŋ (綿あめ) |
| [○:]○○。 | [○:]○○。 |

b. 前部要素が to:r (石)である場合

- | | |
|---------------------|------------------------|
| i. to:r-ko.re (イルカ) | ii. to:r-t'ʌŋ.ʌ.ri (石) |
| [○:]○○。 | [○:]○○○。 |

語頭音節が短母音である上で、子音の種類が関わる場合でも長母音の場合と同様、前部要素の語頭音節の子音の種類が全体の音調型の決定に関わる。但し、単純名詞の場合は少数ながらも語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音で始まる場合はパターン①が観察されたのに対し、筆者の調査では複合名詞では観察されなかった。また、子音が氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音で始まる場合と母音で始まる場合において1つのアクセント単位からなる複合名詞にパターン③は観察されなかった。尚、2つのアクセント単位からなる複合名詞では観察された。以下に例を示す。

(72) a. 前部要素が kʰo(鼻)である場合

- | | | |
|-------------|----------------|---------------------|
| i. kʰo-pʲʌ | ii. kʰo-kam.ki | iii. kʰo-huur.ri.ke |
| (鼻の骨) | (鼻かぜ) | (鼻垂らし) |
| [○]○～[○○]]。 | [○○]○。 | [○○]○○。 |

b. 前部要素が san(山)である場合

- | | | |
|-------------|-----------------|----------------------|
| i. san-k'ir | ii. san-t'ar.ki | iii. san-k'or.ɰ'a.ki |
| (山道) | (野イチゴ) | (谷間) |
| [○]○。 | [○○]○。 | [○○]○○。 |

(73) a. 前部要素が mɛ.hwa (ウメ)である場合

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| i. mɛ.hwa-k'ot (ウメの花) | ii. mɛ.hwa-na.mu (ウメの木) |
| [○○]○。 | [○○]○○。 |

b. 前部要素が $j\Lambda m.so$ (山羊)である場合

- i. $j\Lambda m.so-tʃu.in$ (山羊の飼い主) ii. $j\Lambda m.so-tʃa.ri$ (山羊座)
[○○]○○。 [○○]○○。

一方、アクセント単位が2つに分かれる複合名詞も見られる。3.3.4節で既に述べた通り、アクセント単位が分かれた場合、後部要素は最後のアクセント単位に置かれているため、言い切り形で現れる。それに対し、前部要素は最後のアクセント単位に接続されている環境にあるため、接続形で現れる。以下に語例を示す。

- (74) a. $tw:it-m\Lambda.ri$ (後ろ髪) [○:]|○[○]].
b. $ko:m-par.pa.tak$ (熊の足の裏) [○:]|○[○]○。
c. $mo.ri-k^ha.rak$ (髪の毛) [○○]| [○○]].
d. $ka.tʃ\Lambda\eta-pi.san.jak$ (家庭常備薬) [○○]| [○○]○。

3.3.6. 用言の音調的特徴

名詞の場合と同様、パターン①、パターン②、パターン③の3種類の音調型が現れる。それぞれの音調型は語幹の第1音節における母音の長短と子音の種類が関わる。

語幹の第1音節の母音が長母音である場合、パターン①で現れる。以下に例を示す。例は $-ta$ (辞書形) と $-a.s\Lambda/\Lambda.s\Lambda$ (原因、理由の-て) が付いた活用形の音調型をそれぞれ示す。尚、用言は活用の仕方によっては語幹と活用語尾が融合する場合があります、音節の境界と一致しない場合がある。ここでは音節の境界と、語幹と活用語尾の境界を優先するため、形態素の境界は語幹と活用語尾の境界のみを示すことにする。

- (75) a. $tʃa:k-ta$ (小さ-い) $tʃa:k-a.s\Lambda$ (小さ-くて)
[○:]◎。 [○:]◎◎。
b. $je:p'u-ta$ (きれい-だ) $je:p'\Lambda-s\Lambda$ (きれい-で)
[○:]○○。 [○:]○○。
c. $tʃ^h:on.su.r\Lambda p-ta$ (田舎臭-い) $tʃ^h:on.su.r\Lambda-w\Lambda.s\Lambda$ (田舎臭-くて)
[○:]○○◎。 [○:]○○◎◎。

それに対し、語幹の第1音節が短母音である場合は子音の種類によって現れる音調型に相違が見られる。語幹の第1音節の子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音であれば、パターン①とパターン②の2種類の音調型が現れる。以下に例を示す。

- (76) a. **sir-ta** (嫌い-だ) **sir-Λ.sΛ** (嫌い-で)
 [○]◎。 [○○]◎。
- b. **ɣʰup-ta** (寒-い) **ɣʰu-wΛ.sΛ** (寒-くて)
 [○]◎～[○○]。 [○○]◎。
- c. **t'ok.kat-ta** (同じ-だ) **t'ok.kat-a.sΛ** (同じ-で)
 [○○]◎。 [○○]◎◎。
- d. **si.k'u.rΛp-ta** (うるさ-い) **si.k'u.rΛ-wo.sΛ** (うるさ-くて)
 [○○]○○。 [○○]○○◎。

但し、用言の場合も、複合名詞の場合と同様、3音節以上ではパターン①が観察されなかった。一方、語幹の第1音節の子音が氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音で始まる場合と母音で始まる場合はパターン①、パターン②、パターン③の3種類の音調型が現れる。但し、名詞の場合は2音節でもパターン③が観察されるが、用言では観察されなかった。以下に例を示す。

- (77) a. **ɣɔp-ta** (狭い) **ɣɔp-a.sΛ** (狭くて)
 [○○]。 [○○]◎～○[○]◎。
- b. **nut-ta** (遅い) **nut-Λ.sΛ** (遅くて)
 [○○]～[○]◎。 [○○]◎。
- c. **ta.ru-ta** (違う) **tar-ra.sΛ** (違って)
 [○○]◎～○[○]◎。 [○○]◎。
- d. **Λ.rjΛp-ta** (難しい) **Λ.rjΛ-wo.sΛ** (難しくて)
 [○○]◎。 [○○]◎◎～○[○]◎◎。
- e. **mi.k'u.rΛp-ta** (滑りやすい) **mi.k'u.rΛ-wo.sΛ** (滑りやすくて)
 [○○]○○。 [○○]○○◎。

3.3.7. まとめ

当該方言には言い切り形と接続形の相違が見られる。言い切り形には1音節目のみ高い音調型(パターン①)、1音節目と2音節目が高い音調型(パターン②)、2音節目のみ高い

音調型(パターン③)の3種類の音調型が現れる。これらの音調型は全て下降が見られる点において共通している。一方、3種類の音調型が現れる環境は語頭の分節音と密接に関わる。長母音である場合は必ずパターン①で現れるため、長母音によってAパターンの実現の有無が決まるといえる。一方、短母音の場合は全ての音調型が分節音によって決定されるわけではない。2音節のパターン①とパターン②は分節音の影響を受けない音調型である。2音節で現れるパターン①は分節音を問わず現れる上、言い切り形の特徴によるものであり、パターン②は分節音を問わず現れるものである。そのため、これらの音調型は除外する必要がある。そうすると、パターン①とパターン③が残される。これらの音調型が現れる環境を見れば、パターン①は氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音が語頭子音である場合に限って現れ、パターン③は語頭子音が氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音で始まる場合と母音で始まる場合に限って現れる。

当該方言に見られる3種類の音調型は分節音によって予測できる場合が多く、それ以外の場合は分節音と問わず全て現れるため、お互いに対立を成していないと捉えられる。よって、当該方言を一型アクセントと解釈できる。

言い切り形と接続形の相違については、言い切り形では3種類の音調型に必ず下降が見られるが、接続形になると、下降が現れなくなり、1音節目あるいは2音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。そのため、下降の有無によって言い切り形と接続形の相違は生じるといえる。

複合名詞と用言の音調的特徴も単純名詞と同様であると言える。複合名詞の場合、前部要素の語頭音節の母音の長短と子音の種類によって複合名詞全体の音調型が決まる。尚、場合によっては2つのアクセント単位からなる場合もある。その場合、前部要素は接続形で現れ、後部要素は言い切り形で現れる。用言の場合は語幹の第1音節における母音の長短と子音の種類が全体の音調型の決定に関わる。

3.4. コソン方言

韓国の北東部に位置しているカンウォン道方言の下位方言の一つであるコソン方言の音調的特徴について記述・分析する。その上で、崔鉉鎮(2013a)によって三型アクセントと解釈されているカンヌン(江陵)方言と比較考察を行う。カンヌン方言はカンウォン道方言のなかでもアクセント型の対立を有する方言であり、コソン方言と最も近接している方言である。

3.4.1. 先行研究

コソン方言の音調的特徴に関する先行研究にはキム・チャギョン(1975、1980)と孫在賢(2007a)がある。

キム・チャギョン(1975、1980)は当時(1970年代)20代の男性を対象に調査を行っている。文節を単独形で発音する場合は一定した音調型が捉えにくかったため、本を読み上げてもらった形式で調査を行ったという。その結果、母音の長短は弁別的ではなく、語頭子音の種類と語頭音節の音節構造によって音調型が予測できると述べている。キム・チャギョン(1975)⁴⁶を中心に見ていくと、語頭子音に氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音が立つ場合と母音で始まる場合はLH(…)パターンで発音される(例(78)a)。一方、語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合は音節構造によって現れる音調型に若干相違が見られる。閉音節である場合は語頭音節に強勢(/)が置かれ、全ての音節が高く発音されるが、場合によっては2音節目が少し低く発音される場合があるため、HH(…)パターンまたはHL(H…)パターンで発音される(例(78)c)。それに対し、軽音節であれば、強勢が置かれず、全ての音節が高いHH(…)パターンで発音される(例(78)b)。

(78) a. morear (砂) LHH	kaʃʌŋkjojuk (家庭教育) LHHH	ŋiŋŋ'a (本当に) LH	toŋ.tɛ.mun (東大門) LHH
b. hopakk'ot (かぼちゃの花) HHH	k'wɛk'ori (コウライウグイス) HHH	kʰok'iri (象) HHH	

⁴⁶ 原文では、当該方言を H(高い音調)と M(中くらいの音調)を設け分析しているが、M を L(低い音調)に捉えても問題はないと考えられ、本稿では L(低い音調)に書き換えた。
子音の分類と音節構造の分類においては独自の用語を用いている。子音の分類においては軟子音と硬子音という用語を用いて分類を行っている。軟子音には氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音とゼロ子音(母音始まりの場合)が属し、硬子音には無声無気音、氣息の強い無声有気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音が属する。音節構造の分類においては強音節と弱音節という用語を用いているが、強音節と弱音節はそれぞれ重音節と軽音節を指す。本稿では用語の一貫性のため、これらの用語は用いない。

c. ʃʰaŋsanpjaŋkok
(青山別曲⁴⁷⁾)
HHHH~HLHH

hak.sɛŋ.tur
(学生たち)
HHH~HLH

ʃʰap.s'ar
(もち米)
HH~HL

孫在賢(2007a)はアクセントの体系化という面から分析しており、当該方言を一型アクセントと捉えている。また、言い切り形と接続形の相違が見られると分析している。言い切り形における音節ごとの音調型を見ていくと、1音節では下降調、2音節では1音節目は低く2音節目は下降調で現れる。3音節から5音節までは語頭子音の種類を問わず、1音節目あるいは2音節目から次末音節まで高く続き、最後の音節は低く現れる。母音の長短は見られない。一方、接続形は最後の音節まで高く続く音調型で現れる。そのため、当該方言の言い切り形と接続形の相違は下降の有無にあると解釈している。但し、具体例は示されていない。

以上、先行研究を取り上げてきたが、キム・チャギョン(1975、1980)と孫在賢(2007a)、そして筆者の記述は以下の3つの点から比較できる。

まず、現れる音調型に関する記述である。キム・チャギョン(1975、1980)はHL(H…)パターンを除けば、語頭子音の種類によって語頭音節の高さは異なるものの、共通して最後の音節まで高く続く音調型で現れるという。それに対し、孫在賢(2007a)は言い切り形の場合、2音節以下の場合を除くと、共通して次末音節まで高く続く音調型で現れるという。しかし、筆者の調査では、キム・チャギョン(1975、1980)と孫在賢(2007a)とでそれぞれ記述された音調型が全て観察された。

次に、語頭子音の種類と音調型の関係に対する見解である。キム・チャギョン(1975、1980)は語頭に氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音が立つ場合と母音で始まる場合は全てLH(…)Hパターンで現れ、語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合は音節構造に関わり、閉音節であればHH(…)パターンあるいはHL(H…)パターンで現れ、軽音節であればHH(…)パターンで現れると述べている。そのため、当該方言を語頭子音の種類と音節構造によって現れる音調型が全て予測可能な方言と捉えている。それに対し、孫在賢(2007a)は語頭子音の種類が音調型の決定に影響しないと記述している。筆者も基本的に孫在賢(2007a)と同じ見解である⁴⁸。尚、孫在賢(2007a)

⁴⁷ 韓国高麗時代に作られた歌謡である。

⁴⁸ 語頭子音が氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音で始まる場合でも以下の例(1)のように語頭音節が高く現れる場合も数多く観察される。一方、語頭子音が氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合でも例(2)のように語頭音節が低く現れる場合が数多く観察される。

(1) a. pok.s'aŋ (桃)
[○○]].

b. ko.tu.rum (氷柱)
[○○○]].

c. naŋ.ku-ku.rur (木陰)
[○○○○]].

(2) a. si.kum.ʃʰi (ほうれん草)
○[○○]].

b. hiŋ.kʰoŋ (白い豆)
○[○]].

c. ʃʰaŋ.pʰo.tu (青葡萄)
[○○○]]~○[○○]].

では長母音は見られないと述べているが、筆者の調査では長母音が見られた。語頭音節が長母音である場合は必ず高くかつ長く発音される。そのため、音調型の決定に関与すると捉えられる。音節構造は音調型の決定に関与しない。

最後に、コソン方言のアクセント体系に対する捉え方である。孫在賢(2007a)は一型アクセントと無アクセントを異なる概念と捉える立場から同じ長さのアクセント単位に1種類のアクセント型しか持たないと捉え、当該方言を狭義の一型アクセントと解釈している。孫在賢(2007a)と一型アクセントに対する捉え方は異なるものの、筆者も当該方言を一型アクセントと解釈している。その根拠としては、同じ単語にも複数の音調型が現れる場合が多く、仮に単独形で1種類の音調型が現れても助詞が付いた場合とで一貫した音調型が現れない場合が多い点と同じ単語にも関わらず現れる音調型に個人差が見られる場合が多い点があげられる。一方、孫在賢(2007a)と筆者とは異なる分析方法を取っているが、キム・チャギョン(1975, 1980)では声調論から語頭子音の種類と音節構造から全ての音調型が予測可能である方言を非声調方言と捉え、その例の一つとしてコソン方言をあげている。

その他に、言い切り形の場合と言い続ける場合とで見られる音調的特徴の相違に対する解釈について孫在賢(2007a)と筆者とでさらに比較できる。孫在賢(2007a)は当該方言には言い切り形と接続形の相違が見られると記述している。筆者の調査においても当該方言に言い切り形と接続形の相違が認められた。

3.4.2. 調査期間及びインフォーマント情報

調査期間に関しては、インフォーマント①の場合は、2014年5月、2015年9月、2016年5月に調査を行い、インフォーマント②の場合は2016年5月に調査を行った。インフォーマント情報は以下の通りである。

インフォーマント①：ナム・ドンファン氏、1956年生まれ、男性。

インフォーマント②：ハム・チュンジャ氏、1945年生まれ、女性。

3.4.3. 言い切り形における音調的特徴

当該方言には言い切り形と接続形の相違が認められる。そのため、両者を分けて記述を行う必要がある。

当該方言の言い切り形において大きな特徴は全ての音調型に下降が見られる点である。一方、この方言は語頭音節の母音の長短によって音調的特徴に相違が見られる。

語頭音節が短母音である場合を見ていくと、1音節名詞の場合、単独形は全て下降調で現れる。しかし、-(i).jo(-です)が付いて単位の長さが2音節になれば、HLパターン、HF

孫在賢(2007a)は言い切り形の2音節以外の場合における語頭音節の高さは不定であると述べている。しかし、筆者の調査では言い切り形の2音節名詞でも語頭音節の高さは決まっていなかったため、当該方言は分節音と関係なく、全ての場合において語頭音節の音調が決まっていけないといえる。

パターン、LF パターンが現れる。下降の位置から捉える場合、最後の音節に音節内下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型の2種類に分類できる。語頭音節の高さは決まっていないため、同じ単語でも高くも低くも現れる。以下に例を示す。但し、例の示し方に関しては、写真と絵を見せて発音してもらう形式で主に調査を行ったため、助詞が付いた言い切り形の音調型は殆ど収集できなかった。その代わりに、言い切り形で現れることが予想される・(i).jo(-です)と・(i).re.jo (-といいます)⁴⁹を付けた場合の音調型を示す。

(79) a. pe (お腹、船、梨) [○]]。	pe·jo (お腹、船、梨-です) ○[○]]~[○◎]]。	pe·re.jo (お腹、船、梨-といいます) ○[○◎]◎~[○◎]◎。
b. so (牛) [○]]。	so·jo (牛-です) [○]◎。	so·re.jo (牛-といいます) [○○]◎~○[○]◎。

尚、・(i).re.jo(-といいます)が後接すると、次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型しか現れない。この現象は後述する2~4音節名詞でも同様である。そのため、現段階では・(i).re.jo(-といいます)によって特定の音調型が実現されると解釈している。

2音節名詞の場合、単独形ではLFパターン、HFパターン、HLパターンの3種類の音調型が現れる。下降の位置からすると、最後の音節に音節内下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型に分けられる。・(i).jo(-です)が付いても単位の長さが増えるだけであり、それ以外は単独形と同様な特徴が見られる。語頭音節の高さは決まっていないため、高くも低くも現れる。尚、・(i).re.jo (-といいます)が付くと次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型しか現れない。

(80) a. kam.ʃe (ジャガイモ) [○○]]~○[○]]。	kam.ʃe·jo (ジャガイモ-です) [○○◎]]。	kam.ʃe·re.jo (ジャガイモ-といいます) ○[○◎]◎。
b. tu.pu (豆腐) [○○]]。	tu.pu·jo (豆腐-です) ○[○]◎。	tu.pu·re.jo (豆腐-といいます) ○[○◎]◎。

⁴⁹ ・(i).re.ju の形で発音される場合もある。

c. k'ɔŋ.ɸʰi (秋刀魚) [○]○～[○○]].	k'ɔŋ.ɸʰi-jo (秋刀魚-です) [○○]◎。	k'ɔŋ.ɸʰi-rɛ.jo (秋刀魚-といいます) [○○◎]◎。
d. s'i.kat (種) [○]○～[○○]].	s'i.kat-i.jo (種-です) [○○◎◎]]～ ○[○○]◎。	s'i.kat-i.rɛ.jo (種-といいます) [○○◎◎]◎。

3 音節名詞の場合、単独形では LHF パターン、HHF パターン、LHL パターン、HHL パターンの 4 種類の音調型が現れる。下降の位置から分析すれば、最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型に分類できる。-i.jo(-です)が後接しても同様である。しかし、これらの音調型に-(i).rɛ.jo(-です)が後続すると、最後の音節に下降が生じる音調型は現れず、全て次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型しか現れない。語頭音節の高さは固定されていないため、高くも低くも現れる。

(81) a. ta.si.ma (昆布) ○[○○]]～ ○[○]○。	ta.si.ma-jo (昆布-です) [○○○◎]].	ta.si.ma-rɛ.jo (昆布-といいます) [○○○◎]◎。
b. ko.ku.ma (薩摩芋) ○[○○]].	ko.ku.ma-jo (薩摩芋-です) ○[○○◎]].	ko.ku.ma-rɛ.jo (薩摩芋-といいます) ○[○○◎]◎。
c. kʰɔŋ.na.mur (豆もやし) [○○○]].	kʰɔŋ.na.mur-i.jo (豆もやし-です) [○○○◎]◎。	kʰɔŋ.na.mur-i.rɛ.jo (豆もやし-といいます) [○○○◎◎]◎。
d. pʌr.kʌ.ɸi (虫) [○○]○～ ○[○]○。	pʌr.kʌ.ɸi-jo (虫-です) [○○○◎]].	pʌr.kʌ.ɸi-rɛ.jo (虫-といいます) ○[○○◎]◎。

4 音節名詞の場合、単独形では LHHL パターン、HHHL パターン、LHHF パターン、HHHF パターンの 4 種類の音調型が現れる。単位の長さが増えた点以外は 3 音節名詞と同

様、最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型に分けられる。この特徴は-i.jo(-です)が付いても変わらない。語頭音節の高さは決まっていなため、高くも低くも現れる。尚、-(i).rɛ.jo (-です)が付いた場合は1～3音節名詞と同様、次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型しか現れない。

(82) a. mi.k'u.rak.ʔi (ドジョウ) ○[○○○]].	mi.k'u.rak.ʔi-jō (ドジョウです) ○[○○○◎]]～ ○[○○○]◎。	mi.k'u.rak.ʔi-rɛ.jō (ドジョウ-といいます) ○[○○○◎]◎。
b. hɛ.ʔa.o.ri (向日葵) [○○○○]].	hɛ.ʔa.o.ri-jō (向日葵-です) ○[○○○◎]]～ ○[○○○]◎。	hɛ.ʔa.o.ri-rɛ.jō (向日葵-といいます) [○○○○◎]◎。
c. t'ɔŋ.ku.ra.mi (丸) [○○○○]]～ [○○○]○。	t'ɔŋ.ku.ra.mi-jō (丸-です) [○○○○◎]]～ [○○○○]◎。	t'ɔŋ.ku.ra.mi-rɛ.jō (丸-といいます) [○○○○◎]◎。
d. paŋ.a.k'ɛ.pi (バター) [○○○]○～ ○[○○]○。	paŋ.a.k'ɛ.pi-jō (バター-です) ○[○○○◎]]～ ○[○○○]◎。	paŋ.a.k'ɛ.pi-rɛ.jō (バター-といいます) ○[○○○◎]◎。

一方、語頭音節の母音が長母音で現れる場合を見ていくと、この場合、次末音節と最後の音節における音調的様相、つまり下降の位置における特徴は短母音と同様である。長母音の場合も最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型が現れる。しかし、語頭音節の高さに関しては相違が見られる。短母音の場合は語頭音節の高さが決まっていないのに対し、長母音は必ず高くかつ長く現れる。語頭音節が低く始まる音調型は現れない。尚、長母音は脱落して短母音で現れる場合がある。その場合は短母音と同様、語頭音節は高くも低くも現れる。

(83) a. pi:r (星) [○:]].	pir-i.rɛ.jō (星-といいます) [○○◎]◎。
----------------------------	----------------------------------

- | | |
|-----------------------|----------------------------------|
| b. pe:ŋha (白菜) | pe:ŋha-re.jo (白菜-といいます) |
| [○:○]]~[○:]○。 | [○:○○]]○。 |
| c. mɛ:mi-ŋhɛ (捕虫網) | mɛ.mi-ŋhɛ-re.jo (捕虫網-といいます) |
| [○:○○]]~ | ○[○○○]]○。 |
| [○:○]○。 | |
| d. nu:n-sa.ram (雪だるま) | nu:n-sa.ram-i.re.jo (雪だるま-といいます) |
| [○:○]○。 | [○:○○○○]]○。 |
| e. ŋi:pi-se.k'i (燕の子) | ŋi:pi-se.k'i-re.jo (燕の子-といいます) |
| [○:○○○○]]~ | [○:○○○○○○]]○。 |
| [○:○○]○。 | |

以上、1音節名詞から4音節名詞を対象に言い切り形における音調的特徴について記述を行った。すでに述べた通り、当該方言の言い切り形において最も大きな特徴は全ての音調型に下降が見られる点である。

当該方言は語頭音節の母音の長短によって音調的特徴に相違が見られる。短母音の場合は1音節では下降調で現れ、2音節ではLFパターン、HFパターン、HLパターンの3種類の音調型が現れる。3音節以上ではLH(…H)Fパターン、HH(…H)Fパターン、LH(…H)Lパターン、HH(…H)Lパターンの4種類の音調型が現れる。これらの音調型を次末音節と最後の音節における下降の位置から捉えた場合、単位の長さを問わず、最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型に分類できる。語頭音節の高さは決まっていない。一方、長母音の場合は、最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型が見られる点は同じである。しかし、語頭音節の高さについては相違が見られ、長母音の場合は必ず高くかつ長く発音される。そのため、語頭音節が低く始まる音調型は現れない。

当該方言は次末音節と最後の音節における下降の位置と語頭音節の高さから分析できる。次末音節と最後の音節における下降の位置に関しては、コソソ方言の音調型を特徴づける要素として下降の位置から最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降する音調型に分類できる。この2種類の音調型はどのような音声的要素からも現れる環境が予測不可能である。そのため、一見お互いに対立を持つ関係にあると捉えられがちである。しかし、同じ単語において両者が全て現れる場合が多い上に、仮に単語単独形において1種類の音調型が現れても-(i).jo(-です)が付いた場合と音調型が一貫しない場

合が多い。また、同じ単語にも関わらず、現れる音調型に個人差が見られる場合も多い⁵⁰。そのため、お互いに対立を成していないと解釈できる。

語頭音節の高さに関しては、長母音は高くかつ長く現れ、短母音の場合は高くも低くも現れるため、語頭音節の高さは弁別的な特徴ではないと解釈できる。

従って、当該方言を一型アクセントと解釈できる。音調型は以下の表 17 のようにまとめられる。

表 17 コソン方言における言い切り形の音調型

音節の位置 語頭の分節音	語頭音節	次末音節と最後の音節における下降の位置
長母音	[○:]	…○]]～
短母音	○ ⁵¹	…]○

3.4.4. 言い切り形と接続形の相違

言い切り形として現れる全ての音調型は必ず下降が見られるため、言い切り形の特徴は必ず下降が生じる点である。当該方言は次末音節と最後の音節における下降の位置によって全体の音調型が特徴づけられる。そして、最後の音節が下降調で現れる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型の 2 種類の音調型が分類できる。

しかし、接続形では言い切り形の特徴である下降が現れないため、下降の位置によって分けられる 2 種類の音調型は現れない。全て 1 音節目あるいは 2 音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。語頭音節の高さに関しては、接続形では長母音は観察されなかったため、母音の長短による語頭音節の高さの相違は見られず、高くも低くも現れる。以下の例 (84) は複数の文節からなる場合である。最後のアクセント単位以外のアクセント単位は全て高く続く音調型で現れることが分かる。この点から当該方言における言い切り形と接続形は下降の有無によって生じるといえる。

- (84) a. san-i | nop-a.ju (山-が | 高-いです)
○[◎] | ○[◎]◎。

⁵⁰ 以下に例を示す。

- a. i.pap (ご飯)
b. k'on.ɸi (さんま)
c. set.p'a.tak (舌)
d. ɸ'an.ɸi (キムチ)
f. sa.sum.pɔr.rɛ (クワガタムシ)
g. pan.tit.p'u.ri (蛍)

インフォーマント①	インフォーマント②
[○○]].	[○]○。
[○]○。	[○○]].
[○○○]].	[○○]○。
[○○○]].	[○○]○。
[○○○]○。	[○○○○]].
○[○○]○。	○[○○○]].

⁵¹ 短母音の場合は分節音を問わず、高い音調でも低い音調でも現れるため、表記を施さない。

- b. mΛ.ri-ka | ʃar-pa (髪-が | 短-い)
○[○○] | ○[◎]].
- c. san.twε.ʃi.tur-i | tΛp-ʃhε (猪-が | 襲い掛か-る)
[○○○○◎] | [◎◎]].
- d. hε.ʃa.o.ri-ka | ʃar | phit-sΛ (向日葵-が | きれいに | 咲い-たよ。)
[○○○○◎] | [○] | [◎◎]].
- e. nun.sa.ram | man.tur-ko | nor-at.ji.ju (雪だるま | 作っ-て | 遊ん-でいました)
○[○○] | [○○◎] | [◎◎◎]◎。

3.4.5. カンヌン方言との比較考察

カンヌン方言は、崔鉉鎮(2013a)によって3つのアクセント型が対立を成す三型アクセントと解釈されている方言である。言語地理学的な観点からすれば、コソン方言と同じカンウォン道方言に属しており、高低アクセントが弁別的な方言のなかで、コソン方言と最も近接している方言である。その両者にアクセントの面においてどのような共通点と相違点が見られるか、以下で比較考察する。

3.4.5.1. カンヌン方言のアクセント体系

カンヌン方言は以下の3種類のアクセント型が対立を成す三型アクセントである。便宜上、A型、B型、C型と呼ぶ。

表 18 崔鉉鎮(2013a)によるカンヌン方言のアクセント体系

	1	2	3	4
A 型	[○(◎)]	[○○]	[○○]○	[○○]○○
B 型	[○](◎)	[○]○	[○]○○	[○]○○○
C 型	○[(◎)]	○[○]	○[○]○	○[○○]○

以下に3種類のアクセント型に属する語例を示す。

(85) カンヌン方言における3種類のアクセント型に属する語例

	1	2	3	4
A 型	pɛ (お腹)	mu.u (大根)	ʃaŋ.ʃak.pur (薪の火)	t'ak.ta.ku.ri (キツツキ)
	pi:r (星)	no:.se (ラバ)	ʃi:.reŋ.i (ミミズ)	ʃu:r.t'ɛŋ.ki.ki (綱引き)
B 型	pɛ (梨)	kə.mu (蜘蛛)	po.rim.tar (満月)	ta.sət.ma.ri (五匹)
C 型	ʃwi (鼠)	ʃaŋ.kʰl (雄の雉)	k'a.thu.ri (雌の雉)	hɛ.ʃa.o.ri (向日葵)

まず、A型は文節の1・2音節目が高く続き、3音節目から低くなるというアクセント特徴を持つ。1音節名詞の単独形の場合は、アクセント単位が短いため、本来のアクセント特徴が現れない。しかし、1音節以上の助詞が付くと本来のアクセント特徴が現れる。A型には、語頭音節が上昇調で現れるものもある。しかし、当該方言で現れる上昇調は音韻論的に有意義ではないものと解釈する。その理由は2つある。まず、上昇調が高平調で現れる場合があるという点である。仮に上昇調が音韻論的に有意義な特徴であるとすれば、高平調で現れることなく常に上昇調が保たれるはずであるが、実際はそれに反し、上昇調の代わりに高平調で現れる場合がある。もう一つは本来上昇調を持たない語彙であるにも関わらず、上昇調で現れる場合がある点である。B型・C型の1音節名詞の単独形は基本的に下降調として現れるが、上昇調で現れる場合もある。以上の理由から当該方言に現れる上昇調は長母音によって付随的に生じる音声的特徴と捉える。一方で、母音の長短はアクセントとは別の要素であるため、独立したアクセント型として立てない。次に、B型は1音節目のみ高いというアクセント特徴を持つ。A型と同様、1音節名詞の単独形ではアクセント単位の短さゆえに本来のアクセント特徴が現れないが、助詞が付くと本来のアクセント特徴が現れる。最後に、C型は文節の2音節目から次末音節まで高く続くというアクセント特徴を持つ。C型は文節全体の音節数が長くなるにつれ低くなる音節の位置が後ろにずれていくため、文節頭部からはアクセント特徴が捉えにくい。しかし、文節末部から見れば、常に次末音節から最後の音節にかけて低くなることが分かる。A型とB型が文節頭部にアクセント特徴を持つのに対し、C型は文節末部にアクセント特徴を持つと言える。C型も他の型と同様、1音節名詞の単独形の場合は他の型と区別されないが、助詞が付くと他の型と区別される。但し、文節全体が2音節である場合は、C型のアクセント特徴に反し、最後の音節のみ高いアクセント型で現れる。これはB型との対立を保つためであると考えられる。

しかし、文節全体が3音節以上になると、本来のアクセント特徴で現れる。

3.4.5.2. 比較考察

カンヌン方言とコソン方言を対象に 1) 音調型の数とアクセント型の数、2) 分節音と音調型の関係、3) カンヌン方言の C 型とコソン方言の音調型の比較という 3 つの観点から考察を試みる。

まず、音調型の数とアクセント型の数という観点から考察を行えば、カンヌン方言では、音声的に 1 音節目と 2 音節目が高い音調型、1 音節目のみが高い音調型、文節単位で 2 音節目から次末音節まで高く 1 音節目と最後の音節は低い音調型の 3 種類の音調型が現れる。以下に音調型を示す。

(86) カンヌン方言に見られる音調型の数

- a. 1 音節目と 2 音節目が高く現れ、3 音節目以降は低く現れる。([○○]○…)
- b. 1 音節目は高く現れ、2 音節目以降は低く現れる。([○]○○…)
- c. 2 音節目から次末音節まで高く現れ、1 音節目と最後の音節は低く現れる。2 音節の場合、1 音節目は低く現れ、2 音節目は高く現れる。(○[…○]○)

上記の 3 種類の音調型がお互いに対立を成しているか否かを例 (85) の 1 音節名詞を代表例で挙げて述べると、pɛ(お腹)と pɛ(梨)の場合、同音異義語であるが、pɛ(お腹)は (86)a の音調型で現れ、pɛ(梨)は (86)b の音調型で現れる。専ら音の高低によってそれぞれの意味が弁別されるのであるため、(86)a の音調型と (86)b の音調型はお互いに対立を成していると解釈できる。一方、ɟwi(鼠)の場合、同音異義語はないものの、どのような音声的条件からも (86)c の音調型の出現条件が予測できないため、他の音調型と対立を成しているといえる。よって、カンヌン方言に見られる 3 種類の音調型は単語ごとに決まっている特徴であると解釈でき、3 種類の音調型は、それぞれ別のアクセント型を形成していると認められる。それに対し、コソン方言に現れる音調型は次末音節と最後の音節における下降の位置によって全体の音調型が特徴づけられる。そのため、最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型の 2 つの音調型に分類できる。この 2 つの音調型はそれぞれ語頭音節の高さによってさらに語頭音節が高く現れる場合と低く現れる場合に分かれる。そのため、コソン方言には以下の 4 種類の音調型が現れるといえる。

(87) コソン方言に見られる音調型の数

- a. 1 音節目から高く続き、最後の音節で音節内下降が生じる。([○…○○]).)
- b. 2 音節目から高く続き、最後の音節で音節内下降が生じる。(○[…○○]).)
- c. 1 音節目から次末音節まで高く続き、最後の音節は低く現れる。([○…○]○。)
- d. 2 音節目から次末音節まで高く続き、最後の音節は低く現れる。(○[…○]○。)

上記の4種類の音調型がお互いに対立を成しているか否かについて見ると、最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型は分節音を問わず、同じ単語において、両者が全て現れる場合が多い上に現れる音調型に相違が見られる場合も多い。そのため、上記の音調型はお互いに対立を成さないと解釈できる。語頭音節の高さについては長母音の場合は高くかつ長く発音されるため、語頭音節の高さが予測できる。一方、短母音の場合は同じ単語に対し、低くも高くも現れるため、弁別的な要素であると認めがたい。よって、コソン方言に見られる4種類の音調型はお互いに対立を成していないといえる。

次に、分節音と音調型の関係から両方言を分析してみると、カンヌン方言の場合は語頭音節が長母音である場合はA型が実現される⁵²。長母音が特定のアクセント型の実現に関与するといえる。

(88) 語頭音節が長母音である場合の音調型及び語例

2 音節	3 音節	4 音節
[○:○]	[○:○]○	[○:○]○○
no:.se	ŋi:.reŋ.i	ŋu:r.t'ɛŋ.ki.ki
(ラバ)	(ミミズ)	(綱引き)

長母音以外の分節音、つまり語頭子音の種類に関してはそれぞれの単語が3種類のアクセント型のどれに属するかは単語固有の特徴であるため、語頭子音の種類からは特定のアクセント型の出現は予測できない。コソン方言の場合も長母音が音調型の決定に関与する。但し、次末音節と最後の音節における下降の位置の決定には関与せず、語頭音節の高さのみ関与する。長母音の場合、必ず高くかつ長く現れるため、語頭音節が低く始まる音調型は現れない。

最後に、カンヌン方言のC型とコソン方言の音調型を見る。尚、一型アクセントと捉えているコソン方言に見られる音調型とアクセント型の対立を持つカンヌン方言のC型を対等な条件から比較するには様々な問題があるため、主に音調的下降に焦点を当てて比較を行う。カンヌン方言のC型はA型とB型とは違い、文節を単位にアクセント特徴が被さっているため、助詞や活用語尾が名詞に後続すると下降の位置がずれていく。そのため、前から捉えると下降の位置が一定しないが、後ろから数えれば常に次末音節と最後の音節の間に下降が生じるという一定した特徴が捉えられる。

(89) カンヌン方言のC型

a. k'a.t ^h u.ri (雌の雉)	k'a.t ^h u.ri-ko (雌の雉-であり)
○[○]○	○[○○]◎

⁵² 但し、2音節の場合は1音節目のみ高くかつ長く現れ、2音節目は低く現れる場合がある。

- b. hɛ.ʃa.o.ri (向日葵) hɛ.ʃa.o.ri-ja (向日葵-だよ)
 ○[○○]○。 ○[○○○]◎

コソン方言は最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型が現れ、そのうち、後者がカンヌン方言の C 型と類似した音調的特徴を有する。以下の例(90)を見ると、前から捉えた場合、単語単独形と-(i).rɛ.jo(-とといいます)が付いた場合とで下降の位置が一定しない。しかし、後ろから捉えれば、次末音節から最後の音節にかけて低くなるという一定した特徴が捉えられる。但し、語頭音節の高さにおいてはカンヌン方言とコソン方言とで相違が見られる。カンヌン方言の C 型は語頭音節が常に低く現れるが、コソン方言の場合は長母音のみ語頭が高くかつ長く実現され、それ以外の分節音は決まっておらず、高く現れる場合もあれば低く現れる場合もある。

(90) コソン方言の音調型

- a. pʌr.kʌ.ʃi (虫) pʌr.kʌ.ʃi-rɛ.jo (虫-です)
 [○○]○～○[○○]○。 ○[○○◎]◎。
- b. paŋ.a.k'ɛ.pi (バッタ) paŋ.a.k'ɛ.pi-rɛ.jo (バッターです)
 [○○○]○～○[○○]○。 [○○○○◎]◎。

3.4.6. まとめ

以上、コソン方言に見られる音調的特徴について記述を行った上で、アクセント型の対立を持つカンヌン方言との比較考察を行った。当該方言は言い切り形と接続形の相違が見られる。言い切り形の特徴は全ての音調型に下降が見られる点である。

当該方言は語頭音節の母音の長短によって現れる音調的特徴が異なる。短母音の場合、1音節では下降調で現れ、2音節では LF パターン、HF パターン、HL パターンの3種類の音調型が現れる。3音節以上では LH(…H)F パターン、HH(…H)F パターン、LH(…H)L パターン、HH(…H)L パターンの4種類の音調型が現れる。これらの音調型を次末音節と最後の音節における下降の位置から捉えると、単位の長さを問わず、最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型に分けられる。語頭音節の高さは決まっていない。

長母音の場合も短母音の場合と同様、最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型が現れる。語頭音節の高さは短母音の場合と違い、決まっている。語頭音節が長母音である場合は必ず高くかつ長く発音されるため、語頭音節が低く始まる音調型は現れない。

当該方言は次末音節と最後の音節における下降の位置と語頭音節の高さから解釈できる。次末音節と最後の音節における下降の位置に関しては、コソン方言の音調型を特徴づける

要素として下降の位置から最後の音節内で下降が生じる音調型と次末音節と最後の音節の間に下降する音調型に分けられる。両者はどのような音声的要素からも現れる環境が予測不可能であるため、一見、対立を成していると思われがちである。しかし、同じ単語において両者が全て現れる場合が多い上に、仮に単語単独形において1種類の音調型が現れても活用語尾が付いた場合の音調型と一致しない場合が多い。さらに同じ単語でありながらも現れる音調型に個人差が見られる場合も多い。そのため、対立は認められない。語頭音節の高さに関しては、長母音は高くかつ長く現れ、短母音の場合は高くも低くも現れるため、語頭音節の高さは非弁別的であると捉えられる。よって、当該方言を一型アクセントと解釈できる。

当該方言における言い切り形と接続形の相違に関しては、言い切り形は下降が現れるのに対し、接続形は下降が現れないため、下降の有無によって言い切り形と接続形の相違が生じるといえる。

コソン方言と同じカンヌン道方言に属し、アクセントの対立が認められる方言のうち、コソン方言と最も近接した三型アクセントのカンヌン方言と以下の3つの点から比較考察を行う。まず、一つ目は音調型の数とアクセント型の数という観点である。カンヌン方言の場合は音声的に3種類の音調型が現れる。これらの音調型は単語ごとに決まっている特徴としてお互いに対立を成しているため、そのまま3種類のアクセント型として認められる。それに対し、コソン方言は音声的に4種類の音調型が現れる。しかし、次末音節と最後の音節における下降の位置によって分かれる2種類の音調型は分節音を問わず、同じ単語に全て現れる場合が多いだけでなく、同じ単語でありながらも現れる音調型に個人差が見られる場合が多い。一方、語頭音節の高さに関しては、長母音は高くかつ長く発音されるため、語頭音節の高さが予測でき、短母音の場合は高さが決まっていないため、弁別的な要素ではない。よって、4種類の音調型はお互いに対立を成していないといえる。次に、二つ目は分節音と音調型の関係という観点である。カンヌン方言では語頭音節が長母音である場合、A型で現れるため、長母音が特定の音調型の出現に関与するといえる。コソン方言も長母音が音調型の決定に関与する。語頭音節が長母音であれば、高くかつ長く発音されるため、語頭音節が低く始まる音調型は現れない。最後に、三つ目はカンヌン方言のC型とコソン方言の音調型の比較という観点である。音調的下降の位置から捉えれば、カンヌン方言のC型は文節を単位としているため、助詞が付いて文節が長くなるにつれ、下降の位置がずれていく。そのため、前から数えると、下降の位置が一定しない。しかし、後ろから数えると次末音節と最後の音節の間に常に下降が生じる。コソン方言にもカンヌン方言のC型と同様、常に次末音節と最後の音節の間に下降が生じる音調型が存在する。但し、語頭音節の高さに関しては、カンヌン方言は分節音を問わず常に低く現れるが、コソン方言は長母音であれば高くかつ長く現れ、それ以外は分節音と関係なく高くも低くも現れるという相違がみられる。

第四章 韓国語一型アクセントの特性

本章では、第三章で取り上げたチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言を対象に比較考察を行う。その上で、4つの方言に見られる特徴を基に、韓国語一型アクセントに現れやすい諸特性について述べる。

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言は全て言い切り形と接続形の相違が見られるため、両者を分けて考察を行う必要がある。まず、4.1節では言い切り形に見られる特徴を中心に考察する。4.1.1節ではチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言に現れる音調型と分節音の関係について考察し、4.1.2節では音調型の数の点から考察を行う。次に、4.2節では接続形に見られる特徴について述べるが、言い切り形の音調的特徴との相違を中心に述べる。最後に、4.3節では4.1節と4.2節をふまえ、4つの方言に見られる特徴をまとめた上で、韓国語一型アクセントに現れやすい諸特性について述べることにする。

4.1. 言い切り形に見られる特徴

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言における言い切り形の音調型は全ての音調型に下降が見られる点である。下降の位置は方言差が見られる。最初の2音節のどちらかに下降が生じる場合と、次末音節と最後の音節のどちらかに下降が生じる場合がある。前者にはチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言が該当し、後者にはコソン方言が該当する。

最初の2音節における音調的様相によって全体の音調型が特徴づけられるチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言の場合、下降の位置と語頭音節の高さの観点から音調型の特徴が捉えられる。下降の位置から捉えた場合、1音節目から2音節目にかけて下降が生じ、2音節以降は低く現れる音調型(以降、Aパターンと呼ぶ)と2音節目から3音節目にかけて下降が生じ、3音節以降低く現れる音調型に分かれる。後者の場合、ナジュ方言とソウル方言は語頭音節の高さによってさらに語頭音節が高く現れる音調型(以降、Bパターンと呼ぶ)と語頭音節が低く現れる音調型(以降、Cパターンと呼ぶ)に分かれる。尚、チョンヤン方言では語頭音節は常に高く現れるためBパターンしか現れない。Aパターン、Bパターン、Cパターンにおける音調的特徴をまとめて以下に示す。尚、AパターンとBパターンには語頭音節の母音が長母音である場合も含まれている。長母音を持つ音節は高くかつ長く発音される。

Aパターン：1音節目のみ高く現れ、2音節目以降は低く現れる。([○]○○…。)

Bパターン：1音節目と2音節目は高く現れ、3音節目以降は低く現れる。2音節の場合

は2音節目において音節内下降が現れる。([○○]○…。)

Cパターン：1音節目と3音節目以降は低く現れ、2音節目は高く現れる。2音節の場合
は2音節目において音節内下降が現れる。(○[○]○…。)

一方、次末音節と最後の音節における音調の様相によって全体の音調型が特徴づけられるコソン方言の場合、最後の音節内で下降が生じる場合(以降、Dパターンと呼ぶ)と次末音節から最後の音節にかけて下降が生じ、最後の音節が低く現れる場合(以降、Eパターンと呼ぶ)に分かれる。DパターンとEパターンはそれぞれ語頭音節の高さによって高い場合(①)と低い場合(②)にさらに分かれる。以下にD①パターンとD②パターン、E①パターンとE②パターンにおける音調的特徴をまとめて示す。

D①パターン：1音節から高く続き、最後の音節が下降調で現れる。([○…○○])。)

D②パターン：2音節から高く続き、最後の音節が下降調で現れる。(○[…○○])。)

E①パターン：1音節目から次末音節まで高く続き、最後の音節は低く現れる。
([○…○]○。)

E②パターン：2音節目から次末音節まで高く続き、最後の音節は低く現れる。2音節では現れない。(○[…○]○。)

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の4つの方言に現れる音調型はその出現において語頭の分節音と関わりを持つ場合がある。同じ分節音でも現れる音調型に方言差は見られるものの、分節音ごとに現れる音調型の様相を分析しまとめてみれば、以下の3つのグループに分類できる。

1) 長母音 (語頭子音の種類は関係なし)

2) 短母音 ① 氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音
② 氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音、母音

便宜上、2)①の子音類を「強子音」と呼び、2)②の子音類と母音を「弱子音・母音」⁵³と呼ぶ。

⁵³ 強子音と弱子音はキム・チャギョン(1980)による用語である。

4.1.1. 分節音と音調型の関係

分節音の観点からチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言に見られる各々の音調型を考察する。

4.1.1.1. 先行研究

韓国語一型アクセントにおいて分節音と音調型が密接に関わることは李連珠(2015、2016)によって既に指摘されている⁵⁴。

李連珠(2015、2016)はソウル方言、ナムウォン(南原)方言、中国朝鮮語撫順方言の2音節名詞には各々表19に示された2つの音調型が現れ、3つの方言に現れる各音調型には対応関係が見られると述べている。しかし、各方言に現れる2つの音調型は語頭の分節音による相補分布を成すため、音韻的なアクセント型の対立を持たない方言と解釈している。尚、表19は筆者が李連珠(2015)を改変したものである。

表19 ソウル、ナムウォン、撫順方言における2音節名詞の音調型の対応(李連珠 2015)

	ソウル方言	ナムウォン方言	撫順方言
音調型の対応	HH/LL-H	LH/LL-H	LH/LL-H
	HL/HL-H 強	HL/HL-L 強	HH/HH-H 強
無標型	[○○/○○[◎]	○[○/○○[◎]	○[○/○○[◎]

「強」は強く扱われる語頭の分節音である。

一方、3つの方言において音調型の異形態をもたらす強く扱われる語頭の分節音について以下の表20のように示している。

表20 ソウル、ナムウォン、撫順方言における音調型と分節音の関係(李連珠 2015)

ソウル方言	ナムウォン方言	撫順方言
無声有気破裂音、 無声声門摩擦音、 無声歯茎摩擦音(例外有)	無声有気破裂音、 無声声門摩擦音	無声有気破裂音、 無声声門摩擦音、 強い母音 ⁵⁵

李連珠(2015、2016)は2つの点から比較することができる。

一つ目は、強く扱われる語頭の分節音の分類である。先行研究で取り上げられている3

⁵⁴ 孫在賢(2005a)、孫在賢(2007a)、李文淑(2007)によって個別方言を対象に分節音と音調型の関係について取り上げられている。しかし、分節音ごとに現れる音調的特徴の相違に関する記述に止まっており、分節音が音調型にどのように関与するかについて分析されていないため、ここでは取り上げない。

⁵⁵ 撫順方言の場合、語頭の母音の種類も音調型の決定に関わるという。語頭の母音が非円唇舌狭母音[i]、非円唇狭母音[u]、非円唇半狭母音[ɤ]である語彙の一部に語頭音節が高く現れる場合があるが、これらの母音はまるで子音があるような強い母音のように感じるとのインフォーマントの内省があり、張唇性及び狭捲性を持つ強い母音と解釈すると述べている。

つの方言を見ると、無声有気破裂音と無声声門摩擦音は3つの方言に共通して強く扱われる語頭の分節音に分類されている。無声歯茎摩擦音はソウル方言に限って例外はあるものの、強く扱われる語頭の分節音に分類されており、強い母音は撫順方言に限って強く扱われる語頭の分節音に分類されている。コソン方言を除き、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言では無声有気破裂音、無声声門摩擦音、無声歯茎摩擦音はその振る舞いから強子音に分類されるものである。尚、無声歯茎摩擦音の場合、筆者の調査では例外は存在しなかった。強い母音に関しては、本論文で扱っている4つの方言のどれにも母音の種類が音調型の決定に関与することは認められない。一方、李連珠(2015、2016)は調査語彙に含めていなかったものの、無声有気破裂音と無声阻害音も音調型の異形態をもたらす強く扱われる分節音と予想している。筆者の調査ではこれらの分節音も強子音に分類されるものである。

以上の内容をまとめると、撫順方言の強い母音以外のものはチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言の3つの方言とも強子音として分類できる。

二つ目は、特定の音調型の実現と分節音の関係である。先行研究では無標の音調型を設定した上で、表20に示された分節音が語頭に立てば特定の音調型が出現すると記述している。先行研究において強く扱われる語頭の分節音は本論文での強子音とほぼ一致している。強子音が特定の音調型の出現に関与する方言はチョンヤン方言とナジュ方言である。尚、チョンヤン方言は単位の長さも関与する。一方、語頭音節が弱子音・母音である場合でもソウル方言とナジュ方言には特定の音調型の出現の有無に関与する。また、先行研究では取り上げられていないが、語頭音節の母音が長母音である場合、ナジュ方言とコソン方言では特定の音調型の出現に関与する。即ち、強く扱われる語頭の分節音のみが特定の音調型を実現させると述べている先行研究とは違い、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の場合、方言によっては強子音以外にも、弱子音・母音、長母音も特定の音調型の出現に関与するのである。

4.1.1.2. チョンヤン、ソウル、ナジュ、コソン方言と分節音

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言は音調型の決定に分節音が関与すると捉えられる。しかし、全ての音調型が分節音の影響を受けるわけではない。4つの方言の2音節では共通して1音節目のみ高い音調型が現れる。チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言の場合ではAパターンに該当し、コソン方言では全体的な音調的特徴からすると異なるものの、2音節に限定してみれば、E①パターンに該当する。2音節で現れる1音節目のみ高い音調型は分節音を問わず全て現れるため、分節音の影響によるものではないといえ、考察対象から除外する必要がある。但し、ナジュ方言の長母音の場合は単位の長さを問わずAパターンのみ現れるため、分節音の影響によるものと解釈し、考察対象から除外しない。

1音節目のみ高い音調型は言い切り形の特徴と密接に関わる。チョンヤン方言、ソウル

方言、ナジュ方言、コソン方言は共通して言い切り形と接続形の相違が見られ、言い切り形は必ず下降を伴う。2音節の場合、下降が生じ得る位置は1音節目と2音節目の間と、2音節目の音節内であるが、音節内下降である後より音節間下降である前者が言い切り形の特徴が最も反映されているといえる。そのため、2音節ではAパターンが現れるのは決まりきった特徴であると解釈できる。

方言ごとに分節音と音調型の関係について見ていくと、チョンヤン方言は単位の長さごとに以下の音調型が現れる。語例と一緒に示す。

(91) チョンヤン方言の音調型及び語例

	2音節	3音節	4音節
長母音	A k'a:ŋhi (カササギ)	B so:ŋ.sa.ri (メダカ)	B ku:n.ko.ku.ma (焼き芋)
弱子音・ 母音	A a.i (子供)	B ta.ram.ŋwi (栗鼠)	B ŋi.phu.ra.ki (藁)
強子音	A sa.kwa (りんご)	B~A k'ak.t'u.ki (カクテキ)	B hΛ.su.a.pi (案山子)

当該方言において分節音と音調型を明らかにするためには、2音節のAパターンとBパターンを除外する必要がある。

2音節において現れるAパターンは、既に述べた通り、言い切り形の特徴によるものである。Bパターンは3音節以上では分節音を問わず全ての場合に現れるため、分節音とは関係なく現れる音調型であるといえる。この2つの音調型を除外すれば、3音節の強子音の場合においてAパターンのみが残される。この音調型は3音節かつ強子音に限って現れるため、強子音という分節音の条件だけではなく、3音節という単位の長さの条件が共に関与すると解釈できる。

ソウル方言の場合、単位の長さごとに以下の音調型が現れる。語例と一緒に示す。

(92) ソウル方言の音調型及び語例

	2 音節	3 音節	4 音節
長母音	A ki:m.ŋʰi (キムチ)	B so:ŋ.sa.ri (メダカ)	B na:n.ŋŋ.i.ta ⁵⁶ (小人-だ)
強子音	A~B sɛ.u (エビ)	B k'a.ma.kwi (カラス)	B hɛ.pa.ra.ki (向日葵)
弱子音・ 母音	A~B~C ka.paŋ (カバン)	B~C ko.tu.rum (つらら)	B~C mi.k'u.ra.ŋi (ドジョウ)

分節音と音調型の関係を捉えるためには、2つの音調型を除外する必要がある。一つは2音節のAパターンである。既に述べた通り、2音節にみられるAパターンは言い切り形の特徴によるものであるため、その実現に分節音が関与すると認めがたい。もう一つはBパターンである。この音調型は長母音の2音節を除くと、分節音を問わず全ての場合において現れる。分節音によってその出現が決定されないと解釈できる。2音節のAパターンとBパターンを除外すれば、Cパターンしか残されないが、特定の分節音によってその出現が決定される。

(93) ソウル方言の短母音における語頭子音の種類と音調型の関係

	2 音節	3 音節	4 音節
弱子音・母音	C	C	C

Cパターンは弱子音・母音である場合に限りて現れることが分かる。このことから弱子音・母音がCパターンの出現の有無に関与すると解釈できる。

ナジュ方言の場合、単位の長さごとに以下の音調型が現れる。語例と一緒に示す。

⁵⁶ 非常に語例が少なく、2音節名詞と3音節名詞では現れたが、4音節名詞では現れなかったため、名詞に活用語尾を付けた場合の音調型を示した。

(94) ナジュ方言の音調型及び語例

	2 音節	3 音節	4 音節
長母音	A ʃeː.pi (燕)	A ʃaːŋ.to.ri (金槌)	A muː.taŋ.paɾ.rɛ (テントウムシ)
強子音	A~B pʰo.ri (蠅)	B~A hɛ.u-ra (海苔-と)	B~A tʰʌt-i.ra.ko (餅-と)
弱子音・ 母音	A~B~C na.mɛ (南海)	B~C na.sa.mot (ネジ)	B~C ʃʌr.ra.to-ka (チョルラ道-が)

当該方言の音調型は母音の長短によって現れる音調型に相違が見られる。語頭音節の母音が長母音である場合は単位の長さを問わず A パターンで現れるため、長母音によって A パターンという特定の音調型が実現されると捉えられる。一方、語頭音節の母音が短母音である場合は A パターン、B パターン、C パターンが全て現れる。しかし、これらの音調型が全て分節音によって出現が決定されるわけではないため、分節音が関与しない音調型を除外する必要がある。ナジュ方言もソウル方言と同様、2 音節の A パターンと B パターンは分節音の影響を受けないものであると捉えられる。2 音節の A パターンは言い切り形の特徴と関わるものである。B パターンは短母音の場合、分節音と関係なく、全ての場合において現れるため、B パターンの出現は分節音の影響を受けないといえる。この2つの音調型を除外すれば、A パターンと C パターンが残され、これらの音調型は語頭子音の種類によって出現が決定される。

(95) ナジュ方言の短母音における語頭子音の種類と音調型の関係

	2 音節	3 音節	4 音節
強子音	—	A	A
弱子音・母音	C	C	C

語頭子音が強子音である場合は A パターンが現れるのに対し、弱子音・母音である場合は C パターンが現れる。これは語頭子音の種類が A パターンと C パターンの出現を決定することを意味する。ナジュ方言は長母音、強子音、弱子音・母音が全て音調型の決定に関与すると解釈できる。長母音は A パターンという特定の音調型の決定に関与する。一方、短母音の場合は A パターンと C パターンがその出現において分節音の影響を受けており、

強子音は A パターンの出現の有無に関与し、弱子音・母音は C パターンの出現の有無に関与するといえる。

(96) ナジュ方言における語頭子音の種類と音調型の関係

	2 音節	3 音節	4 音節
長母音	A	A	A
強子音	—	A	A
弱子音・母音	C	C	C

コソン方言の場合、単位の長さごとに以下の音調型が現れる。語例と一緒に示す。

(97) コソン方言の音調型及び語例

	2 音節	3 音節	4 音節
長母音	D①～E① pe:ŋ ^h a (白菜)	D①～E① mɛ:mi-ŋ ^h ɛ (捕虫網)	D①～E① ŋi:pi.sɛ.k'i (燕の子)
短母音 ⁵⁷	D①～D②～ E①	D①～D②～ E①～E②	D①～D②～ E①～E②

当該方言は長母音のみが音調型の決定に関与するが、次末音節と最後の音節における下降の位置の決定には関与しない。即ち、長母音は D パターンと E パターンの出現の有無に関与しないのである。長母音は語頭音節の高さの決定のみに関与する。語頭音節が長母音である場合は必ず高くかつ長く発音されるため、D①パターンと E①パターンのみ現れる。

(98) コソン方言における長母音と音調型の関係

	2 音節	3 音節	4 音節
長母音	D①～E①	D①～E①	D①～E①

4. 1. 1. 3. アクセントの対立を持つ方言と分節音

韓国語多型アクセントと N 型アクセントを分節音の観点から捉えた場合、分節音がアクセント型の決定に関与することが認められる場合がある。尚、本節では音調型にほぼ近い意味としてアクセント型という用語を用いている。本来、アクセント型とは他の型と弁別される要素のみを抽出し示した抽象的概念であるが、韓国語一型アクセントの音調型と使い分けるため、アクセント型という用語を用いる。

⁵⁷ 同じ単語に 4 つの音調型が全て現れた場合はなかったため、ここでは、語例は示さず、音調型のみを示しておく。

多型アクセントの代表例としてウルサン方言を取り上げて述べると、当該方言は1音節目と2音節目が高く現れる1個のアクセント型と、どこかの1音節のみ高く現れるn個のアクセント型からなる体系である。以下の例(99)はウルサン方言におけるアクセント型と語例を示したものである。例(99)は姜英淑(2008)の音声資料を用い、筆者が改変・作成したものである。

(99) ウルサン方言のアクセント体系と語例(姜英淑 2008 を改変)

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節
a	[○○] kuur (文字)	[○○] p ^h ori (蠅)	[○○]○ k'eŋ'pp'ur (蚊やり火)	[○○]○○ k'eŋ'aknamu (ハシバミ)
b	[○]◎ hur (土)	[○]○ morke (砂)	[○]○○ tonp'eki (正月の遊び)	[○]○○○ kompaksai (かび)
c		○[○] kunte (ブランコ)	○[○]○ napurt'e (蛇)	○[○]○○ kipakisur (酒)
d			○○[○] sakoti (鍋蓋)	○○[○]○ nekurei (食事遊び)
e				○○○[○] porikjaŋsa (ポリギョンサ)

当該方言は語頭音節が長母音で現れる場合がある。語頭音節が長母音である場合は1音節目と2音節目が高いアクセント型(aのアクセント型)という特定のアクセント型が実現される。そのため、長母音が特定のアクセント型の実現に関与することが認められる。以下に語頭音節が長母音である場合のアクセント型と語例を示す。

(100) 語頭音節の母音が長母音である場合の音調型 (姜英淑 2008 を改変)

1 音節	2 音節	3 音節	4 音節
[○:◎]	[○:○]	[○:○]○	[○:○]○○
tu:r	ke:p'ur	k'a:ngʰeŋi	pe:ntʌkʰŋi
(庭)	(風)	(カササギ)	(気紛れもの)

N 型アクセントにも同じ特徴が見られる。代表例として 3.4.5.1 節で取り上げたカンウォン道カンヌン方言をあげる。当該方言は崔鉉鎮(2013a)によって三型アクセントと捉えられている方言である。A 型は文節の第 1・2 音節目が高く続き、第 3 音節目から低くなるアクセント特徴を持ち、B 型は第 1 音節目のみ高いアクセント特徴を持つ。そして C 型は文節の 2 音節目から次末音節まで高く続くアクセント特徴を持つ。以下にアクセント体系を示す。

表 18' 崔鉉鎮(2013a)によるカンヌン方言のアクセント体系

	1	2	3	4
A 型	[○(◎)]	[○○]	[○○]○	[○○]○○
B 型	○	[○]○	[○]○○	[○]○○○
C 型	○[(◎)]	○[○]	○[○]○	○[○○]○

当該方言にも語頭音節が長母音で現れる場合がある。この場合は A 型で現れるため、長母音が特定のアクセント型を実現させるといえる。以下に語頭音節が長母音である場合のアクセント型と語例を示す。

(88)' 語頭音節が長母音である場合の音調型及び語例

2 音節	3 音節	4 音節
[○:○]	[○:○]○	[○:○]○○
no:se	ŋi:ren.i	ŋu:r.t'ɛŋ.ki.ki
(ラバ)	(ミミズ)	(綱引き)

以上、韓国語多型アクセントと N 型アクセントにおいて分節音が音調型の決定に関与する場合を述べた。一型アクセントであるチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソ方言と比較してみれば、韓国語多型アクセントと N 型アクセントでは長母音のみが特定のアクセント型の実現に関与する⁵⁸。それに対し、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方

⁵⁸ 但し、長母音以外の分節音がアクセント型の決定に関与すると報告する先行研究も見られる。全鎬環(2004)と孫在賢(2005b)では長母音以外の分節音がアクセント型の決定に関与すると報告している。全鎬環(2004)はプサン方言を対象に外来語のアクセントを決める要因について考察しているが、当方言の外来語のアクセントは語頭音節と最後の音節の音節構造によって決まるという。しかし、2 音節外来語の場合は音節構造に加えて分節音も関与する。最後の音節が重音節であり、かつ最後の音節が/-iŋ/, /-uŋ/

言、コソン方言では音調型の決定に関与する分節音は方言ごとに異なるものの、長母音のみならず、語頭子音の種類つまり、強子音、弱子音・母音も関与する。

4.1.1.4. まとめ

以上、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言における音調型と分節音の関係について考察を行った。これらの方言は全て音調型の決定に分節音が関わる。

これらの方言の2音節には分節音を問わず1音節目のみ高い音調型が共通して現れる。ソウル方言、ナジュ方言、チョンヤン方言の場合はAパターンに該当し、コソン方言ではE①パターンに該当する。そのため、考察対象から除外する必要がある。尚、ナジュ方言の長母音の場合は分節音の影響によるものと解釈するため除外しない。

1音節目のみ高い音調型は言い切り形の特徴と関わっている。本論文で取り上げている4つの方言は全て言い切り形と接続形の相違が見られ、言い切り形は必ず下降が現れる。2音節では1音節目と2音節目の間と、2音節目の音節内に下降が生じ得るが、前者が言い切り形の特徴が最も反映された位置であるといえる。そのため、2音節において1音節目のみ高い音調型が現れるのは決まりきった特徴である。

チョンヤン方言、ナジュ方言、ソウル方言の3つの方言における分節音と音調型の間を捉えるためには、2音節のAパターンとBパターンは除外する必要がある。2音節のAパターンは既に述べた通り、分節音を問わず現れる上に、言い切り形の特徴によるものであるため分節音の関与が認められない。一方、Bパターンはナジュ方言の長母音とソウル方言の2音節を除くと、分節音を問わず全ての場合に現れるため、分節音の影響を受けないものと解釈できる。

2音節のAパターンとBパターンを除外すると、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言における分節音と音調型の間が明らかにできる。チョンヤン方言では語頭が強子音である3音節の場合に限ってAパターンが現れるため、Aパターンの実現に強子音のみならず、単位の長さも関与する。ソウル方言において音調型の決定に関与する分節音は弱子音・母音のみである。弱子音・母音はCパターンの実現の有無に関与する。ナジュ方言では長母音、強子音、弱子音・母音が全て特定の音調型の実現に関与する。長母音はAパターンを実現させる。一方、短母音の場合、強子音はAパターンの実現に関与し、弱子音・母音はCパターンの実現に関与する。コソン方言では長母音に関与するが、DパターンとEパターンの出現に関与せず、語頭音節の高さの決定のみに関与する。語頭音節が長母音であれば、必ず高くかつ長く発音されるため、D①パターンとE①パターンのみ現れる。

多型アクセントとN型アクセントを含めて分節音の観点から捉えた場合、多型アクセン

で終わる場合と語頭音節が氣息の強い無声有気音(原文では帶氣子音)で始まる場合はHH型で現れるという。

孫在賢(2005b)はテグ方言・キョンジュ(慶州)方言の1音節語幹用言の場合、長母音、氣息の強い無声有気音(原文では激音)、無声無気音(原文では濃音)、音節構造(軽音節・重音節)が語頭音節である場合は特定のアクセント型にかたよって現れると報告している。

トであるウルサン方言と N 型アクセントであるカンヌン方言にも分節音によって特定のアクセント型が現れる場合が見られる。この 2 つの方言では長母音が特定のアクセント型の実現に関与する。一方、一型アクセントであるチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言では方言によって関与する分節音に相違は見られるものの、長母音のみならず、強子音、弱子音・母音も音調型の決定に関与する。

4.1.2. 音調型の数

音調型の数からチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言を考察する。音韻的に一型アクセントとして解釈されても音声的にそのまま 1 種類の音調型しか持たないとは限らない。音声的には複数の音調型が現れるものの、対立を成す関係ではないことから音韻的に一型アクセントとして解釈される場合も存在し得る。そのため、音調型の数から一型アクセントを以下の 2 種類のタイプに分類できる。

a. 1 種類の音調型のみを有する一型アクセント

b. 複数の音調型を有する一型アクセント

本論文で取り上げている 4 つの方言は全て複数の音調型を有する一型アクセントである。しかし、4 つの方言に見られる複数の音調型の現れ方には違いが見られる。尚、1 種類の音調型のみを有する一型アクセントに関しては、先行研究から具体例が見られる。Fukui(2003)のピョンアン道方言の場合、言い切り形において次末音節のみ高く現れる 1 種類の音調型のみを有する。

4.1.2.1. チョンヤン方言

チョンヤン方言に現れる音調型は A パターンと B パターンの 2 種類である。単位の長さごとに現れる音調型を見ていくと、2 音節は A パターン、3 音節は B パターンと A パターンが現れ、4 音節以上は B パターンが現れる。

(101) チョンヤン方言の音調型

	2 音節	3 音節	4 音節
長母音	A	B	B
弱子音・母音	A	B	B
強子音	A	B~A	B

複数の音調型が現れる3音節を見ると、AパターンとBパターンが現れる。Bパターンの現れ方を見ると、分節音を問わず、現れることが分かる。それに対し、Aパターンの現れ方を見ると、3音節かつ語頭子音が強子音である場合に限って現れることが分かる。当該方言において複数の音調型が現れるのは特定の単位の長さかつ特定の子音の種類といった非常に制限的な環境であるといえる。

4.1.2.2. ソウル方言

ソウル方言に現れる音調型はAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類である。下降調のみで現れる1音節を除けば、2音節以上では複数の音調型が現れる。単位の長さごとに見ていくと、2音節ではAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類が現れ、3音節以上ではBパターンとCパターンの2種類が現れる。しかし、分節音ごとに見ていくと、3種類の音調型が全ての分節音に現れるわけではない。長母音の場合、2音節はAパターンで現れ、3音節以上はBパターンで現れ、単位の長さごとに1種類の音調型が現れる。強子音の場合は、2音節に限ってAパターンとBパターンの2種類の音調型が現れ、3音節以上ではBパターンしか現れない。弱子音・母音の場合は、単位の長さを問わず、複数の音調型が現れる。2音節はAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類の音調型が現れ、3音節以上ではBパターンとCパターンの2種類の音調型が現れる。

(102) ソウル方言の音調型

	2音節	3音節	4音節
長母音	A	B	B
強子音	A~B	B	B
弱子音・母音	A~B~C	B~C	B~C

ソウル方言に見られる複数の音調型は分節音を問わず現れる音調型と分節音によって現れる環境が決まっているものに分かれる。どちらの場合も現れる環境と条件が予測できるため、お互いに対立を成していないといえる。

4.1.2.3. ナジュ方言

ナジュ方言もソウル方言と同様、Aパターン、Bパターン、Cパターンの3種類が現れる。しかし、分節音ごとに現れる音調型の数に相違が見られる。長母音の場合は単位の長さを問わず、Aパターンの1種類の音調型のみ現れる。それに対し、短母音では強子音と弱子音・母音とで現れる音調型の数に相違が見られる。強子音の場合は単位の長さを問わず、AパターンとBパターンの2種類の音調型が現れる。一方、弱子音・母音の場合は単位の長さ

よって現れる音調型の数に相違が見られ、2音節ではAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類が見られるが、3音節以上ではBパターンとCパターンの2種類の音調型が現れる。

(103) ナジュ方言の音調型

	2音節	3音節	4音節
長母音	A	A	A
強子音	A~B	A~B	A~B
弱子音・母音	A~B~C	B~C	B~C

ナジュ方言に見られる複数の音調型は分節音によって現れる音調型が決定される傾向が強く、そうではない場合は分節音を問わず同じ語に対し、複数の音調型が現れるため、お互いに対立を成していないといえる。

4.1.2.4. コソン方言

当該方言に現れる音調型はD①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンの4種類である。但し、母音の長短によって現れる音調型の数に相違が見られる。長母音である場合は単位の長さを問わず、D①パターンとE①パターンが現れる。それに対し、短母音の場合は単位の長さによって現れる音調型の数が異なる。2音節ではD①パターン、D②パターン、E①パターンの3種類が現れるが、3音節以上ではD①パターンとD②パターン、E①パターンとE②パターンの4種類の音調型が現れる。

(104) コソン方言の音調型

	2音節	3音節	4音節
長母音	D①~E①	D①~E①	D①~E①
短母音	D①~D②~E①	D①~D②~E①~E②	D①~D②~E①~E②

次末音節と最後の音節における下降の位置によって分けられるDパターンとEパターンの場合、分節音によってその出現の有無が予測できない。しかし、同じ単語に対してDパターンとEパターンの両者が現れる場合が多い。また、仮に単語単独形で1種類の音調型が現れても助詞が付いた場合とで音調型が一貫しない場合が多い。さらに同じ単語にも関わらず現れる音調型に個人差が大きい。そのため、DパターンとEパターンは音韻的に対立を成す関係ではないと解釈できる。語頭音節の高さは母音の長短によって予測できるた

め、非弁別的な特徴であるといえる。

4.1.2.5. まとめ

一型アクセントを音調型の数から捉えた場合、1種類の音調型のみを有する場合と複数の音調型を有する場合に分類できる。前者には Fukui(2003)のピョンアン道方言が挙げられ、後者には本論文で扱っているチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の4つの方言が全て挙げられる。

チョンヤン方言の場合、現れる音調型の数はAパターンとBパターンの2種類であるが、単位の長さごとに現れる音調型を見ていくと、2音節はAパターンで現れる。3音節はAパターンとBパターンが現れ、4音節以上ではBパターンが現れる。AパターンとBパターンが全て現れるのは3音節かつ強子音で始まる場合である。チョンヤン方言において複数の音調型が現れる環境は非常に制限的であるといえる。

ソウル方言とナジュ方言に現れる音調型の数はAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類である。単位の長さごとに現れる音調型の数を見ていくと、単位の長さと言頭の分節音によって現れる音調型の数に相違は見られるものの、両方言とも2音節ではAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類の音調型が現れる。しかし、3音節以上の場合、ソウル方言ではBパターンとCパターンの2種類の音調型が現れるが、ナジュ方言ではAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類の音調型が現れる。

コソン方言に現れる音調型の数はD①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンの4種類である。母音の長短と単位の長さによって現れる音調型の数は異なるが、2音節ではD①パターン、D②パターン、E①パターンの3種類の音調型が現れ、3音節以上ではD①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンの4種類の音調型が現れる。以下に音調型の数から分類した韓国語一型アクセントを示す。

(105) 音調型の数から見た韓国語一型アクセント

- 1種類の音調型のみを有する一型アクセント — ピョンアン道方言
- 複数の音調型を有する一型アクセント — チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言

4.2. 接続形に見られる特徴

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言は言い切り形と接続形の相違が見られる。この特徴はこれらの方言の音調型の決定に最も優先的に適用される特徴であるため、言い切り形であるか、接続形であるかによって現れる特徴に相違が見られる。4.1節では言い切り形に見られる特徴について考察を行った。本節では接続形に見られる特徴につ

いて述べるが、言い切り形の特徴との相違を中心に考察する。

言い切り形と接続形の概念については、第三章の 3.1.3 節で詳しく取り上げたが、再度これらの概念について簡略に取り上げれば、言い切り形と接続形は上野(1977)によって提唱された概念である。言い切り形は「その後に続けるつもりのない形」(上野 1993:51)であり、接続形は「その後にまだ続けるつもりで発音したときの形」(上野 1993:51)であると定義されている。言い切り形と接続形の音声的実現の一例として上野(1989)の岩手県雫石方言を取り上げると、当該方言は昇る位置が弁別的な核(昇り核)を持つ。言い切り形の場合、無核型は全て低く現れ、有核型は核のあるところのみ高く現れる。一方、接続形では、有核型の場合、核のある位置から文節の最後のモーラまで高く続く。表記は本論文で用いている記号に書き換え、直接表記を施す。昇り核は「」で示す。

(9) 複数の名詞が並んでいる場合の音調型 (上野 1989 を改変)

(/「クジラ/、/ネ「ズミ/、/ナマ「ズ/、/イワシ/)

a. i. 言い切り形 : [ク]ジラト|ネ[ズ]ミト|ナマ[ズ]ト|イワシ。

ii. 接 続 形 : [クジラト]|ネ[ズミト]|ナマ[ズト]|イワシ。

(/「クジラカラモ/、/サカナカラモ/)

b. [クジラカラモ]|サカナカラモ。(鯨からも魚からも)

([クジラカラモ|サカナカラモ]。は不可)

(10) 名詞+動詞からなる場合の音調型 (上野 1989 を改変)

(/「クジラ/、/トッ「タ/)

a. [クジラ]|トッ[タ]。(鯨、捕った) ([クジラトッタ]。は不可)

(/「クジラ/、/タ「ベタ/)

b. [クジラ]|タ[ベ]タ。(鯨、食べた) ([クジラタベ]タ。は不可)

4.2.1. 4つの方言における言い切り形と接続形の相違

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の4つの方言における言い切り形の特徴は全ての音調型が必ず下降が見られる点である。それに対し、接続形は言い切り形の音調型に見られる下降が現れなくなる。言い切り形と接続形の相違をもたらす要素は下降の有無であるといえる。

チョンヤン方言の場合、言い切り形では A パターンと B パターンの 2 種類の音調型が現れるが、接続形になると、1 音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。

(106) a. pap | mʌk-ʌ.ra (ご飯 | 食べ-ろ。)
[○] | [○○]◎。

b. ip-i | ka.pjʌp-ta (口-が | 軽-い)
[○○] | [○○]◎。

c. t'ar.ki-ka | ma.sit-ta (苺-が | おいし-い)
[○○◎] | [○○]◎。

d. kʰoŋ.na.mur-i | pi.s'a-ta (豆もやし-が | 高-い)
[○○○○◎] | [○○]◎。

ソウル方言の場合、言い切り形では A パターン、B パターン、C パターンの 3 種類の音調型が現れるが、接続形になれば、3 種類の音調型に見られる下降が現れなくなり、1 音節目あるいは 2 音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。語頭音節の高さについては、強子音である場合は語頭音節が高く現れる。それに対し、弱子音・母音である場合は固定されていないため、高くも低くも現れる。

(51)' a. nun-i | nok-at.ta (雪-が | 解け-た)
○[◎] | [○○]◎。

b. na.mu-ka | tu.k'ʌp-ta (木-が | 厚-い)
○[○○]~[○○◎] | ○[○]◎。

c. kaŋ.a.ŋi-ka | kwi.jʌp-ta (子犬-が | かわい-い)
○[○○◎] | [○○]◎。

d. hʌ.ri-ka | ku.pu.ŋʌŋ(h)a-ta (腰-が | 曲がつ-ている)
[○○◎] | ○[○]○○◎~[○○]○○◎。

ナジュ方言の場合、言い切り形ではソウル方言と同様、A パターン、B パターン、C パターンの 3 種類の音調型が現れるが、接続形では下降が現れなくなる。語頭音節の高さに関しては、語頭音節が長母音である場合と強子音である場合は高く現れる一方、弱子音・母

音である場合が低くも高くも現れる。

- (70)' a. **pjΛ·ŋ·e** | **kΛr.rjΛt-ne** (病気-に | かかっ-た)
 [○:◎] | [○○]◎。
- b. **mok-i** | **ki:r-ta** (首-が | 長-い)
 [○○] | [○:]◎。
- c. **Λr.kur-i** | **no.rat-ne** (顔色-が | 黄色-いね)
 [○○◎] | [○○]◎。
- d. **ju.ri.ŋhaŋ-i** | **k'ε.ŋjΛt-ta** (窓ガラス-が | 割れ-た)
 ○[○○◎] | [○]◎。
- e. **sar.rim-i** | **na.k.nΛk-ŋhi** | **mo:t.hΛ-ta** (暮らし-が | 豊か-では | な-い)
 [○○◎] | ○[○○] | [○:]○○。

コソン方言の場合、言い切り形では D①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンが現れる。これらの音調型を下降の位置から捉えれば、DパターンとEパターンの2種類の音調型が現れると捉えられる。しかし、接続形になると、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言と同様、下降が現れなくなり、1音節目あるいは2音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。語頭音節の高さについては、接続形では長母音は観察されなかった。一方、強子音と弱子音・母音は低くも高くも現れる。

- (84)' a. **san-i** | **nop-a.ju** (山-が | 高-いです)
 ○[◎] | ○[◎]◎。
- b. **mΛ.ri-ka** | **ŋ'ar-pa** (髪-が | 短-い)
 ○[○○] | ○[◎]]。
- c. **san.twε.ŋi-tur-i** | **tΛp-ŋhε** (猪-が | 襲い掛か-る)
 [○○○○◎] | [○○]]。
- d. **hε.ŋa.o.ri-ka** | **ŋar** | **phit-sΛ** (向日葵-が | きれいに | 咲い-たよ。)
 [○○○○◎] | [○] | [○○]]。

e. nun.sa.ram | man.tur-ko | nor-at.ji.ju (雪だるま | 作っ-て | 遊ん-でいました)
○[○○]|[○○◎]|[○○◎]◎。

4.2.2. 多型アクセントと N 型アクセントにおける言い切り形と接続形の相違

N 型アクセントと解釈される一部の方言に言い切り形と接続形の相違が見られることが孫在賢(2007a)と孫在賢(2012)から窺える⁵⁹。

孫在賢(2007a)はカンウォン道のカンヌン方言・トンヘ(東海)方言とヨンウォル(寧越)方言に言い切り形と接続形の相違が見られると記述している⁶⁰。

カンヌン方言・トンヘ方言の場合、言い切り形の場合、1 音節目のみ高いアクセント型(a 型)、1 音節目と 2 音節目が高いアクセント型(b 型)、文節単位で 2 音節目から次末音節まで高いアクセント型(c 型)が対立を成す三型アクセントと捉えている。以下は単語単独の言い切り形、助詞が付いた場合の言い切り形、単語単独の接続形、助詞が付いた場合の接続形の 4 つの環境に現れる音調型を示したものである。

表 21 孫在賢(2007a)によるカンヌン・トンヘ方言の言い切り形と接続形の相違

		単独言い切り	単独接続	助詞付き言い切り	助詞付き接続
1	a	F	L	H(L)	L(H)
	c	F		L(H)	
2	a	HL	LH	HL(L)	LH(H)
	c	LF		LH(L)	
3	a	HLL	LHH	HLL(L)	LHH(H)
	b	HHL		HHL(L)	
	c	LHL		LHH(L)	
4	a	HLLL	LHHH	HLLL(L)	LHHH(H)
	b	HHLL		HHLL(L)	
	c	LHHL		LHHH(L)	
5	a	HLLLL	LHHHH	HLLLL(L)	LHHHH(H)
	b	HHLLL		HHLLL(L)	
	c	LHHHL		LHHHH(L)	

⁵⁹ 李文淑(2007)はクァンジュ方言とチョンジュ方言を 3 つのアクセント型が対立すると解釈した上で、これらの方言に言い切り形と接続形の相違が見られると報告している。孫在賢(2007a)はヨス(麗水)方言とタミョン(潭陽)郡コソ(古西)面方言を 3 つのアクセント型の対立を有する三型アクセントと解釈した上で、これらの方言に言い切り形と接続形の相違が見られると記述している。しかし、これらの方言が属するチョルラ道方言は高低アクセントの認定において研究者の間で解釈が異なるため、ここでは取り上げない。

⁶⁰ 音調表記においては、原文では高い音調と低い音調をそれぞれ「●」と「○」で示し、下降調は■で示している。しかし、白丸の場合、本論文で異なる意味で用いているため、●と○を H と L に書き換え、■は F に書き換えた。

接続形になると3つのアクセント型の対立は弁別性を失い、1音節目あるいは2音節目から最終の音節まで高く続く音調型で現れるという。

ヨンウォル方言の場合、言い切り形では1音節目と2音節目が高いアクセント型(a型)と2音節目から次末音節まで高いアクセント型(b型)が対立を成す二型アクセントと解釈している。但し、2音節語の場合、a型は1音節目のみ高いアクセント型で現れ、b型は1音節目は低くて2音節目は下降調であるアクセント型で現れる。以下は単語単独の言い切り形、助詞が付いた場合の言い切り形、単語単独の接続形、助詞が付いた場合の接続形の4つの環境に現れる音調型を示したものである。

表 22 孫在賢(2007a)によるヨンウォル方言の言い切り形と接続形の相違

		単独言い切り	単独接続	助詞付き言い切り	助詞付き接続
1	a	F	L	H(L)~(L(H))	H(L)~(L(H))
	b	F	L	L(H)	L(H)
2	a	HL	HH	HH(L)	HH(L)
	b	LF	LH	LH(L)	LH(H)
3	a	HHL	LHH	HHL(L)	LHH(L)
	b	LHL		LHH(L)	
4	a	HHLL	LHHH	HHLL(L)	LHHH(L)
	b	LHHL		LHHH(L)	
5	a	HHLLL	LHHHH	HHLLL(L)	LHHHH(L)
	b	LHHHL		LHHHH(L)	

接続形になると、2音節語の場合、a型は単語単独形では1音節目と2音節目が高い音調型で現れるが、助詞が付いた場合は言い切り形と同じ音調型で現れる。一方、b型は単語単独形では1音節目は低くて2音節目は高い音調型で現れるが、1音節助詞が付いた場合は2音節目と3音節目が高い音調型で現れる。しかし、3音節語以上では2つのアクセント型とも単語単独形では最後の音節まで高く現れ、助詞が付いた場合は次末音節まで高く現れる。表22には反映されていないが、語頭音節の高さは不定であるという。

孫在賢(2012)はチョルラ道のクァンヤン方言において3つのアクセント型の対立を持つ三型アクセントと解釈した上で、言い切り形と接続形の相違を持つと報告している⁶¹。一方、多型アクセントとして解釈される方言のうち、言い切り形と接続形の相違が見られるとの報告は管見の限り、見当たらない。

以上のことから韓国語多型アクセントとN型アクセントにおいては言い切り形と接続形

⁶¹ 2音節語において1音節目にアクセント核(音調の変動をもたらす特徴)を持つアクセント型の場合、単語単独形の接続形では全ての音節が高く現れる。また、文節単位で後ろから2番目にアクセント核があるアクセント型の場合も接続形では2音節目から最後の音節まで高く現れる。

の相違が殆どに見られないといえる。

4.2.3. まとめ

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言において言い切り形の音調型は全て必ず下降が生じる。それに対し、接続形では下降が現れないため、4つの方言に言い切り形と接続形の相違をもたらすのは下降の有無であるといえる。

チョンヤン方言は言い切り形ではAパターンとBパターンが現れるが、接続形では1音節目から最後の音節まで高く続く音調型しか現れない。ソウル方言とナジュ方言は言い切り形ではAパターン、Bパターン、Cパターンが現れるものの、接続形では3種類の音調型は1音節目あるいは2音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。コソン方言は言い切り形では下降の位置から捉えると、DパターンとEパターンが現れるが、接続形になると、1音節目あるいは2音節目から最後の音節目まで高く続く音調型でしか現れない。一方、多型アクセントとN型アクセントの場合、N型アクセントの一部にしか言い切り形と接続形の相違が見られない。

4.3. 韓国語一型アクセントの諸特性の提示

4.1節と4.2節において韓国語一型アクセントと解釈できるチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言を対象に音調型と分節音の関係、音調型の数、言い切り形と接続形の相違の3つの観点から考察を行った。これらの方言に見られる特徴を基に分析すると、韓国語一型アクセントに現れやすい特性が5つ挙げられる。但し、5つの特性の選定においては、3つ以上の方言に共通して見られる特徴であれば、韓国語一型アクセントの特性として捉えている。そのため、5つの特性が全て4つの方言に該当すると限らない。特性1)～4)は4つの方言に全て該当する特徴であるが、特性5)は3つの方言に該当する特性である。

1) 言い切り形と接続形の相違が見られる特性

言い切り形と接続形の相違をもたらすのは下降の有無であるといえる。言い切り形では、チョンヤン方言はAパターンとBパターンが現れ、ソウル方言とナジュ方言はAパターン、Bパターン、Cパターンが現れる。コソン方言はD①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンが現れる。現れる音調型に方言差が見られるといえる。しかし、全ての音調型に必ず下降が見られる点に関しては共通している。それに対し、接続形では4つの方言とも下降が現れない。

2) 2音節において1音節目のみ高い音調型が現れる特性

全体の音調的特徴からすれば、方言によって現れる音調型が異なる。しかし、2音節では分節音を問わず、全て1音節目のみ高い音調型が現れる。チョンヤン方言、ソウル方言、

ナジュ方言では A パターンに該当し、コソン方言では E①パターンに該当する。

1 音節目のみ高い音調型は言い切り形の特徴と密接に関わる。4つの方言において言い切り形の特徴は下降が生じることである。2音節の場合、1音節目と2音節目の間、2音節目の音節内に下降が生じ得るが、前者が最も言い切り形の特徴が反映される位置であるといえる。そのため、韓国語一型アクセントの2音節において1音節目のみ高い音調型が現れるのは決まりきった特徴であると捉えられる。尚、ナジュ方言の長母音の場合は単位の長さを問わず、A パターンのみ現れるため、言い切り形の特徴によるものではなく、分節音によるものである。

3) 複数の音調型を持つ特性

韓国語一型アクセントには1種類の音調型のみを持つ一型アクセントもあれば、複数の音調型を持つ一型アクセントもある。本論文で扱っている4つの方言は全て後者に属する。

チョンヤン方言の場合、語頭子音が強子音である3音節に限って A パターンと B パターンが現れる。複数の音調型が現れる環境が非常に制限的であるといえる。ソウル方言とナジュ方言の場合は A パターン、B パターン、C パターンの3種類の音調型が現れる。ソウル方言の場合、分節音によって現れる音調型の数に相違は見られるものの、2音節では A パターン、B パターン、C パターンの3種類の音調型が現れ、3音節以上は B パターンと C パターンの2種類の音調型が現れる。ナジュ方言の場合も分節音によって現れる音調型は異なるものの、2音節以上では A パターン、B パターン、C パターンの3種類の音調型が現れる。コソン方言は D①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンの4種類の音調型が現れる。母音の長短によって現れる音調型の数に相違は見られるが、2音節では D①パターン、D②パターン、E①パターンの3種類の音調型が現れ、3音節以上では D①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンの4種類の音調型が現れる。

4) 複数の音調型はその出現において分節音が関与する特性

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の4つの方言において音調型に対する各分節音の振る舞いをまとめてグループ化すると、長母音、強子音、弱子音・母音の3つのグループに分類できる。しかし、音調型の出現に関与する分節音には方言差が見られる。

チョンヤン方言の場合は、3音節かつ語頭子音が強子音である場合に B パターン以外にも A パターンが現れるため、単位の長さも関与するものの、分節音によって A パターンの出現が予測可能である。

ソウル方言の場合は C パターンの出現の有無が分節音によって決定される。C パターンは弱子音・母音の場合にしか現れないため、ソウル方言では弱子音・母音が特定の音調型の実現の有無に関与する。

ナジュ方言の場合は、長母音、強子音、弱子音・母音が全て特定の音調型の出現に関与

する。長母音の場合は A パターンしか現れないため、長母音から A パターンの出現が予測可能である。一方、短母音の場合は語頭子音の種類によって A パターンと C パターンの出現の有無が決定される。A パターンは強子音の場合にしか現れないのに対し、C パターンは弱子音・母音の場合にしか現れない。そのため、強子音と弱子音・母音はそれぞれ A パターンと C パターンの出現の有無を決定する。

コソン方言の場合、長母音が音調型の決定に関与する。長母音は必ず高くかつ長く発音されるため、語頭音節の母音が長母音である場合は D①パターンと E①パターンのみ現れる。

5) B パターンは分節音の影響を受けない特性

最初の 2 音節における音調的様相によって全体の音調型が特徴づけられるチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言の 3 つの方言に見られる特性である。音調的特徴が現れる位置と密接に関わる特性であると言える。

チョンヤン方言の場合は 3 音節以上では分節音を問わず B パターンが現れる。ソウル方言の場合は長母音の 2 音節を除くと、分節音を問わず B パターンが現れる。ナジュ方言ではチョンヤン方言とソウル方言と違い、短母音の場合において B パターンが語頭子音の種類を問わず現れる。それに対し、A パターンと C パターンは、方言差は見られるものの、分節音の影響によってその出現が決まる場合が多いため、分節音の影響を受けやすい音調型であると言える。

第五章 日韓一型アクセントの対照言語学的考察

本章では、日本語一型アクセントと韓国語一型アクセントとの対照言語学的考察を行い、両言語に見られる共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。尚、日本語の場合、第二章の 2.1 節で既に述べた通り、一型アクセントと無アクセントの相違の有無をめぐって両者の相違を認める立場と認めない立場がある。筆者は日本語の場合においても韓国語の場合と同様、一型アクセントと無アクセントの相違を認めない立場に立つ。

まず、5.1 節では日本語一型アクセントに関する先行研究を概観する。次に、5.2 節では日韓一型アクセントがそれぞれどのような言語地理学的分布を成しているかを概観する。最後に 5.3 節では日本語の先行研究において一型アクセントとして報告されている方言と対照考察を行い、日韓一型アクセントに見られる共通点と相違点について述べる。

5.1. 日本語一型アクセントに関する先行研究

一型アクセントあるいは無アクセントの存在については早い時期にその存在が知られている。しかし、アクセント型の対立を持たない点のみが注目されてきたため、それ以上の詳しい調査及び研究は行われてきていない。最近になってから音響分析機器を用い、文レベルでの研究が行われ始めている。本節では一型アクセントに関して比較的詳しい記述がなされた先行研究を中心に九州地方、四国地方、中部地方、関東地方、東北地方の 5 つの地方に分けて概観していく。先行研究の引用の際に音節や拍という用語が用いられているが、基本的にモーラを意味する。尚、宮崎県都城市を中心とした諸県方言及び鹿児島県志布志方言⁶²では音節を意味する。音調表記に関しては、なるべく先行研究で用いられている表記を書き直さずにそのまま用いる。先行研究では「^ー」で高い音調を示す方式、太字で高い音調を示す方式、●、▶、○、▷を用いて示す方式の 3 種類の表記法が用いられている。最後の表記法における黒色と白色の違いはそれぞれ高い音調と低い音調を意味し、三角形は助詞を意味する。

5.1.1. 九州地方の一型アクセントに関する記述

平山(1936)、平山(1951)、平山(1974)、平山(1975)、岩本(1983)、秋山(1983)、古瀬(1983)、木部(2009)、佐藤(2012)などで九州地方の一型アクセントに関する記述が見られる⁶³。

平山(1936)は鹿児島県曾於郡の約半分を占めている地域で見られる音調的特徴について日向国(今日の宮崎県)の一つの流れを成す型であることから日向アクセントと名付けてい

⁶² 宮崎県高鍋町方言と同県小林方言も同様である。

⁶³ その他に、岡野(1983)と上野(1996)で九州地方の一型アクセントに関する断片的な記述が見られる。岡野(1983)は福岡県筑分派域において「無型アクセント域で、人々は型知覚を持たない。その発音は、一・二音節語はやや頭高、三音節以上の語は、語頭語末がやや低い中膨らみ型であることが多い」(岡野 1983:72)と記述している。一方、上野(1996)は宮崎県高鍋町方言について文節の最後の音節が高く現れる一型アクセントであると報告している。

る。この地域に見られる特徴は、鹿児島県の B 型(文節の最後の音節のみ高い型)がさらに徹底されていると述べている。具体的に見ていくと、1 モーラ語の場合、単語単独形は高音で聞かれ、1 モーラの助詞が付くと助詞のみが高く現れる。2 モーラ以上の語の場合も同じ特徴が見られる。このような特徴は体言だけでなく、用言にも見られる。但し、独立性の乏しい音⁶⁴はアクセントの山が移動しないという。複合語は上記のような特徴が一層徹底され、語間に助詞「ガ」と「ノ」、特に助詞「ノ」が挟まれた不完全な複合語を作る時は例外なく最後のモーラが高く現れる。また、地域差と個人差は見られるが、形容詞・動詞の連体形+名詞の場合も最後のモーラが高くなる傾向が多いと述べている。

平山(1951)は宮崎県南部(諸県郡と都城市を中心とした地域)と鹿児島県の志布志町を中心とした地域などに行われている尻上がり一型音調と、熊本県南部と北部、福岡県筑後地方で行われている平板一型音調について報告している。宮崎県南部で行われている尻上がり一型音調は、原則として文節の最後の音節に山が来る。体言、用言を問わず、全ての語末の音節が一か所高く、他は低平であり、非常に明瞭であると記述している⁶⁵。それに対し、熊本県の南部と北部、福岡県の筑後地方では平板一型音調が行われていると報告している。熊本県南部の場合、1 モーラ語は語が助詞よりやや高めに発音されるのが普通であり、2 モーラ語は1 モーラ目がやや高めに発音される。しかし、助詞を付けて言い切る場合は2 モーラ目が1 モーラ目と同じ高さで続き、末尾はやや弱く発音されて僅かに低いという。3 モーラ以上の語に関しては丁寧に発音すると、体言、用言を問わず、最後のモーラまで平らに発音され、助詞が付けば助詞だけやや弱く、微妙に低くなる。但し、続ける気持が残る時は助詞まで平らになるのが最も普通の相であると記述している。熊本県の北部の一

⁶⁴ 撥音、長音、二重母音をはじめ、最後の音節で母音が脱落した「キ、ギ、ク、グ、チ、ヂ、ツ、ヅ、ト、ド、ヒ、ビ、フ、ブ、シ、ジ、ス、ズ、ニ、ヌ、ノ、ミ、ム、ユ、リ、ル、レ」を指す。

⁶⁵ 日本語一型アクセントとして最も知られている都城方言の場合、柴田(1955)、金田一(1956)、柴田(1957)、上野(1977)、山口(1998)などによって音韻的解釈が行われている。

柴田(1955)は平山氏の記述に基づき、この方言に見られる最後の音節の高にのぼりアクセント核があると解釈している。通時的観点からアクセント体系を見ると、くんだりアクセント核を持つ1つの型とのぼりアクセント核を持つ1つの型が対立をなす顎娃方言のような体系から下りアクセント核が消えた体系であると捉えている。それに対し、金田一(1956)は当該方言には音の高低による対立がないため、最後の音節の高を音韻的に無意味なものと捉えた上で、文節の最後の音節にタキがあると解釈している。タキは連文節の時にその性能が発揮されるという。一方、柴田(1955)の解釈について最後の音節の高に1つの文節をまとめる働きがあることを認めた結果によるものであると分析している。しかし、東京方言のタケ(竹)・タケガ(竹が)…の類に見られる最初のモーラの低も文節の始まりを示すため、アクセントの統合機能を優先した時、都城方言と同じく、東京方言にものぼりアクセント核を認めなければならなくなると柴田(1955)の解釈を批判している。金田一(1956)の批判に対し柴田(1957)は両者に統合機能に対する捉え方に相違があると指摘する。金田一(1956)は統合機能を文節の切れ目を示す働きであると捉え、柴田(1955)の解釈を分析し批判しているが、柴田(1957)は統合機能を音節をアクセント節にまとめる働きであると捉え、文節の切れ目を示す働きとは全く別のものであると指摘している。東京方言の最初のモーラに見られる低については、「コノ | タケガ | オレタ」のような例外があるため、最初のモーラの低が必ず文節の切れ目を示すとは限らないと批判している。一方、都城方言に見られる最後の高を音韻的に無意味なものと捉える金田一(1957)の見解に賛成している。しかし、最後の高には音節を統合して一つの文節をまとめる働きが認められるため、アクセント契機を認めるべきであると主張している。上野(1977)は最後の音節の高についてアクセント単位を指定しておけば、一般的規則で説明ができるものであると述べ、弁別の特徴としての核とは本質的に異なるものと捉えている。山口(1998)は音韻論的な面において一型アクセントと無アクセント両者とも現れる音調は非弁別的であるため、両者を同じものと捉えている。

型音調は、1 モーラ語に助詞を付けて言い切る場合は切れ目のモーラがやや弱く、同時に微妙に低い。しかし、自然談話では助詞のところまで平らかに続くのが普通である。2 モーラ語は全て2 モーラ目がやや弱く同時にやや低いのが普通である。3 モーラ語は2 音節目がわずかに高い傾向があり、助詞を付けて中止する時はその高まりが助詞まで及ぶのが普通である。4 モーラ語以上の場合は2 モーラ目がやや高みを帯びる場合が多い。福岡県の筑後地方を中心とした地域は熊本県の北部地方で行われている一型音調に属すると述べている。しかし、平板一型音調に見られる高低の差は極めてわずかであり、二型音調などの高低関係とは趣が違ふという。一方、海岸地帯の一部に頭高一型が行われるが、尻上がり一型音調ほど徹底してはいないと述べている。

平山(1974)と平山(1975)は都城市郷安久方言の音調的特徴について記述している。平山(1975)を中心に見ると、この方言は統合一型アクセントとして、基本的アクセント節(アクセント単位に相当)においてその末尾を高くする尾高一型であるという。当該方言は助動詞「チャ」及び終助詞を伴う場合であるか否かによって異なるアクセントの型が現れる。助動詞「チャ」及び終助詞を伴う場合を切れるアクセント節と呼び、伴わない場合を続くアクセント節と呼んでいる。切れるアクセント節は[チ]チャ(血-だ)、[チ]カ(血-か)などのように助動詞「チャ」及び終助詞が低く現れる。一方、続くアクセント節はチ[ガ]…(血-が…)、キ[ガ]…(木-が…)などのように全てその末尾が高く現れる。

岩本(1982)は宮崎県都城方言と日向方言の音調的特徴について記述している。都城方言については以下のように記述している。

諸県方言の中心ともなる都城地方の方言は、そのアクセントが尾高一型であるとして著名である。アクセントによって語義を弁別するということはないが、なんでも最後の一拍だけが高くなるという一つの型をもっている。言葉の長さは問わない。たとえば、ハナ(花・鼻)はナが高く、ヨメジョ(嫁)はジョが高く、ハナヨメ(花嫁)はメが高い。また、はねる音・つまる音が付く場合、たとえば、キモン(着物)はモンが高く、ジョグワツ(正月)はグワツが高くなる傾向がある。これはモン・グワツの末尾のはねる音・つまる音が寸づまりのようになり、モン・グワツでそれぞれ一単位をなし、そこにアクセントが置かれるからである。以上は北諸全般に通ずることであるが、西諸の東部も同じである。ただ、尾高一型アクセントも近年次第に崩壊尾高一型がふえてきつつあるように感ぜられる。

(岩本 1983:274-275)

一方、日向方言については以下のような記述がなされている。

日向方言は、平板一型アクセントで、たとえば、宮崎市近郊のは大体次のようである。

〇〇 〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇〇

右のように、二拍の場合だけ出だしの第一拍が高いような感じがする。一拍の語は助詞をつけると二拍の語とほぼ同じになる。三拍以上は大体において始めと終りが低めで、中間がやや膨らみ気味に高くなる。それは高くなると言ってもよいかどうか甚だ微妙である。このようなあいまいな言い方しかできないところが言わば特徴であるかもしれない。品詞には関係ないし、語でも文節でも変わりはない。話者には型の意識などは全然ない。調査の際、話者はいろいろに言うが、くりかえしゆっくり丁寧に言うと、大体平板な中膨らみのようなことになる。つまり落ち着いた発音では目立った起伏のない平板一色の状態であるから、平板一型アクセントと言われるのであろうが、むしろ「無アクセント」という方がより適切であると思う。

(岩本 1983:275)

秋山(1983)では熊本県の一型アクセントについて北部平板一型と南部平板一型に分けて次のように記述している。

北部平板一型

一拍語 〇▶

二拍語 ●〇・〇●▶ (文中では〇●▶)

三拍語 〇●〇・〇●●▶ (文中では〇●●▶)

南部平板一型 (琉球郡東部分布)

一拍語 ●▶ (または〇▶・〇▶)

二拍語 ●〇・●●▶

三拍語 ●●〇・●●●▶

●も▶も「ゆるゆると膨らむ」といった程度で基本としての平板性をそこなうものではない。あらゆる語がこの一型によって表現され、同音異義語をアクセントの型で区別することはない。北部の一型の鹿本郡鹿北町陣内を昭和三九年調査した二拍語名詞では、〇〇▶の傾向がみられる(平板化の強化)とともに、曖昧化の現象が目立った。また上益城郡矢部町目丸は、平山輝男調査で北部平板とされているが、昭和三九年調査では●〇は確かであるが、〇●▶は基本的には確かであるものの、〇〇▶・〇●▶などの動揺も目立った。

(秋山 1983:221-222)

古瀬(1983)は長崎県五島の玉之浦町方言と三井楽町丘郷方言は型知覚を持つ統合一型アクセントであり、全ての場合において最後のモーラを高く発音する尾高一型であり、それに対し、福江市をはじめとする五島の大部分の地域は型知覚を持たない崩壊一型アクセントであり、終わりから2モーラ目を高くする平板一型であると報告している。

玉之浦町方言と三井楽町丘郷方言は語類やモーラ数を問わず、ame (飴・雨)、hana (鼻・花)、atama (頭)、hadaka (裸)、asaga o (朝顔)などのように末尾モーラを高くする。助詞が付いても同様である。尚、kaŋ (勘・寒・爛)、kaT (柿・牡蠣)、kimon (着物)、kusut (薬)などのように末尾モーラが撥音と促音である場合は直前のモーラとはほぼ同じ高さで発音される。この特徴は動詞と形容詞にも同じく見られ、活用の種類や活用形のいかんを問わず、末尾を高くするという。それに対し、福江市をはじめとする五島の大部分の地域の場合、hana (鼻・花)、inaka (田舎)、asagao (朝顔)などのように終わりから2モーラ目が高く発音される。これは助詞が付いた場合でも同じである。動詞と形容詞の場合も同様である。但し、動詞の場合は地域によって例外が認められるという。

木部(2009)は明確な分類基準については述べていないものの、一型アクセントと無アクセントを分類する立場から諏訪之瀬島方言は一型アクセントと捉え、悪石島・小宝島・宝島方言については無アクセントと捉えている。諏訪之瀬島方言の場合、語単独では1モーラ目は低く現れ、2モーラ目から高く続くが、助詞が付くと助詞は低く現れるという。一方、悪石島・小宝島・宝島方言は単語によって決まった音調型がないため、同じ単語でも発話するたびに音調型が変わるという。聴覚的印象は高低の差が小さく、なだらかな感じがすると記述している。

佐藤(2013)は宮崎県小林方言における文節と疑問詞とフォーカスを含む文にみられるそれぞれのピッチパターンについて記述した上で、それを派生する音韻規則を立てている。当該方言は文節において最後の音節に高いピッチが生じる。複合語の場合も意味や構造による制約は反映されず、複合語の最後の音節のだけに高いピッチが生じる。これらのピッチパターンは韻律語形成規則⁶⁶と H トーン連結規則⁶⁷によって派生されると分析している。しかし、～ケ(～か)、～ヨ(～よ)、～ナ(禁止の～な)、～ド(～ぞ)などいった終助詞やコピュラが後続する場合には終助詞やコピュラの直前の音節に高いピッチが生じる。名詞にコピュラが後続した時にコピュラに高いピッチが生じない現象についてはコピュラがフォーカスでないため、一旦連結された H トーンが削除されたからであると分析している。

一方、フォーカスと疑問詞を含む文のピッチパターンについては、1つの疑問詞を含む文の場合は疑問詞まで(疑問詞を含む)それぞれの韻律語にピッチの上昇が生じ、疑問詞より後ろにはピッチの上昇は生じず、ピッチのなだらかな下降が生じるという。ピッチの上昇が生じない現象は疑問のスコープと関連しており、疑問のスコープが文全体である直接疑問文では文末までピッチの上昇が生じないのに対し、疑問のスコープが埋め込み節であ

⁶⁶ 韻律語：{左;語彙語}(=語彙語の左境界と韻律語の左境界をそろえよという規則である。

⁶⁷ H トーンを韻律語の右境界に隣接する音節に連結せよという規則である。

る間接疑問文では埋め込み節末まで生じない。疑問詞を二つ含む文のピッチパターンの場合、二つの疑問詞が同一節内にある文なのか、異なる節にある文なのかによって異なる。前者はどちらの疑問詞にもピッチの上昇が生じる。それに対し、後者は主節の疑問詞が埋め込み節の疑問詞に先行する場合は埋め込み節にある疑問詞にはピッチの上昇が生じないが、埋め込み節の疑問詞が主節の疑問詞に先行する場合はどちらの疑問詞にもピッチの上昇が生じるという。疑問詞とフォーカスを含む文のピッチパターンは **Minor Phrase**⁶⁸ 形成規則⁶⁹と **H トーン削除規則**⁷⁰によって派生されると分析している。尚、疑問詞を2つ含む文における **Minor Phrase** の形成には同一指標を持つ疑問詞は一つの **Minor Phrase** に含まれてはならないという制約が働くと仮定している。

5.1.2. 四国地方の一型アクセントに関する記述

平山(1940b)、平山(1957)、吉田(1982)などで四国地方の一型アクセントに関する記述が見られる。

平山(1940b)と平山(1957)で愛媛県の喜多郡内子町方言と同じ喜多郡の大和村方言における音調的特徴に関する記述が見られる。平山(1957)⁷¹を中心に述べていくと、愛媛県の喜多郡内子町方言の音調的特徴に関しては、品詞を問わず、一語一語区切って発音する場合、2モーラ語ではアメ(雨・飴)、ハシ(橋・箸)、マク(膜・巻く・蒔く)、フル(降る・振る)などのように、1モーラ目をやや高くする。アメ(雨・飴)とハシ(橋・箸)に助詞が付いた文節が連文節かつ第1文節に置かれた場合はアメガ、ハシガなどのように殆どが平板になる。しかし、息をとめて発音すれば、アメガ、ハシガとも発音するという。3モーラ以上の語でも同じ特徴が見られる。3モーラ語ではサクラ(桜)、オトコ(男)、ココロ(心)、アタル(当たる)、シロイ(白い)などのように、無造作な発音では2モーラ目がわずかに高めである。サクラ(桜)、オトコ(男)、ココロ(心)に助詞が付いた文節が連文節かつ第1文節に置かれた場合はサクラガ(桜が)、オトコガ(男が)、ココロガ(心が)などのように2モーラ目以下をやや高め、平板型に似た相で現れる。しかし、文節単独の発音では中高型に似た相で現れるのが普通である。4モーラ語も3モーラ語と同じである。クチビル(唇)、オトート(弟)、ハタラク(働く)、アブナイ(危ない)などのような中高型に似た相で現れるのが最も自然な発音である。但し、2モーラ目が独立性に乏しいものはセンセイ、アイサツのように、3モーラ目まで同じ高さで現れ、最後のモーラだけがわずかに低い。これらに助詞が付いた文節が連文節かつ第1文節に置かれた場合はクチビルガ、オトートガ、センセイガ、アイサツガなどのように、2モーラ目以下(2モーラ目が独立性に乏しければ、1モーラ目以下)をやや高まるという。しかし、これらを一語のように発音するときは中高型に似た相

⁶⁸ 最大一つの **H トーン** が実現する範囲であり、韻律語よりも大きな韻律範疇を指す。

⁶⁹ [+wh]や[+foc]を持つ要素から、それを束縛する補文標識までで、一つの **Minor Phrase** を形成せよという規則である。

⁷⁰ **Minor Phrase** 内で、初頭の **H トーン** 以外の **H トーン** をすべて削除せよという規則である。

⁷¹ 四国方言において愛媛県の西南部寄りの地方、即ち、伊予・上浮穴両郡の約半分と、その西南に続く喜多郡と、東宇和・北宇和両郡の東北部に一型アクセントが見られると記述している。

で現れる。但し、2 モーラ目が独立性に乏しいものであれば、1 モーラ目から高く現れるのが普通である。このような相は当該方言で最も自然な発音であるが、これは固定したものではなく、話調や強調にかなり引きずられて変化すると記述している。

一方、同じ喜多郡の大和村方言の音調的特徴については、 $\overline{\text{アメ}}$ (飴・雨)、 $\overline{\text{ハナ}}$ (花・鼻)、 $\overline{\text{アタマ}}$ (頭)、 $\overline{\text{ハレル}}$ (腫れる)、 $\overline{\text{ウレシー}}$ (嬉しい) などのように、4 モーラぐらいまでは助詞が付かない場合では1 モーラ目が高く現れる傾向がかなり固定しており、頭高型としての型知覚があり、音調基(文節をまとめる力)を持っているという。助詞が後接しても $\overline{\text{アメ}}$ ガ、 $\overline{\text{ハナ}}$ ガなどのように3 モーラぐらいまでは1 モーラ目の山の位置がかわらないのが普通である。しかし、助詞が付いた3 モーラ以上の文節では平板的に発音される傾向があると記述している。

吉田(1982)は高知県高岡郡檮原町と幡多郡北部の十和村や西土佐村では以下のような音調的特徴が見られると記述している。

愛媛県と県境を接している、高知県高岡郡檮原町および幡多郡北部の十和村や西土佐村はいわゆる、「無型アクセント」地域とみられる。たとえば檮原町四万川では、単語読みの語アクセント調査によれば、一音節名詞は各類を通じて●▷の音相が多く、二音節名詞も各類を通じて●○▷の出現率が高い。また、三音節名詞は、平板型・頭高型・中高型・尾高型など、さまざまに実現されるが、各語類別の弁別性は、ほとんど認められないと言ってよい。また、飴/雨、橋/箸、振る/降る、巻く/蒔く、厚い/暑い、などの同音異義語の、アクセントによる区別もあいまいである。要するにこれらの地域は、アクセントの型の区別がない方言である。

(吉田 1982:436-437)

5.1.3. 中部地方の一型アクセントに関する記述

平山(1953)と寺田(1957)などで中部地方の一型アクセントに関する記述が見られる。

平山(1953)は今立郡鯖江町上深江、片上村 吉谷・別所・乙坂今北、福井市花堂・開発町・新保町、吉田郡松岡町、志比谷村志比、下志比村谷口、浄法寺村浄法寺・村殿、森田町、中藤島村高木、武生市下中津原町・旭町、丹生郡白山村勝蓮花、安養寺・蒲生谷、朝日町朝日・西田中、足羽郡社村江守中、坂井郡鳴鹿を一型アクセント地域であると述べ、これらの方言は「すべて『鼻・花、橋・箸、飴・雨』などをはじめ、動詞・形容詞その他あらゆる語を音調の型によって区別することはなく、いちように平板一型の○○、○○○型が行われている」(平山 1953:4)と記述している。

寺田(1957)は静岡県の大井川上流、井川村から南にかけて西岸は旧上川根村千頭、崎平・中川根村藤川、水川まで、東岸は大川村・東川根村小長井、小猿郷・徳山村堀之内、田野口、一丁河内・旧笹間村二俣、栗原まで一型アクセントが分布していると報告している。そして、旧笹間村二俣と栗原の音調的特徴を例で取り上げている。三種類の調査方法によ

る調査を行っている中で、まず、聞いて調べる調査法では、例えば、カタ(肩)の場合、カタと発音する被調査者もいれば、カタと発音する被調査者もいるが、異なる音調型で発音しても平気であるという。次に、調査表による読ませて調べる調査では、秋・朝・雨・坂・糸などをアキ・アサ・アメ・イタ・イトと発音しても本人を含め、他の被調査者は平気であり、変だと思わない。最後に、聞かせて調べる調査では、例えば、ハンなどの意味を聞いても前後の関係なしでは意味が分からないという。一方、自由な会話では尻上がりイントネーションが観察され、一型アクセント以外の土地の話者はこれをギラと呼ぶという。

5.1.4. 関東地方の一型アクセントに関する記述

金田一(1948)、金田一(1977)、尾崎(1984)、森下(1984)、早野(2006)などで関東地方の一型アクセントに関する記述が見られる。

金田一(1948)は茨城県水戸方言を同じモーラ数の同じ語は全て同じアクセントで発音される典型的な一型アクセントを持つ方言であると捉えた上で、2モーラ語の雨を代表例として取り上げてどのような型に属するかについて東京方言と比較しつつ考察を行っている。水戸の人は窓の外に降る水は？という質問に対し、アメあるいはアメで発音するが、アメという下降型で現れるのが普通であるという。東京方言において雨は臨時的な感情や意志を込めて言ってもアからメへの下降は決して失われないため、雨という語の持つアクセントがそのまま現れるといえる。それに対し、水戸方言においての雨は臨時的な感情や状況によってアメと発音される場合もあれば、アメと発音される場合もある。これは水戸方言で窓から降る水は？という質問に対してアメと発音される場合は語の意義の他に断定の意味も含まれていることを意味し、断定を現わすイントネーションは下降調で現れる。そのため、雨のアクセントは全平型であると解釈している。雨を含む全ての2モーラ語は平板型に属する。3モーラ語と4モーラ語の場合にも2モーラ語と同様、全て平板型に属すると捉えている。

金田一(1977)は茨城県、栃木県、千葉県における一型アクセントについて報告している⁷²。

⁷² 調査地域の詳細は以下の通りである。尚、被調査者の一型アクセント的特徴の度合いについてA、B、C、Dに分類している。

Aは被調査者が完全に一型アクセント特徴を持ち、同市町村内も全て同じアクセントと考えられる。

茨城県—水戸市、取手町北相馬郡、布川町、守谷町、岩井町、猿島郡、境町、古河町、結城町結城郡、水海道町、谷田部郡筑波郡、下館町真壁郡、土浦郡新治郡、石岡町、龍ヶ崎町稲敷郡、江戸崎町、金江津村、十余島村、潮来町行方郡、大同町鹿島郡、鉾田町、旧助川町現日立市旧那賀郡。

栃木県—宇都宮市、栃木市、間々田町下都郡、小山町、岩舟町、鹿沼町、上都賀郡、日光町、栗野町、真岡町芳賀郡。

Bは被調査者は全てAと同様である。しかし、同市町村が全て同様であるかもしれない。少なくともそれに近いと予想される。

茨城県—日立市(旧市域)、高松村鹿島郡。 千葉県—関宿町東葛飾郡、川間村、新島村香取郡。

Cは被調査者の大部分が一型アクセントである。ごく少数が一型アクセントに似て多少異なるアクセントもある。

千葉県—野田郡東葛飾郡。 茨城県—鹿島町鹿島郡。 栃木県—足尾町上都賀郡。

Dは詳しい調査は行っていないが、Aと同様、一型アクセントであると思われる。

調査は言わせる調査と読ませる調査を行っている。言わせる調査においては「鼻」、「耳」、「肩」などを指して発音してもらおうと、大多数の市町村でハナ、ハナ、ミミ、ミミ、カタ、カタのように下降的なアクセントで発音し、「雨」・「飴」や「箸」・「橋」などのような同音異義語において全てアメ、ハシで発音する。しかし、場合によってはハナ、ミミのように平板に発音される場合もあれば、ハナ、ミミのように上昇的に発音される場合もあるという。読ませる調査でも似た特徴が見られるという。そして、水戸三の丸尋高校の高一の女性を対象に行った調査から得たデータを示している。2モーラ名詞の場合、単独形は全てソラ(空)、ヤマ(山)、タケ(竹)のように発音され、「ガ」が付いて他の文節が続くと、ソラガ、ヤマガ、タケガのように聞こえる場合とソラガ、ヤマガ、タケガのように聞こえる場合があるという。前者は後接する文節と密接に結合する場合に多く現れ、後者は結合が緩い場合に多く見られる。2モーラ動詞の場合は単独形では全てカク(書く)、イク(行く)のように発音され、「モノ」のような語が来ると、カクモノまたはカクモノ、オクモノまたはオクモノのように発音される。3モーラ名詞においては単独形では全てイノチ(命)、ウサギ(兎)などのように発音され、「ダ」が後接すると、全てイノチダ、ウサギダなどのように発音される。「ガ」が伴って次に文節が続く場合はイノチガ、ウサギガなどのように発音される。3モーラ動詞・形容詞も同様であるという。

尾崎(1984)は一型アクセント方言に見られる下降に着目してこれをイントネーションではなく、核的下降と捉える立場から栃木県上三川町(上蒲生)方言を対象に語の長さ、語の前後の環境⁷³、語の音節構造と下降点との関係について考察を行っている。その上で、東京方言と比較考察している。当該方言に見られる下降点は一般的に文の長さが長くなるにつれ、下降点の位置を移動させて文の中央寄りに持って来ようとする傾向が見られるという。しかし、特定の音節構造を持つ場合においては環境が変わっても非常に安定した様相を呈すると報告している⁷⁴。

森下(1984)は足利地方を除くほぼ県の全域が無アクセント地域であると述べ、これらの地域について以下のように記述している。

足利地方を除くほぼ県の全域が無アクセントである。正しくは足利市以外に佐野市・安蘇郡の一部を除いた地域が無アクセントの地域である。その地域のアクセントは、型の崩れたものであるから崩壊アクセントともいい、その人たちは、同音異義語である「柿」と「牡蠣」、「橋」と「箸」、「切る」と「着る」等をアクセントによって聞き分けることは不可能である。「柿」をカキ、カキ、カキなどと

茨城県－佐貫町北相馬郡、宗道村結城郡、筑波町筑波郡、麻生町行方郡、宍戸町西茨城郡、小川町東茨城郡、湊町那珂郡、関南村多賀郡。

栃木県－壬生町河内郡、矢板町塩谷郡、藤樹原町、カラス山町那須郡、黒磯町。

⁷³ 名詞を対象に ①単独の一語文、②後ろに「だ」を付けた文、③前に「この」を付けた文、④「この」と「だ」の両方を付けた文の4つの環境のことを指す。

⁷⁴ 5.3.2.2節で詳しく取り上げるため、ここでは省略することにする。

発音したり、同様に、「橋」をハシ、ハシ、ハシ、「切る」をキル、キル、キルのように発音したりする。つまり個々の語に決まったアクセントの型がないのである。

(森下 1984:62-63)

早野(2006)では栃木県芳賀郡と茨城県玉造町の音調的特徴に関する記述が見られる。これらの方言は服部(1954)の仙台方言と同様、ピッチパターンが発話全体のモーラ数によって決まっていると報告している。発話文が全体で2モーラであれば、その構成が2モーラ名詞単独であろうと、助詞のガが付いた1モーラ名詞であろうと1モーラ目は高く、2モーラ目は低く現れる。発音全体が3モーラ以上であれば、1モーラ目と最後のモーラは低く現れ、その間のモーラは全て高く現れるという。

5.1.5. 東北地方の一型アクセントに関する記述

服部(1931)、服部(1954)、服部(1973)、柴田(1955)、平山(1940c)、平山(1957)、渡辺(1973)などで東北地方の一型アクセントに関する記述が見られる。

服部(1931)、服部(1954)、服部(1973)では宮城県仙台方言に関する記述が見られる。服部(1954)を中心に見れば、様々な環境から捉えたハナ(花、鼻)の音調型を代表例として取り上げ、仙台方言の音調的特徴について以下のように記述している。

たとえば、仙台方言では

[ハナ] (花、鼻以下同様)

[ハナダ]

[コノハナダ]

[コノハナガソーダ]

のようであって、「ハナ」(花、鼻)という単語に該当する部分の音調を見ると、全く一定していないようで、発話の全体の調子が非常に平板的である。これでは「アクセントが無い」といってもよいような状態である。

(服部 1954:267)

平山(1940c)と平山(1957)は米沢方言の音調的特徴について取り上げている。平山(1957)を中心に述べていくと、1モーラ語に1モーラの助詞が付く文節はツカ°(血が)、ヒカ°(気・木が)などのように、無造作な発音ではほぼ平板に近い相で現れるのが普通である。しかし、東京語や奥羽方言の東京式などのようなはっきりとした高低の差ではなく、柔らかみのある膨らみを帯びる感じであるという。

2モーラ語ではアメ(飴・雨)、キグ(菊・聞く・効く)、マグ(幕・膜・巻く・蒔く)などのように2モーラ目がやや弱くかつやや低くなるのが普通であるという。しかし、例えば、アメカ°フル、アメカ°フル、アメカ°フル(雨が降る)などのように連文節からなる場合のアメカの音調型を見ると、アメカ°のように平板的であるが、この文節だけを区切って発音させれば、アメカ°で現れるという。

3モーラ語ではアガエ(赤い)、ウサキ°(兎)、ハレル(腫れる・晴れる)などのように2モーラ目に膨らみがあるのが普通である。但し、ゲンキ(軍旗)、チューキ°(忠義)のように2モーラ目が独立性に乏しいものは中中下ともいうべき相になるのが普通である。一方、これらに他の助詞あるいは他の語を続けると、アガエハナ、アガエハナ、アガエハナなどのように平板的になる。1モーラの助詞を付けた文節をそれだけで言い切れば、アダマカ°(頭が)、アワシエオ(袷を)、ウサキ°モ(兎も)などのように下中中下で発音するのが最も自然な相であるという。このような相はヨミガダ(読み方)、ハダラグ(働く)などのように言い切る場合の4モーラ語にもそのまま現れる。5モーラ以上の語あるいは文節でもその原則は認められ、2モーラ目以下最後から2番目までのモーラに膨らみを持つ相が最もよく現れるという。

柴田(1955)は福島県白河市方言の音調的特徴について丁寧にすればするほど平板的な調子になると記述している。例えば、同じ2モーラの場合、1モーラ目は高く、2モーラ目は低い高低の音調で発音され場合もあれば、反対に1モーラ目は低く、2モーラ目は高い低高の音調で発音される場合もある。しかし、その高と低の差はごくわずかであると記述している。

渡辺(1973)は福島県耶麻郡西会津町野沢方言の音調的特徴について以下のように記述している。

第1拍名詞第1類の「柄」及び第3類の「絵」において、アクセントの区別がない。たとえば、[エオ]・[エオモテ]・[エオシッカリモッテーロ]のように、基本節及び派生節においても平らに発音される。また、「絵」においても、[エカ°]・[エカ°ウマイ]・[エカ°ダイブウマインダナ]のようになる。

また、第2類「日」と第3種類「火」の区別もない。[ヒニアタル](日)、[ヒニアタル](火)で、音声的には[○カ°]・[○カ°]・[○カ°]のように観察される。むしろ、こうした高低の差が僅少で、その区別をすることが、きわめてむずかしい。インフォーマントも「日」・「火」の区別はアクセント節においてまったくない。アクセントの意識はないと報告している。

第2拍名詞のアクセントも音声的には第1拍名詞と同様で、[○○カ°]やや1拍が第2拍に対して低い。時には[○○カ°]・[○○カ°]となるなど、高低の差はほとんど区別することができない。第2類の「橋」と第4類の「箸」及び第3類の「雲」、第5類の「蜘蛛」のアクセントの区別はない。すべての語類におい

て同じ調子である。

動詞は四段活用動詞第1類「売る・買う……」第2類の「編む・打つ……」など〔ウル〕・〔ウッタ〕、〔アム〕・〔アンダ〕のように、終止形及び過去形において、頭高に発音している。

第3拍名詞は、〔〇〇〇カ°〕と発音されるものと〔〇〇〇カ°〕とやや2拍目を高く発音する傾向がある。しかも、1語を2回発音すると1回目とはまた違った発音をするなど、アクセントの型知覚はまったくない。したがって、〔〇〇〇カ°〕は東京語の中高型とは異なるものであるアクセント意識がないのであるから、調査者が真似て発音しても、わからない。こうしたところから、いろいろな音声的相を現わすのである。

第3拍動詞、一段活用動詞第1類〔アケル〕・〔アケタ〕・〔カレル〕・〔カレタ〕のようになり、第2類においては、〔オキル〕・〔オキタ〕と発音しているが、東京語の中高型とは異なるものである。形容詞においては、「暑い」・「厚い」・「熱い」は、動詞と同じように、頭高に発音したり、中高に発音したりするのが一般的である。

(渡辺 1973:104-105)

5.1.6. まとめ

以上、日本語一型アクセントに関する先行研究を九州地方、四国地方、中部地方、関東地方、東北地方の5つの地方に分けて概観してきた。先行研究で取り上げられた一型アクセントの音調的特徴をまとめると、4種類に分類することができる。

一つ目は最後の音節のみ高く現れる音調型であり、宮崎県都城方言などに見られる特徴である。二つ目は語頭モーラのみが高く現れる音調型として、愛媛県喜多郡の大和村方言で見られる。三つ目は終わりから2モーラ目のみ高く現れる音調型であり、長崎県五島の福江市方言に見られる。四つ目は基本的に1モーラ目と最後のモーラは低く現れ、その間のモーラは全て高く現れる音調型である。仙台方言などに見られる。しかし、これらの4つの音調型が日本全国に幅広く見られるわけではない。一つ目から三つ目までの音調型は限られた地域でしか見られない。それに対し、四つ目の音調型を有する一型アクセント方言は日本全国に数多く存在するといえる。

5.2. 日韓一型アクセントの言語地理学的分布

日韓両言語において一型アクセントがそれぞれどのような地理的分布を成しているかを概観する。

5.2.1. 日本語の場合

図2は平山(1986)による日本語全国方言のアクセント分布図である。平山(1986)は一型アクセントと無アクセントの相違を認める立場であるため、両者を分けて示している。但し、平山(1986)は通時的観点から一型アクセントと無アクセントを捉えているため、それぞれ統合一型のアクセントと崩壊アクセントという用語を用いている。一方、筆者は両者の相違を認めない立場である。筆者の立場から捉えた場合、崩壊アクセント地域と統合一型のアクセント地域は全て一型アクセント地域となる。

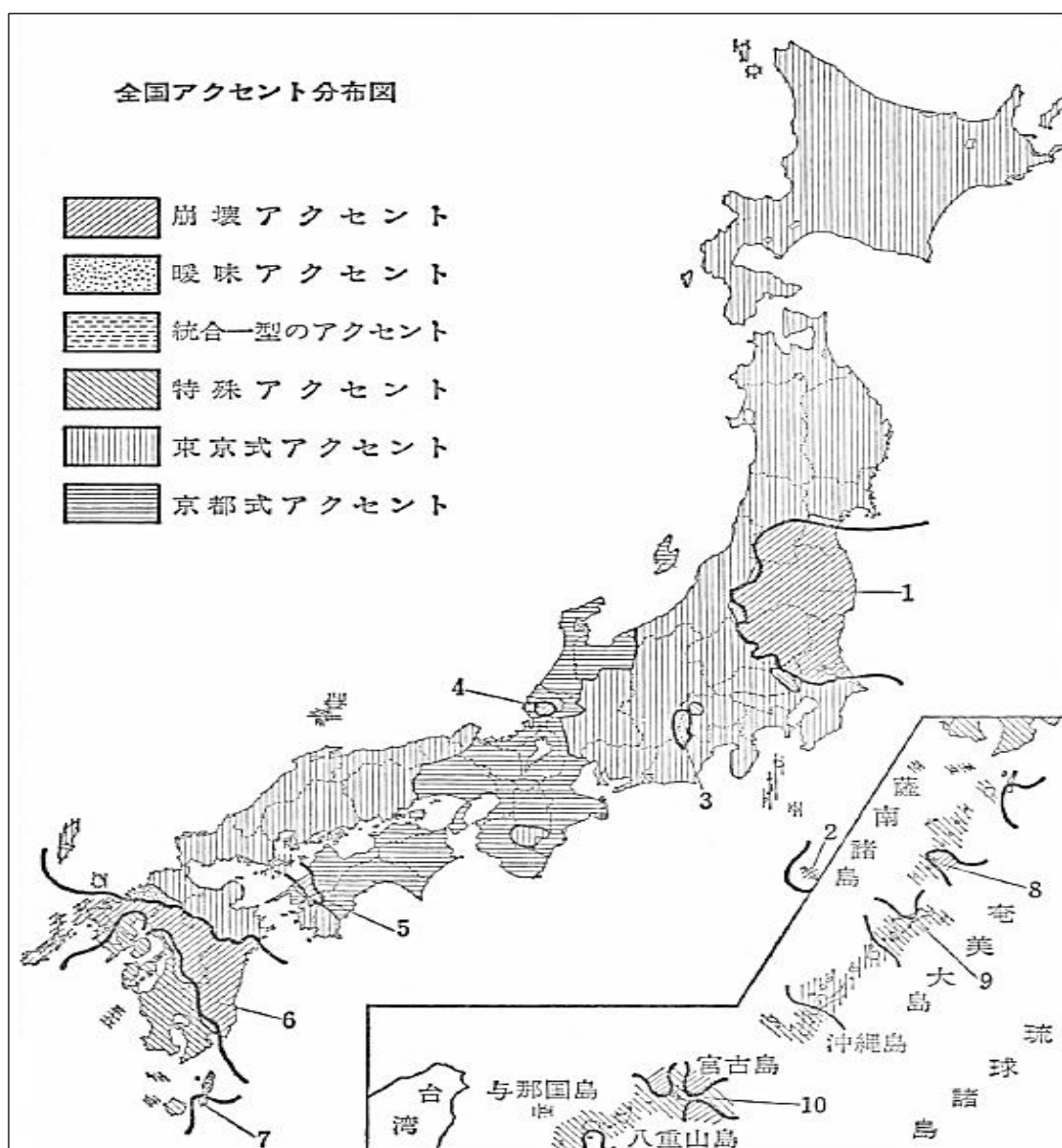


図2 日本語全国方言のアクセント分布図(平山 1986:42)

図2を見れば分かるように、本州と九州にそれぞれ広域な一型アクセント地域が存在す

ることが分かる。本州では福島県を中心に、南側に栃木県と茨城県、北側に山形県の一部と宮城県の一部が一型アクセント地域を成している。一方、九州では宮崎県を中心に熊本県の一部、福岡県の一部、佐賀県の一部が一型アクセント地域を成している。その他にも福井県の一部、愛媛県の一部、八丈島など、日本全国に一型アクセント地域が点在していることが分かる。

5.2.2. 韓国語の場合

以下に福井(2013)による韓国語全国方言のアクセント分布図を示す。白色の地域が韓国語一型アクセント地域である。尚、地域名の内、北道と南道に分かれた地域があるが、便宜上、北道と南道は区別せずにまとめて呼ぶことにする。

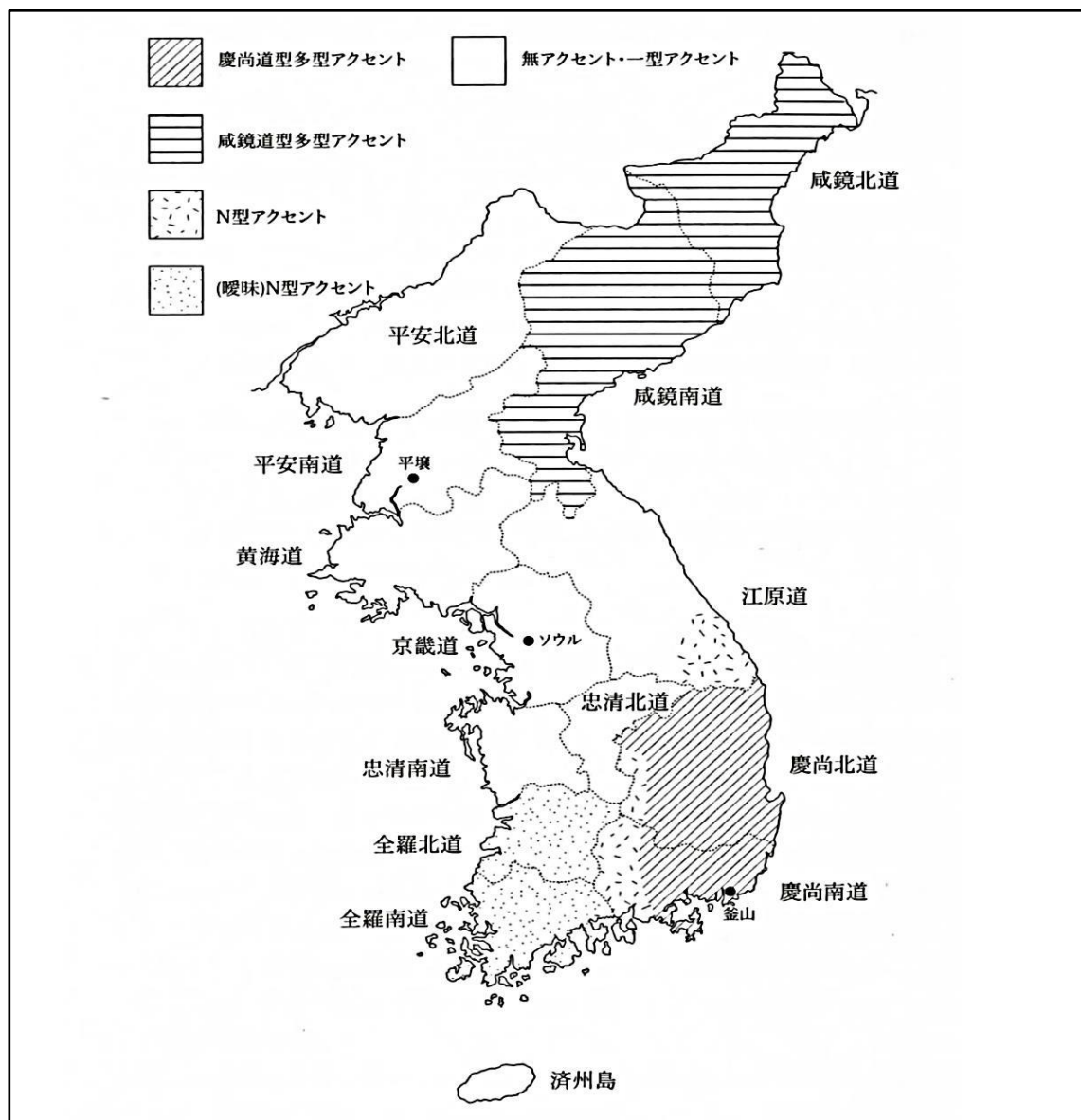


図3 韓国語全国方言のアクセント分布図 (福井 2013:204)

図3を見れば、韓国語一型アクセントはソウルを含めたキョンギ(京畿)道を中心に、北側はファンヘ(黄海)道とピョンアン(平安)道、南側はチュンチョン(忠清)道、東側はカンウォン(江原)道にわたってまとまった地理的分布を成していることが分かる。その他に、チェジュ(済州)島も韓国語一型アクセント地域であることが分かる。但し、(曖昧)N型アクセント地域となっているチョルラ(全羅)道の場合、特にチョルラ南道方言に属するナジュ方言は筆者によって一型アクセントであることが明らかになったため、今後、チョルラ道方言は更なる検討が必要であるといえる。

5.3. 日韓一型アクセントの対照言語学的考察

日韓一型アクセントを対象に考察を行う。5.3.1節では音調型の数から対照考察を行い、5.3.2節では音韻構造と音調型の関係から対照考察する。5.3.3節では言い切り形と接続形の観点から対照考察を行う。5.4節では5.3.1節から5.3.3節にかけて対照考察した内容をまとめる。

5.3.1. 音調型の数

4.1.2節で既に取り上げて述べた通り、音韻的には同じ一型アクセントと解されても音声的にそのまま1種類の音調型のみを有するとは限らない。音声的には1種類の音調型のみ有する場合もあれば、対立を成していない複数の音調型を有する場合もあり得るといえる。

従って、音調型の数から日韓一型アクセントを捉えた場合、両言語にはどのようなタイプの一型アクセントが存在するかについて考察を行う。

5.3.1.1. 日本語の場合

1種類の音調型のみを有する一型アクセントと複数の音調型を有する一型アクセントが全て存在することが認められる。

1種類の音調型のみを有する一型アクセントとして、宮崎県都城市中郷安久方言(便宜上、以降、都城方言と呼ぶ)と長崎県の福江市をはじめとする五島諸方言(以降、五島諸方言と呼ぶ)があげられる。

都城方言における音調的特徴を見てみると、品詞を問わず全ての場合において最後の音節のみ高い音調型が現れる。以下の例(107)は平山(1951)に基づき、筆者が作成したものである。

(107) 都城方言における音調型及び語例

1	2	3	4
[チ]	ア[メ]	オト[コ]	ウチカ[タ]
(血)	(雨、飴、甘い)	(男)	(妻)

都城方言と同じ特徴を有する方言には宮崎県小林方言と同県高鍋町方言、長崎県五島の玉之浦町方言と三井楽町丘郷方言が報告されている⁷⁵。

一方、長崎県五島諸方言は都城方言とは異なる 1 種類の音調型を有する。これらの方言は後ろから 2 モーラ目のみが高い音調型の 1 種類の音調型が現れる。これは助詞が付いた場合でも同じであるという。以下の例(108)は古瀬(1983)のデータに基づき、筆者が作成したものである。

(108) 長崎県五島諸方言における音調型及び語例

2 モーラ	3 モーラ	4 モーラ
[ha]na	i[na]ka	asa[ga]o
(鼻・花)	(田舎)	(朝顔)

それに対し、複数の音調型を有する一型アクセントとして、熊本県南部諸方言⁷⁶と同県北部諸方言⁷⁷が挙げられる。

熊本県南部諸方言の音調型と語例を以下の例(109)に示す。例(109)は筆者が平山(1951)の記述とデータに基づき、作成したものである。

(109) 熊本県南部諸方言における音調型及び語例

2	3	4
[ア]カ	[クル]マ〜	[コガタ]ナ〜
(赤、垢)	ク[ル]マ	コ[ガタ]ナ
	(車)	(小刀)

熊本県南部諸方言の場合、丁寧に区切って発音すれば、最後のモーラがやや弱くかつ低めに現れる。但し、談話での無造作な発音では 1 モーラ目と最後のモーラがやや弱くかつ低めに現れる傾向も見られるという。例えば、2 モーラ語のアカ(赤、垢)に助詞のガ(が)を付けて助詞のところで区切って発音すれば、2 モーラ目まで同じ高さで続き、最後のモーラはやや弱くかつ低めに発音される。尚、2 モーラ目が 1 モーラ目より高めに発音される場合もある。3 モーラ以上の語であるクルマ(車)とコガタナ(小刀)の場合にも同じことが言える。これらの語に 1 モーラの助詞が後接すれば、助詞だけがやや弱くかつ微妙に低くなると記述している。

一方、同県北部諸方言の場合、言い切り形と接続形の相違が見られる。言い切り形の音調型を見ると、3 モーラ語までは同県南部諸方言と類似した特徴が見られる。以下に音調

⁷⁵ 詳細については、小林方言は佐藤(2013)を、高鍋町方言は上野(1996)を、長崎県五島の玉之浦町方言と三井楽町丘郷方言は古瀬(1983)をそれぞれ参照されたい。

⁷⁶ 葦北郡の東部、鹿児島・宮崎両県に隣接する球磨郡の湯前、水上、多良木、免田、久米などである。

⁷⁷ 熊本市、鹿本郡、菊池郡、阿蘇郡及び飽託郡のほぼ東北部・玉名郡の熊本寄りの地方などである。

型と語例を示す。例(110)は平山(1951)のデータと記述に基づき、筆者が作成したものである。

(110) 熊本県北部諸方言における言い切り形の音調型及び語例

1	2	3	4
[ハ](ガ)。 (齒、葉)	[カ]サ。 (傘、痒)	ア[ブ]ラ。 (油)	ア[メ]ガタ～[アメ]ガタ～ ア[メガ]タ～[アメガ]タ。 (飴)

1 モーラ語にガ(が)やモ(も)などといった1モーラの助詞が付くと、助詞がやや弱くかつ微妙に低く発音される。2モーラ語と3モーラ語にも同じ特徴が見られる。これらの語に1モーラの助詞が後接すれば、2モーラ目がやや高まるのが普通であるという。

同県南部諸方言と違いが見られるのは4モーラ以上の語である。2モーラ目と3モーラ目がやや高いか、最後のモーラのみ弱まると同時に微妙に低く発音される場合もあれば、1モーラ目と2モーラ目あるいは2モーラ目のみがやや高みを帯びる場合も見られる。しかし、1モーラの助詞が後続すれば、3モーラ語と同じ特徴が見られるという。

5.3.1.2. 韓国語の場合

韓国語一型アクセントの場合も日本語の一型アクセントの場合と同様、1種類の音調型のみを有する一型アクセントと複数の音調型を有する一型アクセントに分類できる。前者はピョンアン道方言が該当し、後者はチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソソ方言が該当する。

チョンヤン方言に現れる音調型の数はAパターンとBパターンの2種類である。しかし、複数の音調型が現れるのは強子音で始まる3音節の場合のみである。複数の音調型が現れる環境が非常に制限的であるといえる。

(101)' チョンヤン方言の音調型

	2 音節	3 音節	4 音節
長母音	A	B	B
弱子音・母音	A	B	B
強子音	A	B~A	B

ソウル方言に現れる音調型の数はAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類である。2音節以上では複数の音調型が現れるが、分節音ごとに見ていくと、全ての分節音におい

て複数の音調型が現れるわけではなく、分節音によって現れる音調型の数に相違が見られる。長母音の場合、2音節はAパターンで現れ、3音節以上ではBパターンで現れる。音節ごとに異なる1種類の音調型が現れるのである。強子音の場合、2音節ではAパターンとBパターンの2種類の音調型が現れるが、3音節以上ではBパターンの1種類の音調型しか現れない。弱子音・母音の場合は音節数を問わず、複数の音調型が現れる。2音節ではAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類の音調型が現れるが、3音節以上ではBパターンとCパターンの2種類の音調型が現れる。

(102)' ソウル方言の音調型

	2音節	3音節	4音節
長母音	A	B	B
強子音	A~B	B	B
弱子音・母音	A~B~C	B~C	B~C

ナジュ方言に現れる音調型の数はソウル方言と同様、Aパターン、Bパターン、Cパターンの3種類である。長母音は音節数を問わず、Aパターンの1種類の音調型が現れる。強子音である場合は音節数を問わず、AパターンとBパターンの2種類の音調型が現れる。弱子音・母音の場合は2音節と3音節以上とで現れる音調型の数に相違が見られる。2音節ではAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類の音調型が現れるのに対し、3音節以上ではBパターンとCパターンの2種類の音調型が現れる。

(103)' ナジュ方言の音調型

	2音節	3音節	4音節
長母音	A	A	A
強子音	A~B	A~B	A~B
弱子音・母音	A~B~C	B~C	B~C

コソン方言に現れる音調型の数はD①パターン①、D②パターン、E①パターン、E②パターンの4種類である。長母音の場合は単位の長さを問わずD①パターンとE①パターンの2種類の音調型が現れる。それに対し、短母音の場合は単位の長さによって現れる音調型の数が異なる。2音節ではD①パターン、D②パターン、E①パターンの3種類の音調型が現れ、3音節以上ではD①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンの4種

類の音調型が現れる。

(104)' コソソ方言の音調型

	2 音節	3 音節	4 音節
長母音	D①～E①	D①～E①	D①～E①
短母音	D①～D②～E①	D①～D②～E①～E②	D①～D②～E①～E②

5.3.1.3. まとめ

以上、音調型の数から日韓一型アクセントを考察したが、両者とも1種類の音調型のみを有する一型アクセントと複数の音調型を有する一型アクセントに分類できる。

日本語の場合、1種類の音調型のみに有する一型アクセントとして宮崎県都城方言と長崎県五島諸方言があげられる。それに対し、複数の音調型のみに有する一型アクセントとして熊本県南部諸方言と同県北部諸方言があげられる。

一方、韓国語の場合、1種類の音調型のみに有する一型アクセントとしてピョンアン道方言があげられる。それに対し、複数の音調型を有する一型アクセントとして本論文で取り上げている4つの方言があげられる。

5.3.2. 音韻構造と音調型の関係

日韓一型アクセントにおいて音韻構造が音調型の決定にどのように関与するかについて考察を行う。尚、日本語の先行研究では音節という用語が用いられているが、実質的にはモーラを意味する。音調表記において — は高い音調を、無印は低い音調を意味する。

5.3.2.1. 分節音と音調型の関係

分節音と音調型の関係から日韓両言語を分析すれば、日本語の場合は分節音が音調型の決定に関与する方言は認められないため⁷⁸、関与しない方言のみあるといえる。それに対し、韓国語の場合は分節音が音調型の決定に関与しない方言と関与する方言両方が認められる。

日本語の場合、分節音が音調型の決定に関与しない方言には都城方言をはじめ、宮城県仙台方言、熊本県南部諸方言、同県北部諸方言、山形県米沢方言、愛媛県喜多郡内子町方

⁷⁸ 尚、平山(1951)から分節音が音調型の決定に関与することが窺える方言に関する記述がみられる。平山(1951)では熊本県南部諸方言において「三音節以上で、特に母音の無声化(狭い母音特に『i, u』が無声子音に挟まれる場合・乃至『キ・ク・シ・ス・チ・ツ・リ・ル』などが語末に来る時一般に無声化又は脱落する)するものや、その他、独立性に乏しい音節(長音・撥音・促音など)がある時、第三音節目或いはそれ以下から低くなる傾向がある」(平山 1951:225)と述べている。音調型の決定に関与する条件の一つである母音の無声化の場合、母音の広狭と子音の種類といった分節音の条件によって起こる現象であるため、分節音が音調型の決定に関与すると捉えられる。しかし、具体例が示されていないため、母音の無声化が起こった際にどのような音調型が実現され、母音の無声化が起こらない場合の音調型とどのように異なるかその相違が比較できない。よって、ここでは当該方言を音調型の決定に分節音が関与するものと認めない。

言、栃木県上三川町(上蒲生)方言などがある。

一方、韓国語の場合、分節音が音調型の決定に関与しない方言には Fukui(2003)のピョンアン道方言があげられる。ピョンアン道方言の場合、文末や休止直前に置かれた場合は次末音節が高く現れると記述されている。それに対し、本論文で扱っている4つの方言は全て分節音が音調型の決定に関与する。しかし、これらの方言に見られる全ての音調型が分節音によってその出現が決定されるわけではない。これらの方言には共通して分節音の影響を受けない音調型がある。2音節にみられる1音節目のみ高い音調型である。チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言の場合ではAパターンに該当し、コソン方言の場合ではE①パターンに該当する。2音節にみられる1音節目のみ高い音調型は分節音を問わず現れる。これは必ず下降が生じるという言い切り形の特徴が最も反映された結果によるものであるため除外する必要がある。但し、ナジュ方言の長母音は単位の長さを問わずAパターンのみ現れるため、分節音によるものと解釈し、除外しない。一方、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言の場合はAパターン以外にもBパターンを除外する必要がある。Bパターンの現れ方を見れば、チョンヤン方言の場合は分節音を問わず3音節以上で現れ、ソウル方言の場合は長母音の2音節を除けば、分節音を問わず全て現れる。ナジュ方言の場合は短母音であれば、分節音を問わず全て現れる。そのため、これらの方言に見られるBパターンは分節音の影響を受けないものと解釈できる。

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言における分節音と音調型の関係を見れば、チョンヤン方言の場合、強子音で始まる3音節である場合に限りAパターンが現れるため、強子音という分節音と3音節という単位の長さが重要な要素として関わる。ソウル方言の場合は弱子音・母音がCパターンの出現の有無に関与する。

(93)' ソウル方言の短母音における語頭子音の種類と音調型の関係

	2音節	3音節	4音節
弱子音・母音	C	C	C

ナジュ方言の場合、長母音、強子音、弱子音・母音が全て音調型の決定に関与する。長母音は必ずAパターンで実現される。一方、短母音である場合、強子音はAパターンの出現の有無を決定し、弱子音・母音はCパターンの出現の有無を決定する。

(96)' ナジュ方言における語頭子音の種類と音調型の関係

	2音節	3音節	4音節
長母音	A	A	A
強子音	—	A	A
弱子音・母音	C	C	C

コソソ方言の場合、長母音が語頭音節の高さの決定に関与するため、語頭音節が高く始まる音調型しか現れない。

(98)′ コソソ方言における長母音と音調型の関係

	2 音節	3 音節	4 音節
長母音	D①～E①	D①～E①	D①～E①

5.3.2.2. 音節構造と音調型の関係

日本語一型アクセントの場合は音調型の決定に音節構造が関わらない方言と関わる方言に分類できる。それに対し、韓国語一型アクセントの場合は音節構造が音調型の決定に関与しない方言しか存在しない。

日本語の場合、音節構造が関与しない方言には都城方言と小林方言がある。これらの方言は音節構造とは関係なく、基本的に文節の最後の音節が高く現れる。それに対し、音節構造が音調型の決定に関与する方言には宮城県仙台方言、熊本県南部諸方言、同県北部諸方言、山形県米沢方言、愛媛県喜多郡内子町方言、栃木県上三川町(上蒲生)方言がある。これらの方言には音節構造が音調型の決定に関与することが窺える記述が見られる。

服部(1931)によって記述されている仙台方言の場合、二字動詞の過去形において促音を含まない場合はアイタ(開ける)、カイタ(書いた)、トンダ(飛んだ)、ノンダ(飲んだ)などのように発音される⁷⁹が、促音を含む場合はアッタ(有った)、ノッタ(乗った)、カッタ(買った、飼った)などのように発音されるという。

平山(1951)によって記述されている熊本県北部諸方言に関しては、「四音節以上の語を一語一語区切って発音すると、アメガタ(飴)、カマボコ(蒲鉾)、クマモト(地名)、ナギナタ(長刀)、ヨミカタ(読方)などのように第二音節にやや高みを帯びる場合が多い(但し、『オーイタ・オーイタ〔地名〕』のように第二音節が独立性に乏しい場合は例外である)』(平山 1951:228-229)という⁸⁰。

平山(1957)によって記述がなされている山形県米沢方言と愛媛県喜多郡内子町方言の場合、山形県米沢方言では3モーラ語においてアタマ(頭)、カラス(カラス)、アガエ(赤い)、ハレル(腫れる、晴れる)などのように音声的に2モーラ目に膨らみのあるのが普通であるという。但し、グンキ(軍旗)、チューキ°(忠義)などは2モーラ目が独立性に乏しいため、

⁷⁹ アメダ(雨だ、飴だ)、クルマ(車)、ウケル(受ける)、アカイ(赤い)などのように全体のモーラ数が同じであれば、品詞や構成要素を問わず、同じ音調型で現れる。

⁸⁰ 同県南部諸方言でも音節構造が音調型の決定に関与することが窺える記述が見られる。当該方言は「談話に現れる無造作な発音では第一音節と末尾の音節をやや弱く、そしてやや低めにする傾向が認められる。〈中略〉三音節以上で、特に母音の無声化(狭い母音特に『i・u』が無声子音に挟まれる場合・乃至『キ・ク・シ・ス・チ・ツ・リ・ル』などが語末に来る時一般に無声化又は脱落する)するものや、その他、独立性に乏しい音節(長音・撥音・促音など)がある時、第三音節目或いはそれ以下から低くなる傾向がある」(平山 1951:225)と述べている。この記述から長音、撥音、促音が当該方言の音調型の決定に関与することが窺える。しかし、具体例が示されておらず、長音、撥音、促音が含まれた語の音調型がどのように実現されるか判断できないため、ここでは取り上げないことにする。

中中下とも言うべき相になるのが普通であるという。一方、愛媛県喜多郡内子町方言では4モーラ語においてクチビル(唇)、オトート(弟)、ハタラク(働く)、アブナイ(危ない)などのように2モーラ目と3モーラ目がわずかに高めに現れるのが最も自然な発音であるが、センセイ、アイサツのように2モーラ目が独立性に乏しいものであれば、3モーラ目まで同じ高さで続き、最後の音節だけがわずかに低いという。尚、記述はなされていないものの、3モーラの具体例⁸¹を見ると、アメガ(飴・雨)、ハシガ(橋・箸・端)の場合は2モーラ目がわずかに高い音調型(アメガ、ハシガ)で表記されているのに対し、2モーラ目が二重母音のイであるマイテ(巻く・蒔く)は1モーラ目と2モーラ目が同じ高さで3モーラ目がわずかに低い音調型(マイテ)で表記されている。そのため、3モーラも音節構造が音調型の決定に関与することが窺える。

尾崎(1984)⁸²は栃木県上三川町(上蒲生)方言において以下の特定の音節構造を持つ場合に環境が変わっても核的下降⁸³が非常に安定した様相を呈すると報告している。但し、6は任意のモーラを示し、・と【 】はモーラの境界と音節の境界をそれぞれ示す。□は前のモーラと同じ母音、イ、撥音のいずれかを示す⁸⁴。↑は核的下降を示す。

- 2モーラ： 【CV・□】 → 6↑6
 3モーラ： 【CV・□】・【CV】 } → 6↑66
 【CV・□・□】
 【CV】・【CV・□】 → 66↑6
 4モーラ： 【CV】・【CV・□】・【CV】 } → 66↑66
 【CV】・【CV・□・□】

断片的な記述と限られたデータであるものの、上記の先行研究をまとめてみると、3つの観点から日本語一型アクセントにおける音節構造と音調型の関係について分析することができる。

まず、音節量の観点から捉えた場合、先行研究で取り上げられた全ての方言は共通して重音節である場合に限って音調型の決定に関与する⁸⁵。重音節をなす要素は長音(一)、撥音(ン)、促音(ッ)、二重母音のイである。尚、音調型の決定に関与する要素は方言差がみら

⁸¹ 連文節からなる場合において息を止める際の第1文節の音調型である。

⁸² 一型アクセント方言に見られる下降に着目してこれをイントネーションではなく、核的下降と捉える立場から語の長さ、語の前後の環境、語の音韻的構造と下降点との関係、下降点における東京方言との関係について考察を行ったものである。

⁸³ 一型アクセント方言に見られる下降をイントネーションではなく、核的下降と捉えている。

⁸⁴ 本論文と同じ記号が原文で用いられているため、全て書き換えた。

⁸⁵ このような現象は一型アクセントのみならず、多型アクセントの東京方言でも見られる。東京方言では原則として語頭モーラは低く現れる。しかし、特殊モーラを含む重音節の場合には異なる振る舞いを見せる。トーキョー(東京)やシンジユク(新宿)のように語頭が長音(一)と撥音(ン)を含む重音節の場合は語頭モーラが高く現れる。それに対し、ガッカイ(学会)のように促音を含む重音節の場合は2モーラ目まで低く現れる。

れる。

(111) 日本語一型アクセントにおける重音節を成す要素

- a. 仙台方言 — 促音(ッ)
- b. 熊本県北部諸方言 — 長音(ー)
- c. 米沢方言 — 長音(ー)、撥音(ン)
- d. 喜多郡内子町方言 — 撥音(ン)、二重母音のイ
- e. 上三川町(上蒲生)方言 — 長音(ー)、撥音(ン)、二重母音のイ

長音(ー)と撥音(ン)の場合は仙台方言と喜多郡内子町方言以外の方言において音調型の決定に関与することが分かる。それに対し、促音(ッ)と二重母音のイの場合は一部の方言において音調型の決定に関与することがわかる。このことから同じ重音節であるとしても長音(ー)と撥音(ン)の場合が音調型の決定において強く関与するといえる。

次に、重音節の位置の観点から捉えた場合、服部(1931)の仙台方言、平山(1951)の熊本県北部諸方言、平山(1957)の米沢方言と喜多郡内子町方言を見ると、1・2モーラ目が重音節をなす場合に共通して音調型の決定に関与する。一方、尾崎(1984)の栃木県上三川町(上蒲生)方言がモーラ数によって相違が見られ、2モーラは1・2モーラ目が重音節をなす場合に関与し、3モーラは1・2・3モーラ目が1音節をなす場合と2・3モーラ目が1音節をなす場合に関与する。そして4モーラは2・3モーラ目が1音節をなす場合と2・3・4モーラ目が1音節をなす場合に関与する。栃木県上三川町(上蒲生)方言で3モーラにおいて2・3モーラ目が1音節をなす場合と、4モーラにおいて2・3モーラ目と2・3・4モーラ目がそれぞれ1音節をなす場合を除けば、多くの方言において1モーラ目と2モーラ目が1音節をなす場合(方言によっては3モーラ目までを含む)に音調型の決定に強く関与する傾向が見られるといえる。

最後に、全体のモーラ数と音節構造の関係から捉えた場合、音節構造が音調型の決定に関与する際に全体のモーラ数に関与することが先行研究から窺える。服部(1931)の仙台方言は3モーラである場合に音節構造が関わっており、平山(1951)の熊本県北部諸方言は4モーラ以上の場合に関与する。そして、平山(1957)の米沢方言と喜多郡内子町方言は3モーラ以上で関与し、尾崎(1984)の栃木県上三川町(上蒲生)方言は2モーラ以上で関与する。この点から全体のモーラ数が3モーラ以上である場合に音節構造が音調型の決定に関与しやすいことが窺える。

それに対し、韓国語の場合、既に述べた通り、音節構造が音調型の決定に関与する一型アクセントは存在しない。本論文で取り上げられた4つの方言を見ていくと、チョンヤン方言の場合、3音節の場合を除くと、音節ごとに1種類の音調型しかないため、音節構造が音調型の決定に関与することは認めがたい。3音節の場合でも分節音によって特定の音調型の実現が予測できる。一方、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の場合、2音節以

上で複数の音調型が現れるが、これらの音調型の出現と制限に決定的に関与するのは分節音である。音調型が決まる際に音節構造によって予測可能な部分は全くない。そのため、音節構造は音調型の決定に全く関与しないと捉えられる。

5.3.2.3. まとめ

日韓一型アクセントにおける音韻構造と音調型の関係について考察を行った。音韻構造はさらに分節音と音節構造に分けて分析できる。

分節音と音調型の関係に関しては、日本語の場合は分節音が音調型の決定に関与しない方言のみ認められる。それに対し、韓国語の場合は分節音が音調型の決定に関与する方言としない方言に分類できる。関与する場合、音調型の決定に関与する分節音に相違は見られるが、長母音、強子音、弱子音・母音が関与する。

音節構造と音調型の関係に関しては、日本語の場合は音節構造が音調型の決定に関与する方言としない方言に分類できる。関与する場合、方言差は見られるものの、長音(一)、撥音(ン)、促音(ッ)、二重母音のイが含まれた重音節が音調型の決定に関与する。それに対し、韓国語の場合は音節構造が音調型の決定に関与しない方言しか存在しない。

日韓一型アクセントは音韻構造が音調型の決定に関与する点には共通しているが、日本語の場合は音節構造が強く関与することが認められるのに対し、韓国語の場合は分節音が強く関与することが認められるといえる。

5.3.3. 言い切り形と接続形の相違

言い切り形と接続形の相違から日韓一型アクセントを対照させて考察すると、日本語の場合、言い切り形と接続形の相違が見られない方言と見られる方言に分類できる。韓国語の場合も先行研究から言い切り形と接続形の相違が見られない方言と見られる方言に分類できる。但し、言い切り形と接続形の相違が見られない方言の詳細な記述と具体例は示されていない。

5.3.3.1. 日本語の場合

言い切り形と接続形の相違が見られない方言と見られる方言に分類できる。前者は都城方言が代表例で挙げられ、後者は熊本県北部諸方言が代表例としてあげられる。

都城方言の場合、言い切り形と接続形の相違が見られない。そのため、句末なのか非句末なのかといった環境は当該方言では音調型の決定に重要な条件ではない。当該方言はどのような環境でも文節や句は最後の音節のみ高く現れる。以下の例(112)を見れば、言い切り形と接続形の相違の相違が見られないことが分かる。データは平山(1951)を用いる。

- (112) a. カッ[ガ] | ナッ[タ] (柿が | なった)
b. モミッ[ガ] | チッ[タ] (紅葉が | 散った)

- c. トィ[ガ] | ツ[ダ] (鳥が | 飛んだ)
 d. ハヒ[ガ] | ナガレ[タ] (橋 | 箸が | 流れた。)

上記の例(112)は名詞+助詞+動詞からなる構造である。仮に当該方言において言い切り形と接続形の相違が見られるとすれば、非句末である名詞は句末である動詞とは異なる音調型で現れるはずであるが、名詞も動詞と同じ音調型で現れる。そのため、都城方言は言い切り形と接続形の相違を持たないと解釈できる。

それに対し、言い切り形と接続形の相違が見られる方言の代表例として熊本県北部諸方言があげられる。この方言における言い切り形の音調型は(110)に示されているが、改めて1～4モーラの音調型を見れば、2モーラでは1モーラ目のみ高い音調型、3モーラ以上は1モーラ目と最後のモーラは低く、その間のモーラは高い音調型で現れる。音調的下降の有無から見ると、次末モーラと最後のモーラの間には下降が生じることが分かる。以下には1～2モーラ名詞に1モーラの助詞が付いた場合である。データは平山(1951)を用いる。

(113) 1モーラ名詞の場合

- a. [ハ]ノ (歯、葉) [ハ]モ [ハ]バ [ハ]ニ
 b. [ヒ]ノ (火、日) [ヒ]モ [ヒ]バ [ヒ]ニ

(114) 2モーラ名詞の場合

- a. [カ]サ (傘、痒) カ[サ]ン カ[サ]モ カ[サ]バ
 b. [ハ]ナ (花、鼻) ハ[ナ]ン ハ[ナ]モ ハ[ナ]バ

(115) 3モーラ名詞の場合

- a. ア[ブ]ラ (油) ア[ブラ]ン ア[ブラ]モ
 b. タ[マ]ゴ (卵) タ[マゴ]ン タ[マゴ]モ

しかし、上記の名詞が連文節かつ第1文節に置かれた場合を見ると、上記の音調型ではなく、異なる音調型で現れる。以下に例を示す。

- (116) a. [ハモ] | イタカ。 (歯も痛い)
 b. [ヒノ] | デタ。 (日が出た)
 c. カ[サン] | ヤブレタ。 (傘が破れた)
 d. ア[ブラモ] | アル。 (油もある)
 f. タ[マゴバ] | コータ。 (卵を買った)

名詞を含む第1文節の音調型のみを見れば、2モーラは全て高い音調で現れ、3モーラ

の場合は2モーラ目から最後のモーラまで高く続くことがわかる。音調的下降の有無から捉えると、言い切り形に見られる下降が現れなくなっていることが分かる。文全体の音調型を見ると、名詞を含む文節は1モーラ目あるいは2モーラ目から最後のモーラまで高く現れ、用言からなる文節は全てのモーラが低く現れることが分かる。尚、用言からなる文節の音調型は言い切り形の音調型で現れていないため、言い切り形の典型的な音調型ではないが、二つの文節からなる場合は、最後の文節は言い切り形の異形態として全ての音調が低く現れると解釈できる。一方、例(117)a~cの場合、文全体が1つのアクセント単位を成し、文全体が言い切り形として現れると捉えられる場合である。

- (117) a. [ハモイタ]カ。(歯も痛い)
 b. [ヒノデ]タ。(日が出た)
 c. カ[サンヤブレ]タ。(傘が破れた)

具体例は示されていないものの、熊本県北部諸方言以外にも、米沢方言、愛媛県喜多郡内子町方言、茨城県水戸方言も言い切り形と接続形の相違が見られる方言として解釈できる。

平山(1957)による米沢方言の場合、1モーラ語に1モーラの助詞が付く文節が連文節かつ第1文節に置かれた場合、ツカ[°](血が)、ヒカ[°](気・木が)のように発音される。2モーラ語はアメ(飴・雨)、キグ(菊・聞く・効く)、マグ(幕・膜・巻く・蒔く)のように発音される。しかし、例えば、アメカ[°]フル、アメカ[°]フル、アメカ[°]フル(雨が降る)のように連文節からなる場合にアメガの音調型を見ると、アメカ[°]のように発音される。しかし、この文節だけを区切って発音させれば、アメカ[°]で現れるという。3モーラ語はアガエ(赤い)、ウサキ[°](兎)、ハレル(腫れる・晴れる)などのように発音されるが、アガエ(赤い)の場合、他の語を続けると、アガエハナ、アガエハナ、アガエハナなどのように発音されると記述している。

平山(1957)によって記述されている愛媛県喜多郡内子町方言の場合、2モーラ語はアメ(雨・飴)、ハシ(橋・箸)、マク(膜・巻く・蒔く)、フル(降る・振る)のように発音される。しかし、これらに助詞が付いた文節が連文節かつ第1文節に置かれた場合、アメガ、ハシガ、マイテのように発音される。尚、息をとめて発音すれば、アメガ、ハシガ、マイテのように発音される。3モーラ以上の語でも同じ特徴が見られる。3モーラ語はサクラ(桜)、オトコ(男)、ココロ(心)、アタル(当たる)、シロイ(白い)のように発音されるが、これらに助詞が付いた文節が連文節かつ第1文節に置かれた場合はサクラガ(桜が)、オトコガ(男が)、ココロガ(心が)のように発音される。4モーラ語も同様、クチビル(唇)、オトート(弟)、センセイ、アイサツのように発音されるが、これらに助詞が付いた文節が連文節かつ第1音節に置かれた場合はクチビルガ、オトートガ、センセイガ、アイサツガなどのように発音されると述べている。

金田一(1977)が茨城県の水戸三の丸尋高校の高一の女性を対象に行った調査では、2モーラ名詞の場合、単独形は全て $\overline{\text{ソラ}}$ (空)、 $\overline{\text{ヤマ}}$ (山)、 $\overline{\text{タケ}}$ (竹)のように発音されるが、「ガ」が付いて他の文節が続くと、 $\overline{\text{ソラガ}}$ 、 $\overline{\text{ヤマガ}}$ 、 $\overline{\text{タケガ}}$ のように発音される⁸⁶。3モーラ名詞においては単独形では全て $\overline{\text{イノチ}}$ (命)、 $\overline{\text{ウサギ}}$ (兎)などのように発音されるが、「ガ」が伴って次に文節が続くと、 $\overline{\text{イノチガ}}$ 、 $\overline{\text{ウサギガ}}$ などのように発音されるという。

熊本県北部諸方言、米沢方言、愛媛県喜多郡内子町方言、茨城県水戸方言における言い切り形と接続形の特徴をまとめれば、言い切り形は必ず下降が生じ、接続形は下降が現れない点である。これらの方言において言い切り形と接続形の相違を生じさせるのは下降の有無であると解釈できる。

5.3.3.2. 韓国語の場合

韓国語の場合も言い切り形と接続形の相違が見られない方言と見られる方言に分類できる。

言い切り形と接続形の相違が見られない方言は本論文で扱っている4つの方言には存在しない。尚、Fukui(2003)のチョルラ南道諸方言が言い切り形と接続形の相違が見られない方言であると考えられる。しかし、Fukui(2003)ではチョルラ南道諸方言について断片的な記述しかされていない。それに対し、言い切り形と接続形の相違が見られる方言としては、本論文で扱っている4つの方言があげられる。

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の4つの方言の言い切り形ではチョンヤン方言はAパターンとBパターンが現れ、ナジュ方言とソウル方言はAパターン、Bパターン、Cパターンが現れる。コソン方言はD①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンが現れるが、下降の位置から捉えれば、DパターンとEパターンの2種類の音調型が現れると捉えられる。言い切り形では方言によって現れる音調型に相違が見られる。しかし、4つの方言に見られる言い切り形の音調型は全て下降が見られる点に関しては共通している。一方、接続形になると下降が現れなくなるため、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言が1音節目あるいは2音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。チョンヤン方言は1音節目から最後の音節まで高く続く音調型で現れる。このことから4つの方言において言い切り形と接続形の相違を生じさせる要素は下降の有無であると捉えられる。

チョンヤン方言における言い切り形と接続形の例

(106)' a. pap | mak·Λ.ra (ご飯 | 食べる。)

[○] | [○○]◎。

⁸⁶ ソラガ、ヤマガ、タケガのように聞こえる場合があると記述しているが、言い切り形である可能性が高いと考えられる。

- b. ip-i | ka.pjʌp-ta (口-が | 軽-い)
[○○] | [○○]◎。
- c. tʼar.ki-ka | ma.sit-ta (苺-が | おいし-い)
[○○◎] | [○○]◎。
- d. kʰoŋ.na.mur-i | pi.sʼa-ta (豆もやし-が | 高-い)
[○○○○◎] | [○○]◎。

ソウル方言における言い切り形と接続形の例

- (51)ʼ a. nun-i | nok-at.ta (雪-が | 解け-た)
○[◎] | [○○]◎。
- b. na.mu-ka | tu.kʼʌp-ta (木-が | 厚-い)
○[○○]~[○○◎] | ○[○]◎。
- c. kaŋ.a.ŋi-ka | kwi.jʌp-ta (子犬-が | かわい-い)
○[○○◎] | [○○]◎。
- d. hʌ.ri-ka | ku.pu.ŋʌŋ.(h)a-ta (腰-が | 曲がつ-ている)
[○○◎] | ○[○]○○◎~[○○]○○◎。

ナジュ方言における言い切り形と接続形の例

- (70)ʼ a. pjʌ:ŋ-e | kaŋ.rjʌt-ne (病気-に | かかっ-た)
[○:◎] | [○○]◎。
- b. mok-i | ki:r-ta (首-が | 長-い)
[○○] | [○:]◎。
- c. ʌr.kur-i | no.rat-ne (顔色-が | 黄色-いね)
[○○◎] | [○○]◎。
- d. ju.ri.ŋʌŋ-i | kʼɛ.ŋʌt-ta (窓ガラス-が | 割れ-た)
○[○○◎] | [○]◎。

- e. sar.rim-i | nak.nak-ŋhi | mo:t.ha-ta (暮らし-が | 豊か-では | な-い)
[○○◎] | ○[○○] | [○:]○○。

コソソ方言における言い切り形と接続形の例

- (84)'' a. san-i | nop-a.ju (山-が | 高-いです)
○[◎] | ○[◎]◎。

- b. ma.ri-ka | ŋar-pa (髪-が | 短-い)
○[○○] | ○[◎]。

- c. san.twe.ŋi.tur-i | tap-ŋhe (猪-が | 襲い掛か-る)
[○○○○◎] | [○○]。

- d. he.ŋa.o.ri-ka | ŋar | phit-sa (向日葵-が | きれいに | 咲い-たよ。)
[○○○○◎] | [○] | [○○]。

- e. nun.sa.ram | man.tur-ko | nor-at.ji.ju (雪だるま | 作っ-て | 遊ん-でいました)
○[○○] | [○○◎] | [○○◎]◎。

下降の有無によって言い切り形と接続形の相違が生じる特徴は上記の4つの方言のみならず、先行研究で取り上げている殆どの方言にも該当する。尚、下降の有無によって言い切り形と接続形の相違が生じる点に関しては共通しているが、Fukui (2003) のピョンアン道の場合は少し異なる特徴を呈する。この方言は、言い切り形では次末音節のみ高い音調型で現れるが、接続形では最後の音節のみ高い音調型で現れる。

5.3.3.3. まとめ

日韓一型アクセントを言い切り形と接続形の相違の観点から分析を行った。両者とも言い切り形と接続形の相違が見られない方言と見られる方言に分類できる。後者の場合は日韓一型アクセントに共通した特徴が見られ、言い切り形では必ず下降が現れるのに対し、接続形では下降が現れない。即ち、日韓一型アクセントにおける言い切り形と接続形の相違は下降の有無によって生じるのである。

5.4. 本章のまとめ

以上、日韓一型アクセントを音調型の数、音韻構造と音調型の関係、言い切り形と接続形の相違の3つの点から対照考察を行った。

まず、音調型の数から分析すれば、一型アクセントを1種類の音調型のみを有するもの

と複数の音調型を有するものに分類できる。日韓両言語とも両者が全て存在する。日本語の場合、1種類の音調型のみ有する一型アクセントとして宮崎県都城方言と長崎県五島諸方言などがあげられる。それに対し、複数の音調型を有する一型アクセントとして熊本県南部諸方言と同県北部諸方言などがあげられる。一方、韓国語の場合、本論文で取り上げている4つの方言は全て複数の音調型を有する一型アクセントに該当する。これらの方言に見られる複数の音調型は単位の長さや分節音によって現れる音調型の数に相違が見られる。一方、1種類の音調型のみ有する一型アクセントには Fukui (2003) のピョンアン道方言がある。

次に、音韻構造と音調型の関係から分析した場合、音韻構造は分節音と音節構造に分けてさらに分析できる。分節音と音調型の関係については、日本語は分節音が音調型の決定に関与しない方言のみが認められる。それに対し、韓国語は分節音が音調型の決定に関与する方言としない方言に分かれる。関与する方言の場合、方言差は見られるものの、長母音、強子音、弱子音・母音が関与する。一方、音節構造と音調型の関係に関しては、日本語の場合は音節構造が音調型の決定に関与する方言としない方言に分かれる。関与する場合、方言差は見られるが、長音(一)、撥音(ン)、促音(ッ)、二重母音のイが含まれた重音節が音調型の決定に関与する。それに対し、韓国語の場合は管見の限り、全ての方言で音節構造が音調型の決定に関与しないといえる。

最後に、言い切り形と接続形の相違の観点から分析を行えば、両言語とも言い切り形と接続形の相違が見られない方言と見られる方言に分けられる。言い切り形と接続形の相違が見られる場合は両言語とも共通して下降の有無によって言い切り形と接続形の相違が生じる。

第六章 結論

第二章から第五章にかけて述べてきた内容を 6.1 節でまとめる。そして、6.2 節では今後の課題について述べる。

6.1. 本論文のまとめ

本論文では、韓国語諸方言で文節や句において音声的に複数の音調型が現れても音韻的な対立を成していないものを全て韓国語一型アクセントと捉える立場からチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言のそれぞれの音調的特徴を記述・分析した。その上で、4つの方言を比較考察し、韓国語一型アクセントに見られやすい諸特性を取り上げた。また、日韓一型アクセントを対象に対照言語学的考察を行い、両言語に見られる共通点と相違点について取り上げた。

チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言は言い切り形と接続形の相違が見られるため、両者を分けて捉える必要がある。4つの方言に現れる言い切り形の音調型をまとめて示すと、以下のようになる。

A パターン：1 音節目のみ高く現れ、2 音節目以降は低く現れる。

B パターン：1 音節目と 2 音節目は高く現れ、3 音節目以降は低く現れる。2 音節の場合は 2 音節目において音節内下降が現れる。

C パターン：1 音節目と 3 音節目以降は低く現れ、2 音節目は高く現れる。2 音節の場合は 2 音節目において音節内下降が現れる

D①パターン：1 音節目から高く続き、最後の音節が下降調で現れる。

D②パターン：2 音節目から高く続き、最後の音節が下降調で現れる。

E①パターン：1 音節目から次末音節まで高く続き、最後の音節が低く現れる。

E②パターン：2 音節目から次末音節まで高く続き、最後の音節が低く現れる。2 音節では現れない。

チョンヤン方言は A パターンと B パターンの 2 種類の音調型が現れ、ソウル方言とナジュ方言は A パターン、B パターン、C パターンの 3 種類の音調型が現れる。コソン方言は D①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンの 4 種類の音調型が現れる。こ

これらの音調型の出現は語頭の分節音と関わりを持つ。同じ分節音でも現れる音調型に方言差は見られるものの、分節音ごとに現れる音調型の様相を分析してまとめてみると、長母音、強子音、弱子音・母音に分類できる。

- 1) 長母音（語頭子音の種類は関係なし）
- 2) 強子音 - 短母音かつ氣息の強い無声有気音、無声無気音、無声歯茎摩擦音、無声声門摩擦音である場合
- 3) 弱子音・母音 - 短母音かつ氣息の弱い無声有気音、鼻音、流音、接近音である場合と母音始まりの場合

言い切り形で見られる音調型は分節音と音調型の関係、音調型の数から分析できる。

分節音と音調型の関係という点から捉えた場合、本論文で扱っている4つの方言とも分節音が音調型の決定に関与する。尚、4つの方言の2音節には共通して1音節目のみ高い音調型が現れる。チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言ではAパターンに該当し、コソン方言ではD①パターンに該当する。この音調型は言い切り形の特徴が最も反映されたものであるため、2音節で現れるのは決まりきった特徴であり、分節音の影響によるものではない。よって、分節音と音調型の関係を分析する際に除外する必要がある。但し、ナジュ方言の長母音の場合は単位の長さを問わずAパターンが現れるため、分節音の影響によるものと解釈でき、除外しない。チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言における分節音と音調型の関係を明らかにするためには、2音節のAパターンと分節音を問わず現れるBパターンを除外する必要がある。チョンヤン方言の場合、上記の2つの音調型を除外すれば、3音節にAパターンのみ残される。3音節のAパターンは強子音かつ3音節に限って現れるため、分節音のみならず、単位の長さも関与するといえる。ソウル方言の場合、上記の2つの音調型を除外すると、Cパターンのみ残される。Cパターンは弱子音・母音である場合に限って現れるため、弱子音・母音がCパターンの出現の有無に関与すると捉えられる。一方、ナジュ方言の場合、長母音であればAパターンのみ現れるため、長母音がAパターンの出現の有無に関与するといえる。短母音の場合、上記の2つの音調型を除外すると、AパターンとCパターンが残される。Aパターンは強子音に限って現れ、Cパターンは弱子音に限って現れる。そのため、強子音と弱子音・母音はそれぞれAパターンとCパターンの出現の有無に関与すると解釈できる。コソン方言の場合は長母音のみ音調型の決定に関与する。長母音は語頭音節の高さを決定するため、語頭音節が長母音である場合はD①パターンとE①パターンが現れる。

音調型の数から考察した場合、一型アクセントは1種類の音調型のみを有する場合と複数の音調型を有する場合に分けられる。前者はピョンアン道方言が該当し、後者は本論文

の4つの方言が該当する。チョンヤン方言の場合はAパターンとBパターンの2種類の音調型が現れるが、両者が現れるのは強子音かつ3音節の場合のみである。ソウル方言とナジュ方言ではAパターン、Bパターン、Cパターンの3種類の音調型が現れる。ソウル方言は2音節では3種類の音調型が現れ、3音節以上では2種類の音調型が現れる。ナジュ方言の場合は2音節以上では3種類の音調型が現れる。コソン方言ではD①パターン、D②パターン、E①パターン、E②パターンの4種類である。尚、2音節ではE②パターンを除いた3種類の音調型が現れる。

言い切り形と接続形の相違から考察を行うと、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言は共通して下降の有無によって言い切り形と接続形が生じるといえる。

4つの方言に見られる上記の特徴から韓国語一型アクセントに現れやすい5つの特性が挙げられる。尚、特性5)はチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言に見られる特性である。

- 1) 言い切り形と接続形の相違が見られる特性
- 2) 2音節において1音節目のみ高い音調型が現れる特性
- 3) 複数の音調型を持つ特性
- 4) 複数の音調型はその出現において分節音が関与する特性
- 5) Bパターンは分節音の影響を受けない特性

日韓一型アクセントを対象に音調型の数、音韻構造と音調型の関係、言い切り形と接続形の相違の3つの点から対照言語学的考察を行い、以下の結論を得た。

まず、音調型の数から捉えた場合、日韓両言語とも一型アクセントを1種類の音調型のみを有するものと複数の音調型を有するものに分類できる。前者の場合、日本語では宮崎県都城方言と長崎県五島諸方言などがあげられ、韓国語ではピョンアン道方言があげられる。一方、後者の場合、日本語では熊本県南部諸方言と同県北部諸方言などがあげられ、韓国語では本論文で取り上げているチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言の4つの方言が全てあげられる。

次に、音韻構造と音調型の関係に関しては、音韻構造を分節音と音節構造にさらに分けて分析できる。分節音と音調型の関係については、日本語では音調型の決定に分節音が関与しない方言のみ認められる一方、韓国語では音調型の決定に分節音が関与する方言としない方言に分類できる。関与する方言の場合、方言差は見られるが、長母音、強子音、弱子音・母音が関わる。音節構造と音調型の関係については、日本語では音節構造が音調型

の決定に関与する方言としない方言に分かれる。関与する場合、方言によって関わる要素に違いは見られるものの、長音(一)、撥音(ン)、促音(ッ)、二重母音のイが含まれた重音節が音調型の決定に関わる。それに対し、韓国語の場合は管見の限り、全ての方言で音節構造が音調型の決定に関わらない。

最後に、言い切り形と接続形の相違から捉えた場合、両言語とも言い切り形と接続形の相違が見られない方言と見られる方言に分類できる。言い切り形と接続形の相違が見られる場合は両言語とも共通して下降の有無によって言い切り形と接続形の相違が生じる。

6.2. 今後の課題

本論文で扱っている4つの方言は最初の2音節の音調的特徴によって全体の音調型が特徴づけられるものと、次末音節と最後の音節の音調的様相によって全体の音調型が特徴づけられるもののどちらかに該当している。しかし、李華春(2013a、2013b)の中国朝鮮語撫順方言は語頭音節の高さと最後の音節によって全体の音調型が特徴づけられる。この事実は韓国語一型アクセントには本論文の4つの方言とは異なる音調的特徴を有する方言が他にも存在し得る可能性を示唆している。そのため、今後、一型アクセントと予想される方言をできるだけ多く調査・分析していき、韓国語一型アクセントに見られる音調的特徴を全て明らかにする必要がある。

本論文では4つの方言を対象とした。地域別に1つの方言を選別し、調査・分析を行っているが、韓国語一型アクセントの特性として一般化する上で、十分な数であるとは言い難い。そのため、今後、数多くの方言を調査することで、本論文で述べた韓国語一型アクセントにおける5つの特性の一般性を一層明らかにしていかなければならない。

韓国語一型アクセントの言語地理学的分布を明らかにする必要もある。しかし、単なる一型アクセントの分布の究明だけでなく、同じ音調的特徴あるいは類似した音調的特徴を有する一型アクセントがどのような言語地理学的分布を成すかについて究明する必要もある。同じ一型アクセントであっても音調的特徴に相違が見られるからである。本論文で取り上げている4つの方言においては、チョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言は類似した音調的特徴を有し、言語地理学的に韓国の西部に分布している。それに対し、韓国の東部に位置しているコソン方言はチョンヤン方言、ソウル方言、ナジュ方言とは全く異なる特徴を有している。今後、言語地理学的な観点から音調型の分布を検討していかなければならない。

日韓一型アクセントの対照言語学的考察においても、本論文では、音調型の数、音韻構造と音調型の関係、言い切り形と接続形の相違といった3つの観点から分析を行っているが、今後、様々な観点から分析する必要があると考えられる。一方、日本語一型アクセントの場合は先行研究を主に用いたため、韓国語一型アクセントと対等な条件で十分な分析を行えたとは言い難い。日本語一型アクセントにおいても現地調査を行い、韓国語一型アクセントと対等な条件から分析していかなければならない。

〈 参考文献 〉

(日本語で書かれた文献)

- 秋山正次(1983)「8 熊本県の方言」『講座方言学 9 -九州地方の方言-』国書刊行会:207-235
- 李文淑(2005)「全羅南道光州方言の音調について」『東京大学言語学論集』24:115-139
- 李文淑(2007)「全羅道方言から見た韓国語のアクセント変化について」東京大学大学院
人文社会系研究科 基礎文化研究専攻 言語学専門分野 博士学位論文
- 李文淑(2010)「全羅道方言アクセントの再考察」『東京大学言語学論集』29:139-153
- 李連珠(2005)「韓国語大邱方言におけるアクセント単位の認定基準」日本言語学会 131 回
大会 予稿集:78-83
- 李連珠(2015)「韓国語諸方言における名詞アクセントの対応関係から窺えるアクセント特
質」『北海道方言研究会会報』92:100-111
- 李連珠(2016)「韓国語諸方言アクセントの記述と比較(Description and comparison of
accent in Korean dialects)」International Workshop: Descriptive and
Contrastive analysis on Languages of Northeast Eurasia (国際ワークシ
ョップ「北東ユーラシア諸言語の記述と対照」Niigata University,JAPAN)
発表レジュメ
- 岩本実(1983)「10 宮崎県の方言」『講座方言学 9 -九州地方の方言-』国書刊行:267-293
- 上野善道(1977)「日本語のアクセント」『岩波講座 日本語 5 音韻』岩波書店:281-321
- 上野善道(1984)「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 第2巻 記述的
研究篇』明治書院:167-209
- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」『講座 日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音
韻 上』明治書院:178-205
- 上野善道(1993)「日本語の方言アクセントとイントネーション」『国際化する日本語話し
言葉の科学と音声教育』第7回大学と科学公開シンポジウム組織委員会
編、クバプロ:44-66
- 上野善道(1996)「複数のアクセント単位からなる複合語」『言語』25-11 大修館書店:57-63
- 上野善道(2009)「服部音韻論の再評価」『東京大学言語学論集』28:219-243
- 上野善道(2011a)「N型アクセントとは何か」公開シンポジウム N型アクセントの原理と
成立 発表レジュメ
- 上野善道(2011b)「アクセント単位」『音声学基本辞典』城生伯太郎他編著 勉誠出版:320-323
- 上野善道(2012)「N型アクセントとは何か」『音声研究』16-1:44-62
- 岡野信子(1983)「3 福岡県の方言」『講座方言学 9 -九州地方の方言-』国書刊行会:57-86
- 尾崎喜光(1984)「無アクセントの方言における「核的下降」」北大言語学研究報告 1:1-40
- 姜英淑(2008)「韓国語慶尚南道諸方言のアクセント研究」東京大学 人文社会系研究科
博士学位論文

- 木部暢子(2009)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版
- 金田一春彦(1948)「一型アクセントについての考察」『日本列島方言叢書⑤ 関東方言考① 関東一般・茨城県・栃木県』(『コトバ』復刊7号所収) ゆまに書房 :257-262
- 金田一春彦(1956)「柴田君の「日本語のアクセント体系」を読んで」『日本語の言語学 第二巻 音韻』(『国語学』26所収):443-468
- 金田一春彦(1977)『日本語方言の研究』東京堂出版
- 久保智之(1993)「疑問詞のスコープを表す高く平らなピッチ - 朝鮮語釜山方言・晋州方言についての報告-」『アジア・アフリカ文法研究』22:93-108
- 佐藤久美子(2013)『小林方言とトルコ語のプロソディー - 一型アクセント言語の共通点-』(財)九州大学出版会
- 佐藤亮一(1980)「一型アクセント」『国語学大辞典』理想社:27-28
- 柴田武(1955)「日本語のアクセント体系」『日本語の言語学 第二巻 音韻』(『国語学』21所収):404-442
- 柴田武(1957)「アクセント論のために -金田一春彦に答える-」『日本語の言語学 第二巻 音韻』(『国語学』29所収):469-484
- 孫在賢(2005a)「韓国語のアクセントタイプと分類」日本言語学会 第130回大会 予稿集 :74-79
- 孫在賢(2005b)「韓国語大邱・慶州方言の用言のアクセント」『東京大学言語学論集』24 :159-169
- 孫在賢(2007a)「韓国語諸方言アクセントの記述研究」東京大学人文社会系研究科 基礎文化研究専攻 言語学専門分野 博士学位論文
- 孫在賢(2007b)「韓国全羅南道光州方言のアクセント」『音声研究』11-3:87-93
- 孫在賢(2012)「韓国語光陽方言のアクセント」日本言語学会 第144回大会 予稿集:98-103
- 崔鉉鎮(2011)「韓国語青陽方言のアクセント研究」北海道大学大学院 文学研究科 言語文学専攻 修士学位論文
- 崔鉉鎮(2013a)「韓国語江陵方言の名詞のアクセント体系」日韓次世代学術フォーラム10周年記念国際学術大会 予稿集:157-160
- 崔鉉鎮(2013b)「韓国語一型アクセントに関する研究 -忠清道青陽方言を中心に-」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』13:303-319
- 崔鉉鎮(2015)「韓国語一型アクセントにおけるアクセント単位の認定と特質」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』15:213-228
- 崔鉉鎮(2016a)「韓国語ナジュ方言のアクセント (Accent in the Naju dialect of Korean)」International Workshop: Descriptive and Contrastive analysis on Languages of Northeast Eurasia (国際ワークショップ「北東ユーラシア諸言語の記述と対照」Niigata University,JAPAN) 発表レジュメ

- 崔鉉鎮(2016b)「日韓一型アクセントにおける分節音と音調型の関係」韓国日本文化学会
第51回 国際学術大会 予稿集:82-87
- 全鎬環(2004)「釜山方言の外来語アクセントを決めるもの：分節音の情報と音節構造」
日本言語学会 第129回大会 予稿集:123-128
- 寺田泰政(1957)「大井川流域方言の概観」『国語研究』6:32-44
- 長渡陽一(2003)「朝鮮語ソウル方言の音節頭子音と名詞の音調形」『音声研究』7-2:114-128
- 服部四郎(1931)「国語諸方言のアクセント概観(四)」『方言 2』2-1 春陽堂刊:1-12
- 服部四郎(1954)「音韻論から見た国語のアクセント」『国語研究』2-3:241-275
- 服部四郎(1973)「アクセント素とは何か？そしてその弁別的特徴とは？-日本語の“高さアクセント”は単語の一種であって、“調素”の単なる連続にあらず-」
『言語の科学』4:1-60
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』大修館書店
- 早野慎吾(2006)「無アクセントの比較研究：栃木・茨城アクセントと宮崎アクセントの比較」『地域文化研究』1:23-32
- 平山輝男(1936)「南九州アクセントの研究(二)」『方言』6-5 春陽堂刊:50-63
- 平山輝男(1940a)『全日本アクセントの諸相』育英書院
- 平山輝男(1940b)「四國アクセントとその境界線」『音声学協会会報』64:10-19
- 平山輝男(1940c)「奥羽アクセントの諸相(下)」『日本列島方言叢書② 東北方言考① 東北一般・青森県』(『文化』7-11 所収) ゆまに書房:144-164
- 平山輝男(1944)「日本語アクセントの統合 -特に一型アクセントと曖昧アクセントを中心として-」『橋本博士還暦記念 国語学論集』岩波書店:155-182
- 平山輝男(1951)『九州方言音調の研究』学界之指針社
- 平山輝男(1953)「福井県北方言の音調とその境界線」『音声学協会会報』83:1-4
- 平山輝男(1957)『日本語音調の研究』明治書院
- 平山輝男(1974)「諸県(もろかた)方言の音調研究」『九州方言考④』(『音声学世界論文集』12 所収) ゆまに書房:252-259
- 平山輝男(1975)「薩隅・諸県方言」『現代日本語の音声と方言 新・日本語講座 3』
汐文社:252 - 275
- 平山輝男(1986)「日本語アクセントの将来」『論集 日本語研究 10 方言』有精堂:33-43
- 福井玲(1998)「全羅南道光陽市津上面のアクセント」『アジア・アフリカ文法研究』27:75-113
- 福井玲(2001)「韓国語のアクセント」『音声研究』5-1:11-17
- 福井玲(2013)『韓国語音韻史の探究』三省堂
- 古瀬順一(1983)「7 五島の方言」『講座方言学 9 -九州地方の方言-』国書刊行会:173-206
- 森下喜一(1984)「3 栃木県の方言」『講座方言学 5 -関東地方の方言-』国書刊行会:51-78
- 李華春(2013a)「中国朝鮮語撫順方言におけるアクセント考察」日本音声学第27回全国大会 予稿集:125-130

- 李華春(2013b)「中国朝鮮語撫順方言におけるアクセント研究」北海道大学大学院 文学研究科 言語文学専攻 修士学位論文
- 山口幸洋(1998)『日本語方言一型アクセントの研究』 ひつじ書房
- 吉田則夫(1982)「14 高知県の方言」『講座方言学 8 -中国・四国地方の方言-』国書刊行会 :425-450
- 渡辺富美雄(1973)「新潟県及び福島県境地域の方言アクセントの境界について」『日本列島方言叢書⑤ 北陸方言考① 北陸一般・新潟県』（『都大論究』所収）ゆまに書房:102-111

(韓国語で書かれた文献)

- イ・サンジク[이상직] (1987)「한국어 액센트에 대한 재검토 -운율 음운론을 중심으로-」『말소리』 11-14:133-148
「韓国語アクセントについての再検討 -韻律音韻論を中心-」『マルソリ』
- イ・スンニョン[이승녕] (1960)「현대 서울말의 accent 고찰」『국어학논고』 4:177-227
「現代ソウル語の accent 考察」『国語学論考』
- イ・ヒョンボク[이현복] (1973)「현대 한국어의 Accent」『서울대학교 문리대학보』 19 :113-128
「現代韓国語の Accent」『ソウル大学校文理大学報』
- イ・ホヨン[이호영] (1987)「현대 한국어의 액센트에 관한 연구」서울대학교 대학원석사 학위논문
「現代韓国語のアクセントに関する研究」ソウル大学校大学院 修士学位論文
- キム・チャギョン[김차균] (1969)「전남방언의 성조」『한글』 144:142-171
「全南方言の声調」『ハングル』
- キム・チャギョン[김차균] (1975)「영남 영동 방언의 성조」『한글』 115 : 33-73
「嶺南・嶺東方言の声調」『ハングル』
- キム・チャギョン[김차균] (1980)『경상도 방언의 성조 체계』 과학사
『慶尚道方言の声調体系』 科学社
- キム・チャギョン[김차균] (1999)『우리말 방언 성조의 비교』 역락
『ウリマル方言声調の比較』 亦樂
- キム・ヨン만[김영만] (1986)「國語超分節音素의 史的研究」高麗大學校大學院 國語國文學科 博士學位論文
「国語超分節音素の史的研究」高麗大学大学院 国語国文学科 博士学位論文

チョン・インソプ[정인섭](1965) 「우리말 액센트는 고저액센트다」 『중앙대학교논문집』 10
:1-50

「ウルマルのアクセントは高低アクセントだ」『中央大学校
論文集』

(英語で書かれた文献)

Fukui, Rei (2003) 「Pitch Accent Systems in Korean」 『Proceeding of the Symposium
CROSS-LINGUISTIC STUDIES OF TONAL PHENOMENA
Historical Development, Phonetics of Tone, and Descriptive Studies』
:275-286

Uwano, Zendo (1999) 「Classifications of Japanese Accent Systems」 Proceedings of the
Symposium “Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena,
Tonogenesis, Typology, and Related Topics” :151-186

〈 謝辞 〉

この論文は多くの方々の力添えがあったからこそ書き上げられたと思います。

まず、指導教員である李連珠先生にこの場を借りて心より御礼申し上げたいと思います。李先生は韓国語のアクセントについて全く知らなかった私にアクセントを基礎から丁寧に教えてくださいました。また、研究が大変で挫折しそうになった時には優しく励ましてくださいました。アクセントに対する興味を持ち続けることができたのはひとえに李先生のおかげです。李先生には学問的なご指導以外にも様々なことを教えていただきました。特に、野外調査の際には調査に応じてくださったインフォーマントの方への感謝や配慮を忘れないよう常に教えていただきました。学問的な成長と共に人間としても少し成長できたと思います。その他にも李先生には感謝しきれないほど、様々な面においてご指導いただきました。改めて感謝申し上げます。

次に、私の所属している言語情報学講座の先生方や研究室の仲間に感謝を申し上げたいと思います。当講座の教授である小野芳彦先生、池田証壽先生、佐藤知己先生、加藤重広先生にはいつも貴重なコメントとご指摘を賜りました。また、同じ研究室の仲間にも色々と助けていただきました。特に、岸本宜久さんには日ごろより日本語の不備を細かくチェックしていただきました。

また、各方言の音声資料を収集する際に快く調査に応じてくださった多くのインフォーマントの方々のおかげで、良質のデータを収集することができました。インフォーマントの方々にも感謝申し上げます。

最後になりますが、家族の支えと励ましがなければ、博士論文を書き上げることができなかったと思います。故郷、韓国から常に精神的・経済的に私を支え続けてきてくれた家族に深く感謝をしたいと思います。